

ジャック・ヴォス：天目が開かれた修煉者の語りに  
基づいて

# 我々以前

BEFORE US

地球という舞台で繰り広げられた二億年  
の史劇

 THE LIVES  
MEDIA®

# 我々以前

(BEFORE US)

地球という舞台で繰り広げられた二億年の  
史劇

著者：ジャック・ヴォス記者が、天目（てんもく）が開  
かれたある精神修煉者の語りに基づき執筆。

---

Copyright © 2025 THE LIVES MEDIA。すべての権利を  
保有します。無断複製を禁じます。

# 編集部注

本書は、実在の物語、出来事、背景に基づいて執筆されています。しかし、個人のプライバシーを尊重し、特定の方々への影響を避けるため、登場人物の名前や一部の個人を特定しうる情報は、文学的な形式のもとで変更、簡略化、または再構成されています。

本書の一部には、当事者の個人的な視点から語られた部分があり、それはその時点での彼ら自身の体験と認識を反映したものです。これらの見解は、必ずしも THE LIVES MEDIA の立場と一致するものではありません。

文章表現については、編集部が必要な修正を加えましたが、原作の登場人物を尊重し、物語の精神と躍動感を保つため、私たちは登場人物の本来の素朴な語り口を最大限に維持するよう努めました。

## 編集部





# はじめに

歴史、考古学、そして未解明な現象を専門とする国際ジャーナリストとしての人生は、私を多くの遠い地へと導き、数え切れないほどの奇妙な物語や、常識的な理解をすべて覆すような古代の遺跡との遭遇をもたらした。エジプトの砂漠にそびえ立つピラミッドから、ヨーロッパの神秘的なストーンサークル、南米のジャングルに消えた失われた都市まで、どの旅も答えより多くの問いを私の心に投げかけた。過去の断片を深く探求すればするほど、私は文字として記録された歴史の限界をより明確に感じ、そして、人類は、我々が知るよりもはるかに輝かしく、また悲壮な時代を経験してきたのかもしれないという、漠然とした思いが募っていった。

失われた文明の謎、その時代にはそぐわないと思われる技術の謎、荒唐無稽に思えるが否定しがたい真実の核を持つ伝説の謎が、私を絶えず探し求めるよう駆り立て、心から離れなかった。そして、その衝動こそが、同僚や情熱的な研究者たちからのいくつかの曖昧な手がかりと

共に、私の足をカトマンズ、ネパールへと向かわせた。そこは神秘的なヒマラヤ地方の中心地であり、多くの古代の知識と特別な能力を持つ人々が今なお存在すると言われている場所だ。

苔むした寺院と厳かな読経の声の間に時間が止まったかのような、この古風で静寂な街の雰囲気の中で、私は奇妙な縁に恵まれた。それは、誰もが想像する以上に深い次元に触れる話を聞く機会だった。その出会いは、街の喧騒から離れた静かな路地に佇む、一軒の小さな家で実現した。内部は質素で、ハーブティーの香りと穏やかな沈香の香りが漂い、不思議なほど静謐な雰囲気を醸し出していた。私の前に座っていた男性、その人を私は親しみを込めてモハンという愛称で呼ばせていただく。彼の本名は現地の言葉で、私のような外国人にはかなり長く複雑であり、さらに重要なことに、彼自身が自分の個人情報に注目の的になることを望んでいないようだった。

モハン氏は五十代半ばで、非凡な過去を持つ。イギリスでの医学留学、中国での二十年間の仕事と経験を経て、五十歳で故郷のネパールに帰ることを決意した。現在は、世俗の中で静かに修煉するという質素な生活を選んでいる。しかし、彼を特別な存在にしているのは、彼が持つ

非凡な能力、すなわち、開かれた天目であった。それによって彼は、書物や推測を通してではなく、地球の数億年にわたる歴史の流れを直接「見る」こと、つまり「目撃する」ことができるのだ。かつて栄華を極めては跡形もなく消え去った文明、この惑星にかつて存在した生命体、そして、我々の存在のはるか、はるか以前から存在していた宇宙の秘密を。

彼の態度は、西洋と東洋の多くの文化に触れたことのある人物ならではの開放的で現代的な特徴を保っていたが、その瞳には、まるでさざ波一つない湖面が空全体を映し出すかのように、言葉では言い表せない静けさと深遠さが宿っていた。私たちの対話の間、彼が語る内容がいかに驚天動地のものであっても、その声は常に穏やかで落ち着いていた。

以下に記録されたものは、モハン氏によって明かされた古代の記憶の原文です。これらはいかなる科学的学説や信仰とも正誤を争うことを目的としたものではありません。単に、これは一つの分かち合いであり、熟考へのいざないであり、読者一人ひとりが自ら感じ、自分自身の有意義なメッセージを見出すためのものです。



**ジャック・ヴォス (Jack Voss)**

THE LIVES MEDIA

\* \* \*

# 一日目

---

## モハン氏の語りの始まり

ジャック・ヴォス (Jack Voss) :

こんばんは、モハンさん！

先日はお約束しました通り、本日、あなたが天目（てんもく）を通してご覧になった、あるいは神仏から啓示を受けられたという、地球の現在と過去の歴史についてお話を伺いに参りました…

**モハン** (Mr Mohan) :

（穏やかに微笑み、モハン氏の声は低く、落ち着いている。彼はジャックに、ネパールの山々の香りがするハーブティーを注いで勧める。）

こんにちは、ジャックさん。どうぞお座りください。淹れたてのお茶です。カトマンズの夜はいつもこのように静かで、心を落ち着けて語り合うにはとても良いものですね。

おっしゃる通りです。これから私がお話しすることは、書物の知識や単なる個人的な推論ではありません。それは私が幸運にも自らの修煉の過程で「見させて」いただき、「目撃させて」いただいた事柄であり、人々が言うところの天目を通して、あるいは精神がある一定の静けさに達した時に、啓示を受けるかのように自ずと現れる映像や情報の流れなのです。

〔モハンは少し間を置き、誠実な眼差しでジャックを見る。〕

以前にもお話ししましたが、私は誰かを説得するつもりはありませんし、いかなる学説とも正誤を争うつもりもありません。ただ、自分が体験した物語を語る人、あるいは自分が見た絵画について語る人のように、知っていることを分かち合いたいだけです。それをどう感じ、どう捉えるかは、完全に各人にお任せします。

さて、ジャックさん、この地球と宇宙の広大な物語について、どこから始めましょうか？

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

はい、ではおそらく最も概括的な視点から、地球の歴史について、その「寿命」はどれくらいなのでしょう？ 現代科学が認識しているように、約 45 億年というのは正しいのでしょうか？

**モハン：**

（お茶を一口すすり、モハン氏の眼差しは、まるで見えない歴史のページをめくっているかのように、遠くを見つめる。）

ええ、ジャックさん、それは始めるにあたって非常に興味深い質問です。現代科学が提示する 45 億年という数字は、私の見るところによれば、この惑星を構成する物質の塊、つまり、それ以前の異なる宇宙の層が繰り返してきた多くの「成（じょう）・住（じゅう）・壊（え）・滅（めつ）」の周期を通じて、宇宙に非常に長い間存在してきた「原材料」の年齢です。それはまるで、新しい家を建てるために使われる古いレンガや木材の年齢のようなものです。

〔モハンは一息つき、分かりやすい表現を探す。〕

しかし、もし私たちが現在の地球の「生命のプログラム」について話すのであれば、つまり、地球が明確な目的を持って形成され、霊的な知性を持つ生命が存在し、神々の関与と采配があり、生命に特有の法則が働く段階について言えば、その期間はもっとずっと短いのです。私の「見た」ところでは、私たちが今この地球で経験している「生命のプログラム」は、およそ 2 億年前に始まりました。

こう想像してみてください、ジャックさん。この広大な宇宙には無数の層があり、各層にはそれぞれの存在周期があります。古い宇宙の周期が終わった後、神々は、私たちが仮に創世主と呼ぶことのできる、さらに偉大な意志の導きの下、その古い宇宙から残された「原材料」、つまり 45 億歳かそれ以上の年齢の物質粒子を使って、「掃除」し、「再生」し、私たちの地球を含む新しい空間のための新しいサイクルを始動させたのです。

ですから、45 億年というのは「物質的な基盤」の年齢であり、2 億年というのは、この地球が特定の使命とシナリオをもって「起動」され、私たちが知るような魂を持つ生命が存在するようになった期間なのです。これは特別な段階であり、宇宙の重要な出来事のために準備された舞台なのです。

[モハンは軽く微笑む。]

お分かりでしょう、私たちが教科書で学ぶ歴史は、たとえば数千年や数万年であっても、この 2 億年の流れの中では、実は非常に、非常に短い瞬間に過ぎないのです。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

では、あなたが「見た」ところによると、地球の「生命のプログラム」はわずか 2 億年前に始まったのであって、45 億年の歴史全体に私たちが知るような生命が存在したわけではないのですね？そして、地球は自然の条件によって自ら形成されたのではなく、多くの異なる「原材料」から神々によって創造されたと…

**モハン：**

（注意深く耳を傾け、軽く頷く。）

ジャックさん、要約は非常に的確ですが、誤解を避けるためにもう少し明確にさせていただきたい点が一つだけあります。

私が 45 億年という数字を完全に否定しているわけではありません。その数字にはそれなりの意味があり、私が述べたように、それは神々が使用した基本的な物質粒子、古い「レンガ」の年齢なのです。それは古い寺院の木材の年齢について話すようなもので、木材は寺院の建設に使われる何百年も前から存在していたかもしれません。

私が強調したいのは、現在の地球の「生命のプログラム」、魂を持つ生命体のための特定の目的と采配がなされたこの「舞台」は、実質的に約 2 億年前に始まったということです。これは、地球が、より至高で慈悲深い意志の導きのもと、神々によって古代の宇宙の「原材料」から「再構築」され、「魂を吹き込まれた」時なのです。

地球が偶然の自然条件によって形成されたのではなく、創造されたという点については、まさにご理解の通り、それが私の「見た」ものです。生命、特に霊的な知性を持つ生命にとって完璧な条件を備えた惑星の形成は、偶然の産物ではありません。それはより大きな計画、創造主たちによる精巧な采配の一部なのです。

[モハンは一息つき、空になった茶碗に目をやる。]

もちろん、これらは依然として私が自身の境地から「目撃した」事柄です。科学はこれからさらに多くのことを発見するでしょうし、それぞれの探求の道には独自の価値があります。

\* \* \*



**ジャック・ヴォス：**

では、2 億年前に地球が創造された後、人類や動植物も同時に創造されたのですか？

**モハン：**

（微笑みながら、彼は茶碗をテーブルに置く。）

ジャックさんのこの質問は、地球上の「生命のプログラム」の非常に深く複雑な側面に触れていますね。

私たちが今日知っているすべての人類、動物、植物が、2 億年前のその瞬間に一度に創造され、そのままの姿を保ってきたわけでは必ずしもありません。そのプロセスはもっと精巧で動的なものなのです。

〔モハンは少し考え込み、言葉を選ぶ。〕

その 2 億年間が多くの大周期に分かれ、各大周期の中にはさらに無数の小さな文明の小周期が存在すると想像してみてください。各段階、各周期において、神々は環境条件、その段階の特定の目的、そしてその時の地球の主要な生命体の道徳や認識のレベルに適した生命体を采配し、創造されました。

植物と動物について言えば、彼らは先に、徐々に創造され、バランスの取れた生態系、適した生活環境を形成しました。種にも変化があり、地球の変動と神の采配に応じて、出現しては消えていった種もいます。巨大な恐竜や古代の奇妙な生物がすべて同時に存在したわけではなく、また、多くの人が理解しているような「偶然の進化」の結果でもありません。

そして「人間」についてですが、これは注意が必要な点です。「人間」という概念も、現在の私たちのような単一の固定された形態ではありませんでした。その 2 億年の間に、姿、大きさ、寿命、能力が大きく異なる非常に多くの異なる人種が地球上に存在しました。巨人や小人の時代があり、今日私たちが「超人的」と考えるような特徴を持つ人種もありました。それらの人種もまた、特定の時期に、特定の目的のために神によって創造され、発展、繁栄、そして衰退、壊滅を経て、新しい周期に道を譲るという過程を経験しました。

ですから、2 億年前に地球が「再生」され、「生命のプログラムが起動」した後、様々な「人間」の形態や動植物を含む生命は、一斉に不変の形で出現したのではなく、段階的に、層をなして順次、種が蒔かれ発展してきたと

言えるでしょう。それは、創造主たちが多くの異なる季節を通して絶えず種を蒔き、世話をし、収穫する広大な宇宙の庭園のようなものです。

最初の生命体は私たちとは大きく異なっていたかもしれませんが、地球上の生命の歴史は、完全に忘れ去られた多くの章を持つ、非常に豊かで多様な絵画なのです。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

つまり、2 億年間というのは連続したプロセスではなく、それぞれに多様性と盛衰のある多くの異なる周期を経てきたということですね？！これらの周期について概説していただけますか？

**モハン：**

（頷き、その眼差しはジャック・ヴォスの理解に同意を示している。彼は少し間を置き、その目は遠くを見つめ、まるで宇宙の见えない歴史のページをめくっているかの

ようだ。語り始める前に、彼の顔には一瞬、物思いに沈む表情が浮かんだ。)

ええ、ジャックさんは私の意図を非常によく捉えてくださいました。地球の「生命のプログラム」の 2 億年の歴史は、ある始点から今日まで続く単調で連続的な流れではありません。それは多くの大小の周期が織りなす、非常に複雑な絵画であり、それぞれの周期が連続し、それぞれに盛衰、特徴、そして非常にユニークな生命形態が存在するのです。

その歴史の流れの映像が浮かび上がってくるとき、私が最初に感じるのは、息をのむほどの壮大さであり、同時に胸が張り裂けるような悲壮感です。それはまるで、無限の海の前に立ち、無数の波が盛り上がっては消えていくのを目撃するようなものです。一つ一つの波が一つの文明であり、一つの生命体であり、一つの物語なのです…。

分かりやすくするために、その 200 万年を二つの主要な大周期に分けてみましょう。それぞれの大周期は約 1 億年続き、この地球の叙事詩における二つの大きな章、二つの極めて重要な幕のようです。

第一の大周期は、より初期の時代で、地球が神々によって古代の宇宙の「原材料」から再生された後のことです。その時の地球は、ジャックさん、今とは全く異なる様相を呈していました。大気の成分が違っていたかもしれませんし、大陸も現在のように形成されていなかったかもしれません。そして生命形態も、今日の私たちが奇妙、あるいは想像を絶すると考えるような特徴を持っていました。私は「見た」のです、巨大な植物が生い茂る原生林や、断片的な化石でしか知らない巨大な生物たちがいましたが、彼らは単なる無知な獣ではなく、それぞれ独自の霊的な知性を持っていました。

その第一の大周期においても、異なる「人間」の種族による文明が出現し、輝かしい頂点に達しては、また衰退していきました。彼らの科学技術が、私たちとは全く異なる原理に基づき、おそらく今日の私たちが夢見ることもしかないような成果を達成した時代もありました。しかし、世の常として、道徳が顧みられなくなり、利己主義と野望が当初の善良な価値観を覆い尽くしたとき、破壊が訪れました。第一の大周期は、全く新しい始まりの準備のために、極めて全面的な「大浄化」、ほぼ完全な一掃をもって幕を閉じました。その規模の破壊を目の当たりにして、私は宇宙の力の前での生命の矮小さと、万

物を支配する法則の厳格さと同時に慈悲深さを感じずにはいられませんでした。

〔モハンは少し間を置き、感情が落ち着くのを待ってから続ける。〕

そして第二の大周期、これが私たちが今生きている大周期で、これも約 1 億年続きます。第一の大周期の壊滅の後、神々は、私たちが創世主と呼ぶことのできる、さらに偉大な意志の導きの下、再び地球を再生させました。新しい「生命のプログラム」が再び始動し、新しい生命形態、新しい「人間」の種族、そして新しい歴史のシナリオが展開されました。

この第二の大周期においても、無数の文明の小周期が続き、古代の巨木が季節ごとに葉を変えるように、栄えては滅びていきました。どの文明も、どれほど輝かしくとも、どれほど長く続こうとも、最終的には無常の法則から逃れることはできませんでした。それらのことを「見た」とき、私は物質に属するものの儚さと、精神的な価値、道徳的な価値の重要性をより深く理解しました。なぜなら、それこそが文明を真に永続させ、あるいは少なくとも良い足跡を残す助けとなるものだからです。

「モハンは少し間を置き、ジャック・ヴォスが受け止める時間を与える。」

これらの文明の小周期について言えば、実に多種多様です。以前お話ししたように、そのほとんどは通常 5,000 年から 10,000 年ほど続きますが、それより短い、あるいははるかに長く続く文明もありました。それは、その中の生命体の道徳レベルや神仏への敬意に依存します。

私がこれらの小周期のほとんどで見出した共通の法則は次の通りです。

まず啓発から始まります。それは純朴さから始まり、人間や霊的な知性を持つ生命体が、神や真の修煉者によって導かれ、宇宙に関する道理や理解を授けられる時です。

それから徐々に発展します。その道徳的な基盤の上に、社会は文化、芸術、そして（私たちとは必ずしも同じではない、彼ら独自の方法での）科学技術の両面で輝かしく発展します。

その後、次第に墮落していきます。時が経つにつれて物質はますます豊かになり、人々は徐々に当初の教えから

離れ、道徳は滑り落ち、利己主義、貪欲、争いが台頭します。

そして最後に壊滅の段階に至ります。道徳が救いようのないレベルまで墮落した時、天災、戦争、あるいは他の宇宙的な出来事といった災厄が訪れ、その文明の終わりをもたらすのです。その後、地球は新しい小周期の準備のために、ある程度「浄化」されます。

こうして、次から次へと文明の層が現れては消え、時間の海に浮かぶ波のように繰り返されるのです。各文明は何らかの痕跡を残しますが、それが物質的なものであれ非物質的なものであれ、その大部分は埋もれたり失われたりしてしまいました。

私たち、現在のこの人類文明も、その無数の小周期の一つに過ぎず、この第二の大周期の最終段階にいるのです。

〔モハンはジャックを見つめ、この全体像について何か追加の質問があるかどうかをうかがうようにする。〕

\* \* \*



**ジャック・ヴォス：**

もし各文明周期が通常 5,000 年から 10,000 年しか存在せず、その後、神の采配によって一度「リセット」されるのであれば、なぜ私たちが今日、人類の歴史が実際に記録されていると感じるのは、せいぜいここ 5,000 年ほどのことなのか、という理由も説明がつかますね？！

**モハン：**

（頷き、彼の唇にはかすかな笑みが浮かぶ。）

ジャックさんは、実に物事を結びつける能力に長けていますね。ええ、あなたがおっしゃったことはまさに、私たちが歴史をこのように捉える際の論理的な帰結の一つです。

ほとんどの文明の小周期が 5,000 年から 10,000 年しか続かず、その後、「再建」あるいは「リセット」を経験するという事実——それが大規模なものであれ小規模なものであれ、完全な破壊であれ、あるいは単に主要な文明が崩壊して新たな始まりに道を譲るものであれ——は、私たち人類の歴史的記憶が「断絶」し、比較的明確

な形で残っているのが過去 5,000 年ほどに限られている重要な理由の一つなのです。

〔モハンはさらに説明を加える。〕

想像してみてください。

**物質的な破壊について：**文明が終わるたびに、特にそれが大災害であった場合、建築物、文書、遺物などの大部分は破壊され、埋もれ、あるいは失われます。ごく一部だけが、通常は人里離れた場所で、あるいは奇跡的に保存されて残ることがあります。

**知識伝承の断絶について：**大きな変動を生き延びた人々は、しばしば生存に集中するため、ゼロから始めなければなりません。古い文明の知識、技術、そして歴史さえもその大部分が失われる可能性があります。残されたものは、しばしば伝説、神話、あるいは何世代にもわたって口伝えで伝えられ、次第に歪められた曖昧な記憶の断片だけです。

**神の采配について：**前の周期の記憶の一部を「消去」すること自体が、神の采配の一部である場合もあります。それは、新しい周期の生命体が過去の成功や失敗に過度

に影響されることなく、「白紙の状態」から自由に選択し、新しい方向性に従って発展できるようにするためです。

**そして、現在の研究方法の限界について：**私たちの現在の考古学や歴史学の方法は、非常に発展しているとはいえ、あまりにも古いものを探求し解読するには一定の限界があります。特に、物質的な痕跡がほとんど残っていないか、アクセスが非常に困難な場合はなおさらです。

ですから、私たちの文字による歴史が約 5,000 年前に明確になり始めたように見えるのは、それ以前に何もなかったからではなく、ただ私たちが、消し去られた歴史の章を「読む」ための十分な道具や縁にまだ恵まれていないだけなのです。

実際には、2 億年の間に、今日の私たちが想像もつかないような科学技術と精神的な成果を伴った、私たちよりはるかに輝かしい無数の文明が存在しました。ただ、リセットされるたびに、過去の幕が下ろされるのです。

[モハンは窓の外、月が輝き始めた空を見やる。]

あの月もまた、ジャックさん、これほど多くの周期の静かな証人なのです。おそらく、月もまた、私たちがまだ知らない地球の多くの秘密を保持していることでしょう。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

ということは、聖書にあるノアの箱舟の物語と大洪水は実在し、それは前の周期を終わらせ、現在の周期を開くための一つの形だったということですか？

**モハン：**

（モハン氏の眼差しは少し遠くなり、まるで古代のフィルムを見返しているかのようだ。）

はい、ジャックさん。聖書に記録されている大洪水とノアの箱舟の物語、そして世界中の非常に多くの古代文化の神話——シュメール、ギリシャ、インド、中国からアメリカ大陸やオーストラリアの先住民族に至るまで——における世界規模の大洪水に関する同様の伝説は、いずれも単なる作り話ではありません。

私の「見た」ところでは、それは実際に起こった出来事の残された記憶であり、地球の歴史に新たな段階を開き、以前の大きな文明周期の終わりを告げた、地球規模の大災害でした。

〔モハンはさらに詳しく説明する。〕

地球の 2 億年の長い歴史の中で、破壊的な大災害は洪水だけでなく、何度も起こったことを理解する必要があります。それは強力な地殻変動、地球の地軸の変動、天体の衝突、あるいは異なる勢力間の大戦争であったかもしれません…。その都度、それは一種の「浄化」と「再建」の形をとりました。ノアの物語が言及する大洪水はそのような出来事の一つであり、おそらく私たちの現在の文明周期に最も近い大きな出来事であったため、その記憶が多く文化で比較的鮮明に保存されているのでしょう。

これらの大災害は、自然の偶然の、あるいは残酷な罰ではありません。それらは通常、人間（あるいはその時の地球上の主要な生命体）の道徳が救いようのないレベルまで墮落し、彼らが神の教えからあまりにも遠ざかり、罪と相互破壊にふけた時に起こります。その時、残さ

れた善良な種を保存し、新たな始まりの機会を創出するために、神々は「大浄化」を采配されるのです。

ノアとその家族が神によって生き残るために選ばれたのは偶然ではありません。彼らは、退廃した世界の中で、善良さ、信仰、そして神への畏敬の念を保ち続けた人々を代表していました。その箱舟は、ある意味で、選択の象徴です——善良な心性を保った者だけが、新しい周期へと進む機会を与えられるのです。舟に乗せられた動物たちもまた、大災害後の新しい生命のための遺伝子源、つまり「種」を保存するためでした。

その大洪水の後、地球は再生の段階に入りました。生存者たちは新しい文明周期——まさに私たちが生きている周期——の各民族の祖先となりました。私たちが知る約5,000年の文字による歴史は、この大きな「リセット」イベントの後に始まったと考えることができます。

ですから、聖書の物語は、何世代にもわたって解釈されたり付け加えられたりしたかもしれませんが、その核心は重要な歴史的事実、地球上の文明の流れにおける大きな転換点を反映しています。それは盛衰の法則、道徳の重要性、そして人類の歴史への神の介入を思い起こさせるものなのです。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

では、トルコのアラト山の山頂近くにあるというノアの箱舟の遺跡は、実在するのでしょうか？

**モハン：**

（モハン氏は軽く頷き、その声は穏やかで落ち着いているが、内には確信が秘められている。）

ジャックさん、古代の文書に記されていること、幻想的に思える伝説には、時として、今日の私たちが通常の科学的方法で検証することが困難な歴史的真相が隠されています。

トルコのアラト山にあるとされるノアの箱舟の遺跡については、私の「見た」ところ、そして感じるところによれば、確かにあの洪水の出来事と密接な関係があります。

ノアの物語が言及するその洪水の災厄では、水位は非常に高く上昇し、ほぼすべての陸地を水没させました。その時の津波は、現れた映像によれば、おそらく 2000

メートル、あるいはそれ以上の恐るべき高さに達し、行く手にあるものすべてを押し流し、破壊したことでしょう。最も高い山々の頂だけが、広大な水面から突き出ることができました。

水が引き始めると、その大きな舟は、何日も漂流した後、これらの高い山脈の一つにたどり着きました。アララト山一帯は、その標高からして、古代の記録に記述されていることと完全に一致します。

もちろん、何千年もの時を経て、時間の侵食、地殻変動、そして永続的な冰雪の覆いの影響で、巨大な木造の舟の明確で完全な物的証拠を見つけることは極めて困難です。人々が見つけたり、遠くから撮影したりできるものは、単なる痕跡、破片、あるいは変形し、部分的に化石化した構造物でしかないかもしれません。

しかし、それらの痕跡の存在自体が、多くの異なる文化における記録と共に、かつて起こった過去について私たちに示唆を与える重要な手がかりなのです。それは単なる伝説ではなく、歴史的な記憶であり、この周期における地球の姿と人類の歴史を再形成した出来事なのです。探検家や研究者たちがその地域で証拠を探し続けている



ことも、私は偶然ではないと思います。何か深遠なものが彼らを駆り立てているのです。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

iPad を開いて、この遺跡の画像をもう一度検索してみます… これです、まさにこれ、トルコのアラト山にある、舟に非常によく似た画像です…

**モハン：**

（モハン氏はジャック・ヴォスが見せた画像をさっと見て、驚きの表情は見せず、物思いに沈んだ顔つきになる。）

ええ、おっしゃることは分かります。これらの画像、山の斜面にある巨大な舟のような形をしたその構造物は、長年にわたり多くの人々の注目を集めてきました。

〔モハンは少し間を置き、自分が「見た」こととこれらの具体的な画像を繋ぎ合わせるようにする。〕

先ほどお話ししたように、その大きな舟が大洪水の後に岸に着いた時、それは高地に留まりました。何千年という非常に長い時間を経て、地殻の変動、地震、氷雪や風雨による侵食、そして部分的に埋もれては再び現れるといったことを経て、その元の形が変わってしまったり、残されたものが中心的な構造の一部だけであったりすることは、十分にあり得ることです。

私たちがこれらの写真で見る、大きな船体を思わせる輪郭を持つこの特別な形状は、まさにその舟の残された痕跡、あるいはその重要な一部分が、何千年もの時を経て変容し、地形と一体化したものである可能性が非常に高いです。それはもはや当初のような完全な木造の舟ではなく、部分的に化石化したり、構成材料が時間とともに鉱物に置き換わったりしたかもしれませんが、そのエネルギー的な「骨格」と中心的な物理的痕跡は、私たちが認識できる特別な形を作り出すのに十分なほど、そこにまだ残っているのです。

科学は、この地質学的構造の形成について、さまざまな仮説を提唱するかもしれません。しかし、私の「見る」角度からすれば、この場所、この形状と、大洪水を乗り越えた舟の物語との間には、非常に強い繋がりがあいま

す。それはまるで、静かなる注意喚起であり、時間によって色褪せてしまったとはいえ、地球の過去における重大な出来事の証拠なのです。

それが高地に、数千メートルも水位が上昇した地球規模の洪水のシナリオと完全に一致する場所に存在していることも、理にかなっています。

〔モハンはジャックを見つめ、声は穏やかなままだ。〕

もちろん、実証科学の基準に照らして絶対的に断定するには、さらに多くの証拠が必要です。しかし、精神的な「見識」の世界では、時として、残されたしるしやエネルギー、そして古代の記録との繋がりが、それ自体で独自の確信をもたらすことがあるのです。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

はい、ノアの箱舟の話は一旦置いておきましょう… もっと過去に遡って、もし各文明周期が 5 千年か 1 万年続

くのであれば、最近の文明周期の一つが、あの伝説のアトランティスだったという可能性はありますか？！

**モハン：**

（微笑む。その笑みには一抹の懐かしさが漂い、まるでアトランティスという名前が、彼の中に馴染み深い映像を呼び起こしたかのようだ。）

ジャックさん、あなたはまたしても、人類が過ぎ去った時代に対して抱く、最も大きな謎の一つであり、最も深い記憶の一つに触れましたね。ええ、伝説のアトランティス、あるいは様々な伝説で語られる類似の名前は、単なる想像力の産物ではありません。

私がこの地球上で「見た」無数の文明の小周期の中に、私たちが今日アトランティスと呼ぶ、非常に発展し、輝かしい文明が実際に存在しました。それはこの第二の大周期の頂点の一つであり、科学技術、エネルギー、そして宇宙の法則に関する特定の理解において、驚くべき成果を達成した文明でした。

〔モハンは一息つき、空間の遠い一点を見つめ、まるでその光景を再現しているかのようだ。〕

私は彼らの壮麗な都市を「見ました」。複雑な建築と精巧な美しさを備えていました。彼らは巨大な貴石の結晶体からのエネルギーを広く利用しており、それは照明や機械への動力供給だけでなく、病気の治療、通信、さらには今日の私たちが到底想像もつかないような応用にも使われていました。彼らは空中や海中を容易に移動する手段を持ち、驚異的な速さで進むことのできる船を持っていました。

アトランティスの人々も当初は、精神性や、人間と宇宙との繋がりについて一定の理解を持っていました。しかし、時が経つにつれて、物質的な発展のあまりの速さ、卓越した技術的成果への自己満足、そして次第に深刻化する道徳の退廃、利己的な目的のための権力の乱用、権力闘争、そして傲慢さが、彼らを自己破壊の道へと追いやっていきました。

アトランティス文明もまた、啓発、発展、墮落、そして壊滅という共通の法則から逃れることはできませんでした。彼らの道徳が救いようのないレベルまで落ち込み、傲慢さと野望が神の当初の教えを覆い隠したとき、恐るべき地殻変動、おそらくは一連の巨大な地震と津波が発

生し、ごく短時間のうちに彼らの大陸または主要な島々全体を海の底深くに沈めてしまったのです。

アトランティスの記憶は、曖昧ではありますが、何世代にもわたり、多くの文化を通して、物質的にどれほど発展しても、道徳の基盤と神への畏敬の念を失った社会に何が起こりうるかという悲壮な警告として、今なお語り継がれています。消えた島々、大洋の底深く沈んだ都市についての物語はすべて、はるかに大きな歴史的現実の断片なのです。アトランティスは典型的な例であり、地球の長い叙事詩における悲壮な一章であり、また深い教訓でもあります。

アトランティスの出来事は、ノアの大洪水の直前の文明ではなかったかもしれませんが、それよりもさらに前の、地球のより長い歴史の流れの中に位置する、輝かしくも悲劇に満ちた周期の一つでした。その記憶は、曖昧ではありますが、何世代にもわたり、多くの文化を通して、物質的にどれほど発展しても、道徳の基盤と神への畏敬の念を失った社会に何が起こりうるかという警告として、今なお語り継がれています。

消えた島々、大洋の底深く沈んだ都市についての物語はすべて、はるかに大きな歴史的現実の断片なのです。ア

トランティスは典型的な例であり、地球の長い叙事詩における悲壮な一章です。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

なるほど。今 iPad でざっと計算してみたのですが、2 億年を平均 7 千年で割ると、約 2 万 8600 の文明周期が過ぎ去ったことになりますね…

これらの文明について概説していただけますか？

**モハン：**

（モハン氏はジャック・ヴォスが計算した数字に穏やかに微笑む。彼の笑みは嘲笑ではなく、有限の数字で無限を捉えようとする人間の努力への理解を示すものだ。）

ジャックさんが計算された数字、約三万周期というのは、確かに、時間の広大さと、この地球が経験してきた無数の盛衰を私たちが想像するための一つの方法です。もちろん、先ほどお話ししたように、各周期の長さは決して

均一ではなく、非常に短い周期もあれば、その平均値よりはるかに長く続く周期もありました。宇宙と生命の歴史は、必ずしも私たちの単純な線形計算に従うわけではないのです。

〔モハンは少し間を置き、カトマンズの夜の闇がすっかり覆った窓の外に目をやる。彼の声は追憶にふけるかのように、より低くなる。〕

その長く続く歴史の流れの中で、実に無数の文明が存在し、それぞれの文明には独自の特徴、成果、そして教訓がありました。すべてを語るには多くの時間が必要でしょうが、私が「見た」中で、特に深い印象を残したいいくつかの映像、いくつかの代表的な例をあなたと分かち合うことはできます。

例えば、巨人たちがこの地球上を実際に闊歩していた時代がありました。彼らは異形の生物や怪物ではなく、今日の私たちより何倍も背が高い、巨大な体躯を持つ一つの人種でした。彼らは独自の文明を持ち、その体格に見合った壮大な建築物を築きました。現代の考古学者が化石を発見する巨大な恐竜たちは、ジャックさん、その時代には、その一部の種が彼らのペット、あるいは乗り物でさえあったのです。彼らの文明もまた、今日の私たち



がおそらく忘れてしまったエネルギーや自然法則に関する理解に基づいていました。

また別の文明もありました。彼らは壮大な物質的建造物を築くことには重点を置かず、その代わりに音と周波数を利用する能力を頂点まで発展させました。彼らは音を使って病気を癒し、重い物を動かし、非常に遠い距離と交信し、さらには物質の構造に影響を与えることさえできました。彼らの建造物は、もしあったとしても、周波数を使って岩や自然の素材を成形し、周囲の環境と完全に調和した建築物を生み出すことによって建てられるのが常でした。

そして、おそらく後ほど詳しくお話する機会があるでしょう、人魚のような、海の底の神秘的な文明もありました…。

そしてもちろん、先ほど話したアトランティスのような、結晶体と光のエネルギーに基づく技術を持ちながら、道徳を失ったために自滅した文明についても触れないわけにはいきません。

さらには、姿、肌の色、能力の異なる多くの人種が、広大な土地で平和に共存し、多様で豊かな社会を築いてい

た時代もありました。各人種はそれぞれ独自の強みを持ち、コミュニティ全体の発展に貢献していました。

〔モハンは一息つき、軽く微笑む。〕

それらの文明の一つ一つが、ジャックさん、地球という壮大な歴史書の一章なのです。それらは現れ、輝き、そして消え去り、教訓と痕跡を残していきました。そして、私たち後の者がそれらを再び見つけ出し、解読するには、時には大変な困難が伴います。私が語ったことは、ほんのいくつかの大まかなスケッチに過ぎません。なぜなら、それらの文明の豊かさと多様性は、実に私たちの通常の想像力を超えているからです。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

先ほど、巨人、小人、そして海中の人魚にまで言及されましたね…。ということは、これらは単におとぎ話の想像の産物ではないのかもしれませんが…。

**モハン：**

（モハン氏は注意深く耳を傾け、それから深い理解をもって静かに頷く。彼の眼差しはまるで時の帳を貫くかのようだ。）

はい、ジャックさん。私たちは子供の頃、巨人や小人、あるいは海の底に住む美しい人魚のおとぎ話をよく聞かされたものです。大人になると、私たちの多くは、それらは昔の人の豊かな想像力の産物であり、娯楽や道德教育のために作られた物語に過ぎないと考えようになります。

しかし、私の「見た」ところ、そして「啓示された」ところによれば、真実は必ずしもそうではありません。おとぎ話の中にしか存在しないと思われていたそれらのイメージや登場人物の多くが、実はこの地球のかつての文明周期に実在した起源を持っているのです。

〔モハン氏の声は、穏やかさを保ちつつも、より断定的な響きを帯びる。〕

その多様性をより明確に想像していただけるように、ジャックさん、過去の文明周期に存在し、深い足跡を残したいくつかの特別な人種について、その概略をお話ししましょう。

## 巨人について：

彼らは異形の生物や単なる神話ではありません。地球の歴史の多くの段階、特に第一の大周期と第二の大周期の初期段階において、巨人は実際に主要な人種であり、強力な文明でした。彼らの体格は、ジャックさん、種族や時代によって非常に多様でしたが、一般的には今日の私たちの平均身長の子三倍、四倍、中には五倍、六倍にもなる種族もありました。

彼らの文明もまた、異なる方向性で非常に発展していました。彼らは巨大な建築物を持ち、その都市は巨大な石のブロックで建てられており、特別な能力や技術がなければ、どうやって移動させ、設置したのか、今日の私たちには想像もつきません。現代の考古学者が化石を発見する巨大な恐竜たちは、巨人の黄金時代には、その一部の種が単なるペットや家畜、あるいは移動手段、乗り物でさえあったのです。巨人がブロントサウルスやティラノサウルス・レックスの背中に乗る姿を、私たちが馬に乗るように想像できるでしょう。

彼らは、私たちが使うような複雑な機械を必ずしも介さずに、自然の法則、地球と宇宙のエネルギーについて深い理解を持っていました。彼らの非凡な身体能力には、

非常に長い寿命も伴っており、道徳がまだ純朴だった時代には、数百年、さらには数千年に及ぶこともありました。しかし、他の文明と同様に、傲慢さ、自己満足、そして道徳の退廃が現れると、彼らもまた成住壊滅の法則から逃れることはできませんでした。彼らの痕跡は今日、一部の場所で稀に発見される巨大な骨格、あるいは科学がまだ完全には説明できない神秘的な巨石建造物という形で残っているかもしれません。

## 小人について：

巨人と同じく、小人もまた、おとぎ話の想像の産物だけではありません。彼らは実在した人種であり、巨人や私たちのような大きさの人種と並行して、あるいは異なる文明周期に存在しました。彼らの大きさも多様で、数十センチしかない種族もいれば、小さな子供くらいの高さの種族もありました。

彼らはしばしば、より大きな人間が近づきにくい、あるいは気づかないような、鬱蒼とした森、深い洞窟、あるいは隠された谷間で、自然と調和して隠れ住んでいました。彼らは独自の生活様式を持つ自分たちの世界を持ち、その環境で生き残り、発展するための特別な技術を持っていました。彼らは動植物と意思疎通する能力、薬草に

関する知識を持ち、私たちが失ってしまった繊細な精神的能力を所有していたかもしれません。

小人の文明は、壮大な物質的建造物を残すことはあまりなく、主に精神生活の発展と自然との調和に焦点を当てていました。多くの民族の神話における「精霊」、「森の妖精」、「ドワーフ」といった物語は、この人種に関する曖昧な記憶の残滓である可能性があります。そして、以前にも少し触れましたが、ごく最近の時代でさえ、世界の一部の辺鄙な地域で小人が出現したという報告や話がありますが、それは非常に稀で検証困難です。

**そして「人魚」や水中で生活する生命体については、話はさらに複雑になります：**

私の「見た」ところでは、彼らは実際に一つの人種、あるいは多くの異なる人種であり、地球の海の中で、多くの歴史的周期を通じて独自の文明を存在させ、発展させてきました。

## **大洋の底の人魚の神秘的な世界**

## 人魚の各種族の起源と違い：

人魚の存在は単一の現象ではなく、異なる時期に出現し、異なる起源を持つ可能性のある多くの種類がいます。

一部の人魚の種族は、陸上の人間の一部が、何千年、何万年もの歳月をかけて水環境に徐々に適応した結果です。それは地殻変動によって陸地が水没したためか、あるいは彼らが積極的に海での新しい生活を求めたためかもしれません。

また、神によって特別に創造された人魚の種族もいます。彼らは水中で生活し、文明を発展させるために、最初から適した身体的特徴と能力を持っていました。彼らには、大洋の生態系のバランスを守る、あるいは特定の古代の知識を保存するといった、独自の使命が託されていました。

## 彼らの姿はどのようなものか？

彼らの姿も非常に多様で、私たちがよく想像するような、鱗のある尾を持つ半人半魚の姿に限定されません。

最も一般的なタイプは、伝説の記述に近いもので、上半身は人間と似ています――顔、手、そしてしばしば苔の

ような緑色、海の青、あるいは金属光沢といった特別な色をした長い髪を持ちます――しかし、腰から下は、様々な色の輝く鱗で覆われた、力強くしなやかな魚の尾になっています。彼らは指や（もしあれば）足の指の間に水かきを持ち、首の両側や耳の後ろに鰓があって水中で呼吸することができました。

他のいくつかの種族は、より人間に近い姿をしているかもしれませんが、彼らの皮膚は特別な構造を持ち、滑らかで、水と直接ガス交換する能力がありました。彼らは明確な魚の尾を持たず、泳ぐときに足が大きなひれに変化したり、移動のために特別な補助具を使用したりすることがありました。

また、知能は高いものの、姿は人間よりも海洋動物に近い生命体の記録もあります。例えば、複雑なコミュニケーション能力を持ち、社会を築くことができるイルカやクジラの形態をしたものなどです。

## **人魚の文明は、陸上の文明とは大きく異なります。**

彼らは大洋の底に壮麗な都市を築き、しばしばサンゴや発光する石、あるいは深海にしか存在しない特別な鉱物といった自然の素材を使用しました。これらの都市は周



囲の環境と調和するように設計され、発光生物からの自然光や地熱エネルギー源を利用することができました。

彼らは海流や海水温の差からエネルギーを採掘したり、アトランティス人と似ているが水環境に合わせて調整された一種の結晶エネルギーを使用したりすることができました。彼らの技術は、重厚な機械装置に集中するのではなく、バイオテクノロジー、音、周波数、そして自然のエネルギーの流れを制御する能力に長けていました。彼らは海洋生物や海中植物から道具、建材、さらには移動手段さえも「栽培」することができました。

多くの人魚の種族は、繊細な精神的能力、テレパシーによるコミュニケーション能力、エネルギーによる治癒能力、あるいは海洋環境の変化を感知し予測する能力を所有していました。彼らは他の海洋生物と非常に密接な関係にあり、それらと協力し、意思疎通することができました。

歴史上、人魚と陸上の人々が交流し、協力さえした時期もありました。しかし、対立や誤解の時期もありました。概して、人魚は陸上の世界の喧騒や変動から距離を置く傾向があり、特に人間の道徳的退廃や環境破壊行為を認

識した場合はそうでした。彼らは大洋の平穏と美しさを尊びました。

他の文明と同様に、人魚もまた成住壊滅の周期を経験しました。かつて非常に栄華を極めて衰退した人魚の文明もありました。人魚も、陸上の人間と同様に、魂を持ち、輪廻を経験します。

私は「見た」のです、感動的な物語を。例えば「人魚の心願」という、何代も前の転生から深い誓いを立てた人魚の話です。それは陸上の世界から何かを探し出すこと、あるいは誰かを待つことに関わるもので、その心願が果たされるまで、彼らの魂は人魚の姿で永遠に輪廻し続けるのです。

これは多くの人を驚かせるかもしれませんが、私の知る限り、現代においても、私たちがまだ探査しきれていない深海の領域に、隠れて生活している人魚のコミュニティがまだ存在します。彼らの数は昔ほど多くはなく、おそらく全世界で一万人近くしか残っていないかもしれません。そして彼らは、現代文明との接触を避けることに非常に慎重です。なぜなら、彼らはその危険性と、生活観のあまりにも大きな違いを意識しているからです。

大洋の下の世界は、ジャックさん、私たちがほんのわずかな部分にしか触れていない、無数の秘密と奇跡的な生命体を隠しているのです。人魚は、その多様で豊かな絵画の一部なのです。

[モハンは深い眼差しでジャックを見る。]

お分かりでしょう、人間の想像力は、時として全く新しい創造物ではなく、回想であり、かつて存在し、起こったことについての人類の集合的無意識に残された曖昧な記憶、映像の断片なのです。おとぎ話、神話も、もし私たちが異なる角度からそれらを見れば、この地球上の生命の多様で奇跡的な歴史の真実の一端を垣間見せてくれる扉そのものかもしれません。

創世主は、その無限の創造力の中で、万物を創造され、私たちの歴史は、私たちが普段考えているよりもはるかに豊かなのです。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

あなたが語られた人種は本当に驚くべきものです。では、過ぎ去った文明の中で、特に輝かしく、あるいは深い教訓を残したもので、もう少し詳しくお話しただけなものがありますか？

**モハン：**

（モハン氏は軽く頷き、その眼差しに一瞬、軽い驚きがよぎるが、すぐに物思いに沈んだ表情に戻る。まるで記憶の「フォルダ」を整理し直すことが手慣れたことであるかのようだ。）

はい。記憶の流れが戻ってくると、時として時間や順序の詳細を正確に整理し直す必要があります…。

その無数の文明の中に、特に輝かしい時代、私がより深く分かち合いたい一つの頂点があります。それは第一の大周期の最終段階に属する黄金時代、偉大な創造物が生まれた時代です… 私があなたと分かち合いたい輝かしい時代は、実は地球の第一の大周期の最終段階に属するものです。それこそが、その最初の第一の大周期における最も輝かしい頂点であり、最後の章でもありました。人間が真に神々と非常に近く生きた時代であり、社会が物質的にも精神的にも輝かしい発展を遂げ、おそらく今日

の私たちが完全には想像できない調和を達成した時代です。

〔モハン氏の声は、何か非常に神聖なことについて語っているかのように、より荘厳になる。〕

それは、創世主が、その無限の慈悲をもって、初めて宇宙の大法をこの世に広く伝えた時代でした。これは一種の試み、後の時代の、私達人類のごく一部がこの時代に目撃している公式で普遍的なものを含む、後の時代の洪伝のための種まきと見なすことができます。その時の人々は、大部分がまだ純朴さを保ち、心性も非常に高かったのです。彼らが大法を受け入れる方法も特別でした、ジャックさん。経典や複雑な解説を通してではなく、主に直接的な感応、彼ら自身の内面からの開示を通してでした。彼らの心が十分に静かで、十分に純粹になると、宇宙の崇高な法理が、慈悲と智慧のエネルギーの流れのように彼らの意識に浸透し、彼らを悟らせるのです。そのように点化された後、突然星々の言語を理解する者もいれば、最も微小な粒子の構造を見る者もいれば、あるいは他の空間の生命体と容易に交信できる能力を持つ者もいました。

その時代の社会は、ジャックさん、ほぼ理想的な社会でした。道徳がすべての活動の基盤でした。人々は誠実さ、善良さ、そして忍耐をもって互いに接しました。今日私たちが見るような、欺瞞、争い、あるいは激しい嫉妬はありませんでした。「神と人が共に歩む」ことは、比喻ではありませんでした。神々、あるいは非常に高い境地に達した修煉者たちが、頻繁に姿を現し、人々に教えを説きました。私は「見た」のです、厳かな寺院の中ではなく、森の中や小川のほとりで法が説かれる光景を。人々は座って慈悲と智慧の教えに耳を傾け、直接質問したり、自分の悟りを分かち合ったりすることができました。その時の神と人とのコミュニケーションは非常に自然で親密でした。

特筆すべきは、科学と精神性が全く分離せず、一つに溶け合っていたことです。最も偉大な科学者たちは、同時に非常に高い精神修煉レベルを持つ人々でもありました。彼らは外部の物質世界を研究するだけでなく、自分自身の内なる存在から宇宙と生命の謎を探求しました。

そのおかげで、当時の人々は非凡な能力を所有していました。それは外部の複雑な機械を通してではなく、主に大法に従って心性を修めることから得られる智慧の開示

と特異機能の結果でした。彼らは思念で大きな物体を動かし、慈悲の心のエネルギーで病を癒し、寿命も非常に長く、体は常に健康でエネルギーに満ち溢れていました。

彼らの技術は、もしそれを技術と呼べるなら、私たちとは全く異なる原理に基づいていました。それこそが「精神性に基づく技術」です。例えば、内燃機関を使う代わりに、彼らは空間から直接得られるエネルギー、あるいは操縦者の強力な精神エネルギーによって動く飛行機械を創造することができました。彼らはエネルギーを蓄積・増幅する能力を持つ特別な結晶を「栽培」し、照明、通信、あるいは保護力場を作り出すために使うことができました。壮大な建築物を建てるのにも、重機は必要ありませんでした。彼らは思念、集団のエネルギーを使って材料を成形し、石が意のままに動き、組み合わせるようにさせることができたのです。

人々が法に従って生き、心性が純粹であるとき、彼らの智慧は無限に開かれます。彼らは世界を異なる目で見て、万物間の繋がりを理解し、自然と、宇宙と調和して生きていました。

〔モハンは一息つき、その眼差しに一抹の悲しみがよぎる。〕

それは本当に輝かしい時代であり、おそらく後の第二の大周期の文明でそれに匹敵するものはほとんどないでしょう。しかし、あまりにも輝かしかったがゆえに、時が経つにつれて、一部の人々は次第に自己満足に陥り、当初の教えから離れ、自分の能力を個人的な目的のために乱用し始めました…そして、成住壊滅の法則が再び現実となり、その第一の大周期全体の終焉へと繋がったのです。

しかし、まさにその輝かしく、そして第一の大周期の最終段階でもあった黄金時代に、神と創世主の導きの下、その時代の人々は偉大な傑作、今日に至るまで存在し、静かに毎晩私たちを照らし続けている一つの創造物を生み出しました。それこそが月です。

〔モハンは外を見上げ、昼間であるにもかかわらず、月が見えるかのようにする。〕

月の誕生の物語に、ご興味はありますか、ジャックさん？

\* \* \*



**ジャック・ヴォス：**

おお、つまり、今日私たちが見ている月は、その輝かしい文明周期にいた人々によって作られた「産物」だということですか？

**モハン：**

（モハン氏は静かに頷き、ジャック・ヴォスに意味ありげな視線を送る。まるで、信じがたいが、彼が「見た」真実であることを認めるかのように。）

はい、ジャックさん。このことは多くの人々を驚かせ、疑念を抱かせるかもしれません。なぜなら、それは現代科学が私たちに語る天体の起源とはかけ離れているからです。しかし、私が宇宙の記憶の流れの中で「目撃した」ところによれば、私たちが毎晩眺める月は、完全に自然に、偶然に形成された天体ではないのです。

まさしくあなたが今おっしゃった通り、それは「産物」であり、その黄金時代の人々によって創造された偉大な傑作なのです——地球の第一の大周期の頂点であり、最終段階でもあった時代の。

「モハンは少し間を置き、ジャック・ヴォスがこの情報を受け止める時間を与える。」

月のような天体を創造することは、もちろん、数人の個人ができるような単純な作業ではありません。それは一つの文明全体の智慧、能力、そして信仰の結集を必要とする壮大な事業であり、何よりも、それは神々の導き、教え、そして助けの下で行われ、創世主の全体的な采配の中にあつたのです。

その時代の人々は、私が述べたように、精神性を基盤とした科学技術において非常に高いレベルに達していました。彼らは宇宙の運行法則、エネルギー、そして微視的および巨視的な層における物質について深く理解していました。彼らは巨大なエネルギー源を制御する能力を持ち、今日の私たちが想像もつかない規模で物質に影響を与えることができました。

月を創造した目的も、単に夜を「照らす」ためだけではありませんでした。それは地球上の生命とバランスにとって、非常に複雑で重要な機能を持っていました。

分かりやすくするために、ジャックさん、私が「見た」ところによるその多様な役割について、少しお話ししましょう。

**第一に、地球の生態系と精妙なエネルギーの調整：** 現代科学がすでに知っている潮の満ち引きを引き起こすことに加え、月は巨大で精巧な調整装置としての役割も果たし、地球のエネルギーの流れをバランスさせ、気候、天候のパターンを調和的に影響し、さらには無数の生物種の生体リズムにまで影響を与えます。それは太陽光を反射するだけでなく、精妙な宇宙エネルギーを受け取り、変換し、分配して、惑星上の生命を育む能力を持っています。

**第二に、宇宙エネルギーの中継および精製ステーション：** それは巨大なプリズム、あるいは宇宙の変圧ステーションのように機能し、遠い星々や他の空間層からのエネルギー源を引き寄せ、その後、地球環境とそこに住む生命体にとって適切で有益になるように、周波数と強度を「精製」し、調整します。

**第三に、必要に応じて自ら移動できる「宇宙船」であること：** これは最も奇跡的な機能の一つです。この自己移動能力は、通常の探査旅行のためではなく、大災害の時、

惑星規模の破壊的な出来事の際に、地球あるいは生命の精華を保護するための極めて重要な手段でした。その運行は、私たちが知るようなジェットエンジンや粗雑な機械的手段によるものではありません。その運行は、精神的なエネルギーの原理、賢者たちの思念の統合、そして神の指導の下で宇宙のエネルギーの流れを制御する能力に基づいています。

**第四に、能動的な防御システム、地球を守る盾であること：** 月は保護エネルギー場を生成する能力を持ち、地球に衝突する危険のある隕石や小惑星の軌道をそらしたり、外部宇宙からの、さらには悪意のある勢力からの否定的な影響を無力化したりすることができます。

そして、ジャックさん、もう一つ非常に精妙なことがあります。それは、意図的な設計と、月と地球上の生命との間の深い繋がりを明確に示す証拠であり、月の周期と人間のいくつかの重要な生体リズム、特に女性の月経周期との驚くべき同期です。

これは偶然の一致ではありません。創世主と神々が人間の生活環境を創造した際の根源的な設計において、月の周期は、創造と子孫繁栄の神聖さと結びついた女性の体の内なるリズムと精妙に調和するように采配されています。

した。それは小宇宙（人間）と大宇宙との間、地球上で起こることと天空で運行することとの間の関連性に対する深い理解を反映しています。これは全体的な設計の一部であり、そこではすべての要素が相互に作用し、その黄金時代における人間の生命と調和のとれた発展を支えていたのです。

ですから、あなたが月を見上げるとき、それは単に宇宙に浮かぶ無機質な岩塊ではないことを思い出してください。それは、かつて存在した輝かしい文明の痕跡を色濃く残す遺産であり、宇宙の歴史と、神の導きの下にあった非凡な創造者たちの静かなる証人なのです。

しかし、ジャックさん、この偉大な傑作の歴史は、その輝かしい瞬間だけで終わるわけではありません。それはまた、生存、忠誠心、そして静かなる犠牲の長大な叙事詩でもあるのです。

第一の大周期の黄金時代が終焉に近づいたとき、その時の地球上の生命体の大部分が救いようのない道徳的退廃に陥ったため、その大周期全体を終わらせるために、神によって非常に恐ろしい「大浄化」、全面的な破壊が采配されました。その時代の地球は、私の「見た」ところでは、巨大な規模で崩壊し、まるで無数の破片に「爆発」

したかのように想像できます。その後、神々がその偉大な神通力と無限の慈悲をもって、宇宙の基本的な物質を用いて完全に再創造し、私たちが今生きている第二の大周期の新しい地球を創造したのです。

そして、その終末的な状況の中で、月の運命は非常に特別なものとなりました。古い地球が完全に破壊される前に、黄金時代の最も賢明な賢者たち、最も高名な修煉者たちは、予知と、神と創世主からの直接の指示の下、非凡な計画、偉大な「避難」を実行しました。月——彼らの宇宙船であり、第二の故郷であり、そして要塞でもあった——は、思念と純粋な精神エネルギーによって操縦され、一時的に地球の軌道を離れ、恐ろしい破壊の領域から移動しました。それは、その文明の精華である種子、貴重な宇宙の知識だけでなく、一定数の最も純粋で善良な人々、重要な生命の芽も運び、宇宙の大災害を乗り越えて彼らを保存しました。

古い地球が完全に破壊され、より清浄な新しい地球が再創造され、第二の大周期の新しい章が始まった後、月は、奇跡的な采配に従い、定められたまさにその時に、静かにその馴染み深い軌道位置に戻ってきました。それは、この新しい青い惑星上の生命を支援し、保護し、調整す

るという神聖な使命を続けたのです。帰還したとき、月は基本的には黄金時代からの複雑な構造と大きな潜在能力を保持していました。そして、避難のために月に乗せられた人々は、月という「方舟」と共に漂流した長い期間にわたって何世代も繁殖し、その数は非常に多くなっていました。神の采配に従い、月が新しい地球に戻ってきたとき、これらの人々は地上に住むことを許されず、地中の、あらかじめ準備されていた広大な空間に移動するように導かれました。彼らは、後に私たちが再び触れることになるかもしれない、神秘的な内地文明の基礎を築いた人々となったのです。

\* \* \*

### **ジャック・ヴォス：**

今お話を聞いて、ふと思い出したのですが、以前インターネットのどこかで、科学者たちが月の表面に大きな弾頭を撃ち込む実験を行った際、月が空洞の鐘のように鳴り響く反応を示した、という記事を読んだことがあります…。とすれば、月は本当に内部が空洞の物体なのかもしれませんね？もしそれが前の周期の人類によって創造

されたものなら、その中には多くの複雑な機関や構造物があるということにも…

**モハン：**

（モハン氏の眼差しに一筋の光が宿る。まるでジャック・ヴォスが今共有したことが、彼の記憶の絵画における重要な一点にまさに触れたかのようだ。）

ジャックさん、あなたがインターネットで読まれたその情報は、多くの議論があり、主流科学では広く認められていないかもしれませんが、私が「見た」真実から決してかけ離れてはいません。

科学者たちが行ったその実験、つまり物体が月の表面に衝突した際に、まるで巨大な空洞の鐘であるかのように、異常に長く続く振動を引き起こしたという現象は、月の真の性質を明らかにする重要な手がかりの一つです。

その通りです、月は完全に中身が詰まった塊ではありません。その内部には、私が創造の過程と現在の構造において「目撃した」ところによれば、実に広大な空間が存在します。



「モハンはさらに説明を加え、その声は穏やかでありながらも説得力に満ちている。」

黄金時代の人々が、神の導きの下で月を創造したとき、彼らは単に岩の塊を「こねて」作ったわけではありません。彼らはそれを、非常に複雑で精巧な宇宙の建築物として建設しました。それには頑丈な外殻がありますが、内部は多層、多区画の構造になっており、非常に具体的な目的のために設計されたシステムやインフラが備わっています。

それを、単なる自然の天体ではなく、巨大な宇宙船、人工の「空中都市」として想像してみてください。その内部には、それが創造されたばかりの時期と、その後の長い間、実際に制御機関、実験室、エネルギー貯蔵区画、生命維持システム、さらには精神修煉や研究のための空間さえも含まれていました。

何千万年にもわたる宇宙塵や隕石の破片によって堆積される前の、その本来の姿でさえ、今日私たちが見るような完全な球体ではありませんでした。元々は、大きな卵のような形、完璧な楕円形をしており、それは宇宙空間での移動とエネルギーの安定性を維持するための最適な構造でした。私たちが現在観察している殻は、時間とと

もに形成された外側の「上着」に過ぎませんが、その内なる中核、エネルギーの骨格と主要な構造は、その卵の形を保ち続けています。

ですから、外部から強い力が加わったときに、それが空洞の構造物のように、長く振動するのは、完全に理解できることです。それは地質学的な偶然ではなく、偉大な人工物の固有の特性なのです。

月は、ジャックさん、さらに多くの秘密を秘めています。黄金時代の秘密、そして人々が宇宙と調和し、神の導きに従って生きていた時の非凡な能力についての秘密を。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

はい、月についてのお話は本当に驚くべきものです…

しかし、何千万年もの間に、隕石や宇宙塵が降り積もってできた土や岩の層は、おそらく数百メートル、場合によっては数キロメートルの厚さになっているでしょう

ね…。そのせいで、私たちにはその外観が純粹に土や岩にしか見えないのでしょう。

**モハン：**

（モハン氏は頷き、ジャック・ヴォスの推論に同意する様子を見せる。）

ジャックさんのおっしゃる通り、非常に理にかなっています。何千万年、第一の大周期の終わりに創造されてから一億年近くにもなるかもしれない、それほど長い時間を経て、月の表面が無数の大小の隕石、宇宙塵、そして宇宙からの他の物質によって堆積されることは避けられません。

その土や岩の層は、時とともに、間違いなく非常に厚くなりました。あなたが推定されたように、一部の地域では数百メートル、あるいは数キロメートルという数字は、完全に根拠のあるものです。それは自然の鎧、あるいは巨大な堆積層のようであり、その下にある偉大な創造物の本来の姿をほぼ完全に覆い隠してしまいました。

まさにこの厚い被覆層のために、私たちが地球から月を観察するとき、あるいは宇宙船がその表面に着陸したと

きでさえ、私たちが主に見たり分析したりできるのは、最外層、つまり土、岩、クレーター、そして玄武岩の平原からなる「皮」だけなのです。科学者たちが月から持ち帰った土や岩のサンプルを研究する際も、彼らは主にこの堆積した外殻の成分を分析しています。

このことはまた、私が言及した複雑な人工構造物、内部の建造物や機関が、なぜ通常の表面観察方法で簡単には発見されないのかを説明しています。それらは、その堆積した殻の奥深くに隠されているのです。

しかし、被覆層がどれほど厚くとも、内部の核心構造の基本的な特性——例えば、空洞空間があることや、元々が卵形であったことなど——は、強い衝撃に対する反応の仕方のような間接的な現象を通じて、あるいは将来科学が収集するかもしれない磁場、重力場、または特別な地震データに関するより深い分析を通じて、現れる可能性があります。

また、月の一部の特定の地域では、その内部の地質変動や過去の巨大な衝突によって、下の本来の構造の一部が露出したり、表面に近くなったりして、科学者たちがまだ説明しようと努力している地質学的な異常を生み出している可能性もあります。

要するに、私たちが見る純粋な土や岩の外観は、時間のベールに過ぎません。その下には、過ぎ去った時代の傑作、私たちが遠くからでは認識できないほどの秘密と機能を秘めた人工物が、今もなお存在しているのです。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

もし月が巨大な人工の「宇宙船」のようなものだとしたら、それは地球とどのように相互作用したのでしょうか？あなたが言及された「黄金時代」に、地球はどのように破壊されたのですか？そして、それは月に何か影響を及ぼしましたか？

**モハン：**

（モハン氏は頷き、明確にすべき詳細を理解した様子を見せる。彼は深く息を吸い込み、記憶の中のより鮮明な映像に集中するかのようにする。）

はい、ジャックさん。物語をより一貫性があり、正確なものにするために、それらの重大な出来事について、もう少し詳しく説明させてください。

まず、第一の大周期の黄金時代における月と地球の相互作用についてです。私が述べたように、それは能動的な相互作用の関係であり、月は巨大なエネルギーと生態系の調整センター、そして知的な保護シールドとしての役割を果たし、そのすべてが、地球の均衡と繁栄を維持するために、神の監督の下、非常に高い修煉レベルと智慧を持つ人々によって運営されていました。

黄金時代が終焉に近づいたとき、地球上の生命体の道徳的退廃により、第一の大周期全体を終わらせるために、神によって非常に恐ろしい「大浄化」が采配されました。この出来事は、単なる通常 of 自然災害ではありませんでした。墮落したものを完全に取り除き、全く新しい空間を創造するために、第一の大周期の地球は、全面的な破壊、つまり、非常に大きなレベルで「爆発」または崩壊したかのように想像できる事態を経験しなければなりませんでした。その後、神々がその偉大な神通力をもって完全に再創造し、宇宙の基本的な物質を用いて、私たち

が今生きている第二の大周期の新しい地球を創造したのです。

そして、その状況下で、月の運命についての問いは非常に特別なものとなります。古い地球が完全に破壊される前に、その時代の賢者たち、高名な修煉者たちは、予知と、神と創世主の指示の下、非凡な計画を実行しました。月——この偉大な宇宙船——は、地球の軌道から一時的に離れ、破壊の領域から移動するように操縦されました。それは、文明の精華である種子、貴重な知識、そしておそらくは重要な生命の芽も運び、大災害を乗り越えてそれらを保存しました。

古い地球が完全に破壊され、新しい地球が再創造されて第二の大周期が始まった後、月は、奇跡的な采配に従い、まさにその時に、その軌道位置に戻り、この新しい青い惑星上の生命を支援するという使命を続けました。

帰還したとき、月は基本的には黄金時代からの構造と潜在能力を保持していました。それは新しい地球の均衡を維持するという基本的な機能を果たし続けました。しかし、それが頂点にあった時のようなすべての超越的な能力を発揮できたかどうかは、第二の大周期における文明の認識レベルと道徳レベルに依存していました。

月の重大な損傷や機能低下については、私の「見た」ところでは、それは第二の大周期の初めに帰還した直後には起こりませんでした。より深刻な影響、その能力の一部を弱めたり損傷させたりした出来事は、もっとずっと最近の、過去 5,000 年から 10,000 年の間に起こりました。それは、月が地球の護衛者として、地球を侵略または操作しようとする悪意を持つ「地球外生命体」の勢力の艦隊との激しい戦闘に参加しなければならなかった時です。それらの戦闘で、月は一定の損害を被り、そのシステムの一部が損傷した可能性があり、その結果、以前のように強力かつ包括的に機能しなくなったのです。

そしてもちろん、その表面は、第二の大周期の何千万年もの間、宇宙塵と隕石によって堆積され続け、私たちが見る厚い殻を形成しました。

月の物語は、実に、栄光、破壊、再生、そして絶え間ない防衛の戦いの両方を反映した、波乱に満ちた長大な叙事詩なのです。

\* \* \*



**ジャック・ヴォス：**

なるほど。月が損傷した状況について、もっと詳しくご覧になりましたか？

**モハン：**

（モハン氏は静かに頷き、ジャック・ヴォスが具体的な時期に言及すると、その眼差しに集中力が宿る。彼は少し黙り、記憶の流れがより鮮明に現れるのを待ち、同時に出来事をより正確な順序に整理しているかのようだ。）

ジャックさん、私たちが月が受けた損傷について話するとき、確かに、単なる時間の自然な侵食や一般的な戦闘だけでなく、深い足跡を残した特定の段階や出来事がありました。

第一の大周期の地球が破壊され、第二の大周期の新しい地球が再創造された後に月が地球の軌道に戻ってきたとき、それはまだ黄金時代からの偉大な潜在能力と構造を内に秘めていました。それは生命を支援するという使命を続けました。

そして、月に保存された人々は、帰還した際に特別な運命をたどり、それはより大きな計画の一部であり、おそらく後ほどお話しすることになるでしょう。

しかし、この第二の大周期の流れの中で、月の機能、さらには構造にさえ深刻な影響を与えた、少なくとも二つの大きな出来事がありました。

**第一の出来事**は、一万年以上前に起こりました。その頃、地球上には、ある程度の発展レベルに達した国々や文明がありました。しかし、やがて、善ならざる古い勢力の操作の下、彼らの間に不和と対立が生じ、残酷な戦争へと発展しました。それらの戦争で、彼らは大きな破壊力を持つ兵器やエネルギーを使用した可能性があります。その結果、月は、地球の保護者および調整者としての役割から、巻き込まれることを避けられず、災厄を被らなければなりませんでした。その外殻は損傷しました。そしてさらに重要なことに、生態系を調整し、地球の精妙なエネルギーバランスを維持する能力が、この出来事の後に深刻に低下しました。戦争を引き起こしたその二つの国も、最終的には神によって罰せられ、その国土と民は共に海の底に沈められました。その変動の後、地中に残った人々、古代の知識の一部を受け継いだ人々は、月

の損傷した外殻を修復するために多大な努力を払い、それが以前ほど完全ではなくとも使命を続けられるように、その位置や軌道の一部を調整しなければならなかったかもしれません。

**第二の出来事**は、約 5,000 年前に起こりました。この時、さらに大きな試練が外部宇宙から押し寄せました。邪悪な「地球外生命体」の勢力の強力な艦隊が太陽系に現れ、地球を侵略し支配しようとしてしました。その時の地中の文明は、かつての黄金時代ほど強力ではなかったかもしれませんが、それでも共通の故郷を守るために立ち上がって戦わなければなりませんでした。その地球防衛の戦いにおいて、月は再び最前線に立ち、要塞として、巨大な護衛者として機能しました。そのような戦闘は間違いなく非常に熾烈であり、月はさらなる損害を受け、その防御システムや残された機能に影響を及ぼしました。

これら二つの出来事は、いずれも月に小さくない「傷跡」を残し、それが創造された時から持っていた多くの奇跡的な能力を減退させました。そして、何百万年にもわたる宇宙塵や隕石の絶え間ない堆積も加わり、その外観はさらに古風になり、多くの秘密を隠すことになったのです。

このように、月の「破壊」や「損傷」の物語は単一の出来事ではなく、地球だけでなく、この宇宙空間全体の大きな変動を反映した、重要な節目を持つ、長く続くプロセスなのです。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

おお、今、月の「主（あるじ）」は地中に入って生活している人々だとおっしゃいましたね…。

とすれば、大きな問いが浮かび上がります。地球の内部は空洞で、そこには先進的な文明が存在するのでしょうか？

**モハン：**

（モハン氏は静かに微笑み、その眼差しはジャック・ヴォスの好奇心を理解しているかのようだ。彼は時計に目をやり、それから完全に夜の帳が下りた窓の外を見つめる。）

ジャックさん、私たちが過去の物語に没頭していると、時間は本当にあっという間に過ぎていきますね。あなたは非常に興味深い問い、多くの人々もかつて思い悩んだ大きな謎を提示されました。

〔モハンは一息つき、ジャック・ヴォスの問いに戻る。〕

そして、地球の内部世界についてのあなたの質問ですが。

申し上げますと、ジャックさん、私の「見た」ところでは、私たちの地球は、多くの人が考えているような完全に中身が詰まった塊ではありません。私たちが生活しているこの地殻の下には、実に広大な空間、複雑な構造を持つ層が存在します。そして、それらの空間には、実際に一つの文明、一つの人種が存在し、生活しているのです。

彼らは古代の人種であり、特別な采配に従って、非常に遠い昔の時代から地中で生き残り、発展する方法を見つけ出しました。彼らの文明は、あるレベルにおいては、かつての輝かしい時代からの多くの知識と技術を今なお保持しており、地上の私たちが持つものを凌駕している

可能性があります。彼らは管理された環境の中で生活し、独自の光源とエネルギー源を持っています。

しかし、彼らが私たちの地上の世界に干渉しない、あるいはめったに姿を現さない理由は、非常に複雑です。一つには、彼らが遠い昔の神々からの厳格な言いつけ、つまり、特別な時における特別な指示がない限り、地上の人々の自然な発展と選択に干渉してはならないという教えに従っているからです。もう一つの理由として、彼らの外部世界への主要な出入り口が、その高度な技術を持つ一部の邪悪な「地球外生命体」の勢力によって封鎖されたり、妨害されたりしている可能性も考えられます。それは、彼らと地上の人類との相互作用や援助を妨げるためです。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

では、あなたが言及された、第一の大周期に属し、月の創造に関わった「黄金時代」の他に、その長く続く歴史の流れの中で特別な足跡を残した、あなたがはっきりと

「見た」他の代表的な文明について、もう少しお話しただけませんか？

**モハン：**

（モハン氏は静かに微笑み、ジャックの探求心を尊重しているかのようだ。彼はお茶を一口すすり、その眼差しは再び遠くを見つめ、まるで見えない歴史のページをめくっているかのようだ。）

もちろんです、ジャックさん。その黄金時代の他にも、無数の文明があり、それぞれの文明には独自の特徴、成果、そして教訓がありました。もう二つの文明についてお話ししましょう。一つは第一の大周期に属し、驚くべき宇宙での成果を上げた文明、もう一つは第二の大周期に属し、悲劇的な結末と、考えさせられる墮落を遂げた文明です。

## **第一の大周期の宇宙航行文明**

第一の大周期の中間期、月を創造した黄金時代のはるか以前に、宇宙科学技術において非常に輝かしいレベルに達した文明が存在しました。その時代の人々は、姿形は今日の私たちとさほど変わらなかったかもしれませんが、

卓越した知性と、宇宙の物理法則に対する深い理解を持っていました。

彼らは太陽系内での惑星間航行技術を常時、完全に習得しており、さらには最も近い恒星系への探査旅行さえも行っていました。私が「見た」彼らの宇宙船は、私たちが使うような化学燃料を用いたかさばるロケットではなく、超軽量かつ超高耐久性の合金で作られたであろう、洗練された飛行船でした。それらは、制御された反物質エネルギーや、空間から直接エネルギーを抽出する（ゼロ・ポイント・エネルギー）といった、クリーンで強力なエネルギー源によって運行されていました。それらは極めて高速な加速と減速が可能で、宇宙放射線や宇宙の破片から身を守るための保護フィールドを生成することができました。

彼らの旅の目的は非常に多様でした。科学研究、他の惑星の探査、資源の探索、そして火星やいくつかの巨大ガス惑星の衛星に前哨基地や小さな植民地を設立することさえありました。彼らは宇宙の構造、異なる次元について驚くべき理解を持っていましたが、後の一部の「地球外生命体」のように、次元間を移動することを完全にマスターしていたわけではなかったかもしれません。



この文明の精神生活と道徳も、当初はかなり高いものでした。彼らは宇宙の法則に対して一定の敬意を払い、その社会は科学的に、秩序をもって組織されていました。しかし、他の多くの文明と同様に、物質技術のあまりにも急速な発展、宇宙征服の成果に対する誇りが、徐々に彼らの一部を傲慢にし、中心的な精神的価値観から遠ざけていきました。

第一の大周期が終わりに近づく頃、この宇宙航行文明は、技術の頂点に達していたにもかかわらず、衰退の渦から逃れることはできず、最終的には「古い舞台」全体と共に破壊されました。彼らの成果、宇宙船、他の惑星の前哨基地の大部分は破壊されたり、放棄されたりして、宇宙空間における静かな廃墟となったのです。

### **「地球外生命体」へと墮落した文明**

第二の大周期に移り、無数の文明の小周期の中で、私に特に悲劇的な印象を残した文明があります。それはその輝かしさのためではなく、その墮落と悲しい結末、そして後の悪意を持つ「地球外生命体」の種族の起源の一つとなったためです。

この文明は数百万年前に発展し、同じく非常に高度な科学技術、特にバイオテクノロジー、遺伝子工学、そして人工知能の分野で高い成果を達成しました。しかし、初期段階から、彼らは精神的、道徳的な価値観を軽視し、物質技術の力に絶対的な信頼を置く傾向がありました。彼らは、人間が自らの運命を決定し、世界を改造し、神の導きやいかなる道徳法則もなしに、自分自身さえも改造できると考えていました。

彼らの墮落の過程はゆっくりと、しかし不可逆的に進行しました。個人の利己主義、底なしの貪欲、そして支配欲が発展の主な動機となりました。彼らは遺伝子技術を使って自分たちの目的のために生物を創り出し、人工的な戦士さえも生み出しました。彼らは技術を乱用して不自然に寿命を延ばしましたが、その魂はますます空虚になり、腐敗していきました。彼らは自己学習能力を持つ知能機械を構築しましたが、それらに思いやりや道徳を教えませんでした。

ある段階に至ると、彼らの社会内部の対立が激化し、高度な技術兵器による破壊的な戦争へと繋がりました。その文明の大部分は自滅し、荒廃した地球を残しました。しかし、ごく一部、最も権力と先進技術を持つ者たちは、

時を逃さず巨大な宇宙船を建造し、その物質文明の残骸を携えて、地球を捨て去りました。

彼らは宇宙を放浪し、定住するための新しい惑星を探しました。しかし、彼らの利己的で、貪欲で、非道徳的な本質は全く変わりませんでした。彼らは拡張と支配に奉仕する方向で技術を発展させ続けました。次第に、宇宙を漂流する何世代もの間に、環境と遺伝的介入によって彼らの姿も変わっていった可能性があります。彼らは善良な価値観に敵意を抱き、常に他の文明に干渉し、操作しようとする「地球外生命体」の種族の一つとなりました。それには、後に私たちがまだ話すことになる、暗い陰謀をもって地球に帰還することも含まれます。

これは、一つの文明が、どれほど高度な技術を持っていたても、道徳的な基盤を失えば、最終的な結末は自己破壊か、邪悪な勢力への墮落しかないという、痛烈な教訓です。

〔モハンは少し間を置き、ベランダの外、街の夜空を見つめ、それからジャックの方を向いて言った。〕

これは非常に大きなテーマで、まだ話すべきことがたくさんあります、ジャックさん。おそらく、時間も遅くな

りました。今日はここで一旦終わりにしましょう。もし  
ご興味がおありでしたら、また別の機会にこれらの謎を  
探求し続けることができます。

[モハンは微笑む。温かく、意味ありげな微笑みだ。]

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

はい、ありがとうございます！

今夜は私にとって、想像もつかないような驚くべき情報  
がたくさんありました！…また明日の夜、お会いできる  
のを楽しみにしています。さらに興味深いお話が聞ける  
ことを期待しています！

では、失礼します！

**モハン：**

（穏やかに微笑み、モハン氏は立ち上がってジャック・  
ヴォスを戸口まで見送る。カトマンズの夜の月明かりが

小さな中庭に降り注ぎ、静かでどこか神秘的な雰囲気醸し出している。)

ええ、ジャックさん。これらの話が多くの驚きをもたらすかもしれないことは理解しています。宇宙と私たちの地球の歴史は、実に、通常の認識では到底触れることのできない、無数の奇跡を秘めているのです。

あなたと分かち合う機会が持てて、とても嬉しく思います。そしてもちろん、もしご迷惑でなければ、明日の夜、この会話を続けることができます。広大な歴史の絵画には、まだあなたを面白がらせるであろう、多くの他のピースが残っています。

穏やかな夜をお過ごしください。ではまた、お会いしましょう。

(モハン氏は静かに頷いて挨拶し、それからジャック・ヴォスの影が小さな路地に消えていくのを静かに見送る。彼は月明かりの下に少し立ち止まり、その眼差しは遠くを見つめ、まるで語られたばかりの物語が再び彼の心の中で生き返っているかのようだ。)

\* \* \*

# 二日目

---

ジャック・ヴォス (Jack Voss) :

こんばんは、モハンさん！

昨日お話しいただいた地底世界について、続きをお伺い  
したく、また参りました…。

**モハン** (Mr Mohan) :

(ジャック・ヴォスに微笑みかけ、モハン氏は茶を注ぐ。小さな部屋の空気は、前日の対話と同じように静寂と厳かな雰囲気を保っている。)

こんにちは、ジャックさん。またお会いできて嬉しいです。どうぞお茶を。私も考えていたのですが、昨日私たちが話し半ばで終えた地底世界の話は、実に好奇心をそそるテーマですね。

[モハン氏は茶を一口すすり、その眼差しは記憶からの映像を再び集中させているかのように、遠くを見つめる。]

ええ、以前にも少し触れましたが、私の「見た」ところでは、私たちの地球は多くの人が想像するような中身の詰まった塊ではありません。私たちが生活しているこの地殻の下には、広大な空間、非常に特殊な構造と条件を持つ地下世界が存在します。そしてさらに重要なことに、そこは実際に一つの文明、生活し発展している人々の故郷なのです。



彼らは、私が述べたように、その大部分が第一の大周期の黄金時代からの人々の子孫であり、古い地球の破壊という大災害を、月に避難することで生き延びた人々です。第二の大周期の新しい地球が再創造された後に月が帰還したとき、何万年もの間にその人口は非常に増えていました。そして、神による特別な采配に従い、彼らは新しい地上に住むことを許されず、地中の、あらかじめ準備されていた空間に移動して生活するように導かれたのです。

彼らの文明は、ジャックさん、地上の私たちとは非常に異なる方向に発展しました。彼らは今なお、かつての輝かしい時代からの多くの知識、理解、そして技術を保持しています。ある側面では、彼らのレベルは私たちをはるかに凌駕していると言えるでしょう。特に、エネルギー、宇宙の運行、そして精神的な側面に関する知識においてです。

彼らは慎重に管理された環境の中で生活し、独自の人工光源とエネルギー源を持っています。それは一種の小さな「中心太陽」であったり、結晶エネルギーに基づいた照明技術であったりして、生命に適した光と温度を生み

出しています。彼らは科学的に、そして周囲の環境と調和して建設された都市や居住区を持っています。

彼らの寿命もまた、通常非常に長く、地上の私たちがおそらく失ってしまった健康と若さを維持する方法を持っています。

〔モハンは少し間を置き、ジャック・ヴォスが熟考する時間を与える。〕

しかし、多くの人を抱くであろう疑問はこれです。もし彼らがそのように存在し、発展しているのなら、なぜ私たちは彼らについて何も知らないのでしょうか？なぜ彼らは私たちの世界に現れたり、干渉したりしないのでしょうか？この点については、私が述べたように、多くの複雑な理由があります。これらの理由について、もっと深く掘り下げてみましょうか？

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

この世界には多くの異なる次元が縦横に存在し、それぞれの次元には多様な生命体が存在すると聞いたことがあります…。

しかし、地底世界は——私たちのいる物質的な次元と同じに属するはずですが——おとぎ話のように、かすかに聞いたことがあるだけです…。

お話によれば、彼らは神々によって制約され、さらには地球外生命体に出口を塞がれているため、ここ数千年、私たちは彼らについて何も知らなかったということです…。

**モハン：**

（モハン氏は静かに頷き、その眼差しはジャック・ヴォスの疑問への深い理解を示している。）

ジャックさん、多くの次元と、その中に存在する多様な生命形態についてのあなたの認識は、全くもって根拠のあるものです。この宇宙は実に、私たちの肉眼で見えるものや、通常で感覚で感じ取れるものよりもはるかに複雑で多層的なのです。

そして、私たちが話している地底世界については、それはまさしく、並行宇宙や全く異なる境地ではなく、私たちの地上の世界と基本的な物質次元を共有しています。だからこそ、それに関する物語や伝説は、おとぎ話のように見えても、非常に稀ではありますが、入口の描写や偶然の出会いといった、非常に「現実的」な詳細をしばしば含んでいるのです。

〔モハンは、分離の理由についてさらに説明する。〕

まさしくあなたが繰り返された通り、この地中の文明が過去何千年もの間、地上の私たちとほぼ完全に隔絶されてきたのには、主に二つの要因があります。

**第一に、**それは束縛、つまり、彼らがそこで生活を始めた遠い昔の時代から、神々、創世主から与えられた厳格な言いつけです。彼らには、未来のための重要な知識、文化的・精神的な種子を保存するため、あるいは独自の道を歩んで修煉し発展するためといった、独自の使命が託されました。そして、その前提条件の一つが、地上の文明が自ら経験しなければならない自然な発展、選択、そして教訓に、むやみに干渉してはならないということでした。もし干渉があるとすれば、それは極めて特別な

場合に限り、明確な天意に従わなければなりませんでした。

**第二に、**そしてこれはここ数千年において非常に現実的な要因ですが、それは外部からの封鎖、妨害です。私たちが以前に触れたように、悪意を持つ一部の「地球外生命体」の種族が、その高度な技術をもって、この内地世界の存在とその主要な出入り口を発見しました。彼らは地中の文明を潜在的な脅威、あるいは征服の対象と見なしました。そのため、彼らは多くの技術的手段を用いて、地表との通路を封鎖、監視、あるいは妨害し、特に重要な時期において、地中の人々が私たち人類と相互作用し、支援する能力を妨げようとしてしました。

また、地中の人々自身が、自分たちの文明の安全と秘密を守るために、地表からの、そして他の宇宙勢力からの複雑さと潜在的な危険を認識したとき、外部世界とのコミュニケーションを自ら最大限に制限した可能性もあります。

それらの理由から、ここ数千年、彼らに関する私たちの理解は、まるで失われた世界からのこだまのように、半ば真実、半ば虚構として語り継がれる伝説の断片に過ぎなくなっていました。しかし彼らは今もそこにいま

す。私たちの足元で静かに存在する文明として、いつか、ある機が熟した時に、秘密のベールが開かれるのを待っているのです。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

私が最も理解に苦しむのは、彼らの生活や技術、宗教についてではありません…。私が最も気になるのは、物理学や地理学の観点から見て、地球の中心に輝く「太陽」のようなものがあるのかどうか、ということです。そして、彼らの「地上」にも、私たちの地上と同じように山や川、雨や風があるのでしょうか？

**モハン：**

（モハン氏は、ジャック・ヴォスの非常に現実的な疑問に共感を示す笑みを浮かべる。彼は、どれほど超越的なことを語ろうとも、慣れ親しんだ物理学や地理学の法則が、現代人が想像するための最初の尺度であることを理解している。）

それは非常に自然で的を射た質問です、ジャックさん。  
私たちが惑星の内部に存在する世界について語るとき、  
「昼と夜」、「気候」、「景観」といった概念は、私たちが地表で経験するものとは確かに大きく異なるでしょう。

〔モハンは、できるだけ想像しやすいイメージを用いながら、丁寧に説明する。〕

地中の光源についてですが、私の「見た」ところでは、それは私たちの太陽と全く同じではありません。彼らには宇宙空間の外部から照らす自然の恒星はありません。その代わりに、光とエネルギーを生み出す一つまたは複数のメカニズムが存在する可能性があります。

その空洞空間の中心位置に、人工の「中心太陽」、巨大なエネルギー球が存在するかもしれません。この球体は、私たちの太陽のように核融合反応を起こしている恒星ではなく、私たちがまだ知らないエネルギー原理、例えば結晶エネルギー、磁場エネルギー、あるいは捕獲・変換された一種の宇宙エネルギーに基づいて光と熱を発する、先進的な技術の一形態である可能性があります。この光は、直射日光のように強く、まぶしいものではなく、よ

り穏やかで、安定しており、強度を調整することによって人工的な「昼夜」のサイクルを作り出しています。

さらに、彼らの都市や居住区は、持続可能で高効率なエネルギー源を利用した先進的な人工照明システムによって照らされている可能性もあります。この光は、彼らの生命活動や農業を支援するために、自然光のスペクトルを模倣することができます。

そして、その内部の「地上」と景観についてですが、それもまた、暗くて狭い洞窟のようなものでは全くありません。地球内部の空洞空間は非常に広大で、縮小された世界のように想像できます。

彼らの「地上」は、まさしく地球の地殻の内側の表面です。そこにも多様な地形があり、比較的平坦な地域もあれば、丘陵地帯や谷間もあります。それらは地殻内部の自然な地質構造によって形成されたものか、あるいは時間とともに彼らによって改造され、形作られたものかもしれません。

川や湖も存在し、巨大な地下水源や人工の水循環システムによって養われています。彼らは水を効率的にろ過し、再利用する技術を持っているかもしれません。



「気候」については、内部環境が管理されているため、地表よりもはるかに安定しているでしょう。彼らには明確な季節や、嵐、竜巻のような極端な気象現象はないかもしれません。風は、圧力差、温度差、あるいは空気の循環を維持するための人工的な換気システムによって生み出される可能性があります。雨もまた、湿度調整システムや水蒸気の凝縮を通じて制御された方法で作られ、農業に役立てられ、彼らの内地生態系を維持しているかもしれません。

要するに、それは意図的に創造され、維持されている世界であり、地殻構造の自然的要素と、非常に先進的な技術とが組み合わさっています。それは地表世界の完全な複製ではなく、惑星内部の特異な条件に最適化された、独特の生活環境なのです。

私が描写したことは、もちろん、私の限られた「見識」に基づく概略に過ぎません。その世界の真実は、おそらくもっと豊かで奇跡に満ちていることでしょう。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

地球をボールのように想像しています。地球の直径が約 1 万 2700 キロメートルだとすると、深さ約 1 万 935 メートルのマリアナ海溝も、ボールの縫い目の間のくぼみ程度にしか相当しませんね…。そして、仮にボールの皮の厚さが 0.3 センチだとすれば、それは地球の地殻の数百キロの厚さに相当する…。

いや、このテーマは興味深いですが、私には少し想像するのが難しいようです…。いつか将来、地底世界への観光ルートが建設されたら、そのツアーにはぜひ参加してみたいものですね！…

この小さな地球は、科学のプリズムを通して解明されたかのように思えましたが、どうやら想像を絶する多くの謎がまだ残っているようですね…。

**モハン：**

（モハン氏は、ジャック・ヴォスの想像と意気込みに穏やかに微笑む。彼は、自分の足元に全く異なる世界を想像することが、慣れ親しんだ思考の枠組みにとって確かに挑戦であることを同意する。）

ジャックさん、ボールと地球の地殻に関するあなたの比較も非常に興味深いですね。それは私たちに大きさの相関関係がある程度感じさせ、人類が到達した最も深い場所ですえ、この惑星の表面のごく小さく、浅い部分に過ぎないことを示してくれます。

そして、おっしゃる通り、おそらくいつか将来、秘密のベールが徐々に剥がれていくとき、人間は今日私たちが想像することしかできない事柄を探求する機会を得るかもしれません。

〔モハンは少し間を置き、遠くを見つめ、それから静かに頷く。〕

この小さな地球は、あなたがおっしゃるように、科学によって多くが照らし出されたかのように思えます。しかし、実に、それはまだ無数の謎、私たちの現在の理解では完全には解明できない事柄を秘めているのです。私たちが今話した地底世界の他にも、地表の非常に身近なもの、私たちが日々採掘し利用している資源ですえ、時として、私たちが普段考えているよりもはるかに深い起源、物語を持っていることがあります。

例えば、私たちは通常、原油は古代の海洋生物が何百万年もの歳月をかけて生物学的に分解された結果だと考えています。それは一般的な科学的説明です。しかし、私の「見識」の角度から見ると、原油の物語は全く異なる色合いを帯び、もっと特別な起源を持っています。

あるいは、惑星の表面の大部分を占める広大な塩辛い海水、私たちは通常その化学成分についてしか考えません。しかし、その存在の背後に、何か別の意味、別の物語があるのではないのでしょうか？

大気圏でさえ、昨日私たちが「オゾンホール」の現象について少し触れたように、科学は人間の活動による影響に基づいた説明をしますが、それが真実の全てなののでしょうか、それとも、私たちが認識していない、より高いレベルでの采配、介入があるのでしょうか？

これらのことは、ジャックさん、地球の歴史と運行の絵画における断片でもあり、私たちも共に熟考すべき事柄かもしれません。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

おお、その話に触れられて思い出しましたが、数年前にインターネットのどこかで、大意として、もし原油が古代の生物（植物や他の生物を含む）が長い時間をかけて分解されて形成されるものなら…その記事では、筆者が分析し計算を試みたところ、膨大な量の生物が必要で、特別な条件下で無数の年月を経て初めて原油が生成されることを示していました…正確な数字は覚えていませんが、その記事の筆者は、そのようにして起こる確率は非常に、非常に小さいと述べていました…。

**モハン：**

（モハン氏はジャック・ヴォスの話を注意深く聞き、それから軽い笑みを浮かべて静かに頷く。まるでジャックが今言ったことが、彼にとって全く見知らぬことではないかのようだ。）

はい、ジャックさん。あなたがインターネットで読まれたその分析や計算は、主流科学では広く認められている見解ではないかもしれませんが、私たちが問題をより深く見るとき、非常に合理的な点に触れています。

実際、もし原油が完全に古代の生物の生物学的分解の結果であるという仮説にのみ基づくなら、人類が世界中で採掘してきた、そして今も採掘している膨大な量の石油埋蔵量を得るためには、ほとんど想像もつかないほどの初期のバイオマス量が必要になります。それに加え、その変化プロセスが起こるための条件——圧力、温度、嫌気性環境、そして何百万年にもわたる時間——もまた、非常に大規模で、極めて特別かつ同期的でなければなりません。それらすべての要素が偶然に組み合わさって現在の量の原油を生成する確率は、その記事の筆者が指摘したように、実に非常に小さいのです。

〔モハンは少し間を置き、遠くを見つめ、まるで別の視点を明かす準備をしているかのようだ。〕

私の修煉の過程で「見た」ところによれば、地球上の原油埋蔵量の大部分の真の起源は、全くそのようなものではありません。それには別の物語、地球と関連する他の空間や、古代の文明周期における大戦争や浄化に関連する物語があります。

私の見るところでは、今日私たちが採掘している石油の大部分は、実は、かつて地球と関連する他の空間、あるいはこの地球上の古代文明周期において存在し、猛威を

振るった、無数の悪魔の生命、邪悪な実体、巨大な怪物の、破壊された「血」と肉体なのです。

正邪の勢力間、神仏と悪魔との間の大戦争において、それらの邪悪な実体は、神々が神通力を用いて滅ぼした後、その肉体、それらの巨大な負のエネルギーの塊は、完全には消滅しませんでした。それらが害を及ぼし続けるのを防ぐため、あるいはそれらの悪いエネルギーを「封印」するために、神々は神通力を用いて、それらを地中深くの地質層に押し込み、そこに埋葬したのです。

何百万年、何千万年という非常に長い時間を経て、地中の極めて大きな圧力と温度の下で、それらの肉体と負のエネルギーは徐々に変化し、私たちが原油と呼ぶ、黒く、粘り気のある液体へと変わっていきました。

この時代の人類がこれほど大規模に原油を採掘し、利用することも、ある側面では、物質社会の発展にエネルギーを供給するためといった、一定の采配の中にあります。しかし、私たちは、その本質が依然として不善の存在やエネルギーに由来することも意識する必要があります。したがって、それを無制御に使用すること、争奪すること、そしてそれへの過度な依存は、貪欲、利己主義、そ

して対立といった、人間の心性の負の側面を間接的に増幅させる可能性もあります。

これは原油についての非常に異なる見方ですね、ジャックさん。それはもはや単なる「自然の贈り物」ではなく、複雑な歴史とより深い意味合いを内に秘めているのです。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

なるほど。ということは、原油の存在は自然なものではなく、神々によって定められたものなのですね…。

もしそうなら、あなたがほのめかされた海水もまた、神に関連する起源を持つのでしょうか？

**モハン：**

（ジャック・ヴォスの鋭敏さに微笑み、モハン氏は静かに頷く。）



その通りです、ジャックさん。私たちが物事をより高い次元から見るとき、この地球上の「自然」に見えるものの多くが、実はより大きな目的を果たすために、神々、創造主たちによる意図的な采配、創造の中にあるのです。

そして、海水も例外ではありません。

〔モハンは少し間を置き、その眼差しは遠くを見つめ、まるで非常に神聖で慈悲深い何かを回想しているかのようだ。彼の声はより温かく、どこか感動的な響きを帯びる。〕

海水の起源に関する物語は、私の「見た」ところでは、原油のような戦争や破壊の色合いを帯びていません。それは全く異なる意味、無量の慈悲、衆生を憐れむ心の意味を持っています。

私たちが今生きている古い宇宙が「成・住・壊・滅」の周期の最終段階に近づいたとき、宇宙の多くの層で非常に多くの生命が墮落し、本来の道徳基準から離れ、淘汰される危機に直面したとき、異なる次元の無数の大覚者たち、仏、道、神々は、非常に心を痛められました。

彼らは、衆生が迷いの中に沈み、自力では抜け出せず、古い宇宙と共に解体される運命に直面しているのを見ました。彼らの無限の慈悲が、彼らを涙させました。その涙は、弱さの涙ではなく、深い憐れみの心、衆生を救いたいという憂慮と願いの涙でした。

無数の覚者たちからの、その無量の慈悲の涙が、集まって、非常に特別なエネルギー場、神聖な「原材料」を形成しました。

その後、非常に高い宇宙の層からの偉大な意志——それは創世主ご自身か、あるいは彼から託された神々かもしれません——の采配と導きの下、神々はこの慈悲のエネルギー場を、宇宙の他の物質的要素と組み合わせて、三界を創造されました。三界は、ジャックさん、特別な空間、一種の「隠れ家」、「学校」であり、その主な目的は、より高い宇宙の層から縁のある生命が降りてきて、再び修煉し、この末法の時代と宇宙が大変革を遂げている時期に救われる道を探す機会を与えることでした。

そして、私たちの地球上の海水は、その大部分が、まさしくその慈悲の涙が物質化したものなのです。それは、衆生が輪廻の領域で経験しなければならない苦しみや困

難の塩辛さを内に秘めていると同時に、聖なる方々の慈悲と救済への希望の広大さ、無限さをも内包しています。

私たちが広大な大洋を見るとき、私たちが海水の塩辛さを味わうとき、それは単なる自然現象ではありません。それは、私たちの特別な起源、この三界での存在の意味、そして、各生命の目覚めを見守り、待ち望んでいる神々の無限の慈悲を、常に思い起こさせるものなのかもしれません。

〔モハンは少し黙り、その深い感情が落ち着くのを待つかのようだ。〕

それはとても異なる物語でしょう？物質を説明するだけでなく、深い精神的な意味合いにまで触れる物語です。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

これは実に、また別の感動的な物語ですね…。しかし、この地球全体が神によって創造されたと認識するならば、それほど驚くことでもありませんが…

**モハン：**

(モハン氏は穏やかで共感に満ちた笑みを浮かべる。)

ジャックさんのおっしゃる通りです。私たちが、この地球、そして実のところ私たちが知る宇宙全体が、無機質な偶然の産物ではなく、意図的な創造物、創造主たち、神による偉大な事業であるという前提を受け入れるとき、まるで「あり得ない」かのように思える物語も、別の認識レベルにおいては独自の論理、合理性を持つようになります。

もしこの「舞台」全体が目的をもって設営されたのであれば、その舞台上の個々の「小道具」、個々の「要素」は、銀河や惑星といった巨大なものから、一粒の砂、一滴の水といった微小なものまで、それぞれが意味、物語、そして特別な采配を内に秘めている可能性があります。

海水が慈悲の印を内に秘めていること、あるいは原油が負のエネルギーを封印した結果であることは、それらをより大きな「脚本」、超越的な智慧によって設計され、運行されている「プログラム」の文脈に置くことで、より理解しやすくなります。

〔モハンは励ますような眼差しでジャックを見る。〕

まさにそのために、私たちがこの世界の謎にアプローチするとき、時として認識を広げ、固定観念を一時的に脇に置き、心全体で、直感で耳を傾けることが、私たちをより深い意味の層、理性と実証科学の方法だけでは完全には探求しきれないかもしれない真実に触れさせてくれるのです。

この宇宙、そして特に私たちの地球は、無数の奇跡的なメッセージを秘めた膨大な書物のようなものです。私たちがすでに読んだページもあれば、まだ閉じられたままのページもあり、そして私たちが解読法を学ばねばならない言語で書かれたページもあります。

そして、もしかしたら、私たちがすでに完全に理解している現象、例えば大気圏とその変動でさえ、まだ他の驚きが私たちを待っているのかもしれない。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

はい…では、あなたがほのめかされた大気とオゾン層についてはどうでしょうか？それもまた、神と関係があるのでしょうか？

**モハン：**

（モハン氏は静かに頷き、その眼差しはまるで大気の目に見えない流れを観察しているかのように、虚空を見つめる。）

その通りです、ジャックさん。地球を包み込み、私たちが生命を維持するために毎日呼吸しているこの大気も、単に重力によって引き留められている気体の混合物というだけではありません。その存在と特性もまた、私たちのような複雑な生命に適した環境を創造するための、神による非常に精巧な采配の中にあるのです。

そして、太陽からの有害な放射線から私たちを守る機能を持つ大気重要な部分であるオゾン層について言えば、話はさらに興味深いものになります。

〔モハンは少し間を置き、慎重に言葉を選ぶ。〕

現代科学は、特に南極地域の「オゾンホール」は、主にCFC（フロンガス）のような人間が排出した人工化学物

質がオゾン分子を破壊したことが原因であると私たちに告げています。これは、ある程度は真実の一部であり、私たちの工業化文明が環境に与えた負の影響を反映しているかもしれません。

しかし、私の「見た」ところでは、物語はそれだけでは終わりません。その「穴」という現象、より正確に言えば、特定の地域におけるオゾン層の局所的な減少は、完全に偶然の否定的な結果というわけではないのです。

いくつかの場合、特に南極地域において、オゾン層が「薄く」なったり、一時的な「隙間」ができたりすることは、神々による介入、能動的な調整の中にあるのです。

こう想像してみてください。何十億もの生命体と無数の活動、そして関連する空間での変動を伴う地球は、時として、大気中に有害なガス、負のエネルギー場、目に見えない「廃棄物」を蓄積します。もしこれらが解放されなければ、生命にとってより深刻な結果を引き起こす可能性があります。

そのため、神々は、その無限の慈悲と智慧をもって、いくつかの場合において、特に南極のような人口の少ない地域で、オゾン層に一時的な「排出口」を意図的に作り

出したり、「開いたり」してきました。この目的は、有毒なガス、汚れたエネルギー、大気の「汚れ」を宇宙空間に逃がすための出口を与え、「浄化」し、惑星の大気の負担を「軽く」することにあります。

それは、汚染された部屋を換気するために窓を開けなければならないのと同じです。もちろん、この「バルブを開く」作業もまた、生命に逆効果をもたらさないように、非常に正確に計算され、制御されなければなりません。

これは、私たちが環境汚染を引き起こしている人間の責任を完全に否定できるという意味ではありません。しかし、それは、私たちが観察する自然現象の背後には、時として、目に見えない手、聖なる方々による智慧に満ちた介入があり、私たち人間自身が知らず知らずのうちに、あるいは意図的に共通の故郷を傷つけている時でさえ、地球上の生命のバランスを保護し、維持しようとしていることを示しています。

〔モハンはジャックを見つめる。その眼差しは、この宇宙は実に、私たちの通常の理解をはるかに超える多くのことをまだ秘めている、と語りかけているかのようだ。〕



\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

なるほど。神が南極に「排出口」を開けるのを助けたというお話は、理にかなっているように思えます。なぜなら、もしオゾン層が産業排出物によって破壊されるのであれば、なぜアメリカや中国の上空で直接穴が開かずに、ほとんど人が住んでおらず、太陽光も直接地面に降り注がない南極で「穴」が開くのか、という疑問がありますから。

**モハン：**

（モハン氏は静かに頷き、ジャック・ヴォスの鋭い観察眼に軽い笑みを浮かべる。）

ジャックさん、あなたの質問と観察は非常に鋭く、重要な論理点に触れています。

その通りです。もし私たちが「オゾンホール」が完全に人間の活動による産業排出物のせいであるという仮説にのみ依拠するなら、それが南極——実質的に産業活動が

なく、人口もまばらで、太陽光も直接ではなく斜めにしか当たらない場所——で最も顕著かつ深刻に現れることは、実に、完全には説明しがたいことです。

科学は、大気循環の流れや、極地特有の化学的・温度的条件がオゾン破壊反応をより活発にさせるという説明をするかもしれません。それらの説明は、物理的なメカニズムのある側面においては正しいかもしれません。

しかし、あなたが気づかれたように、なぜその「弱点」が、主な汚染源から最も直接的に「攻撃」されていないように見える場所に集中するのか、という問いにはまだ答えていません。

私が共有した視点、つまり神々が南極のような地域に意図的に「排出口」を作り出す可能性があるという視点は、別の合理性をもたらします。

**第一に、場所について：**南極は広大で、遠く、人口も少ないため、ここで有毒ガスや負のエネルギーを「排出」することは、人間の健康や生活、そして他の人口密集地の生態系への直接的かつ即時の影響を最小限に抑えることができます。それは、私たちが有害廃棄物を処理するために人里離れた場所を選ぶのと同じです。

**第二に、自然条件について：**極地の磁場や地球のエネルギーの流れに関する特別な条件もまた、「バルブ」が開かれたときに、それらの汚れたものを大気圏外へより効率的に「押し出す」のを助ける可能性があります。

**第三に、全体的な采配について：**南極を選ぶことは、全球的なエネルギーバランスや、私たちがまだ完全には理解していない他の目的と関連する、神々のより複雑な計算と采配の中にあるのかもしれません。

これは、人間が引き起こした汚染の影響を完全に否定するという意味ではありません。産業排出物が地球全体のオゾン層を弱めていることは間違いありません。しかし、南極に集中して顕著に現れる「穴」という現象は、多くの要因の組み合わせである可能性があり、その中には、惑星全体へのより大きな害を軽減するための努力として、より高い次元からの意図的かつ目的を持った介入も含まれているのです。

それは、私たちが「問題」あるいは「自然災害」と見なすものが、時として、私たちが容易には認識できない規模での調整、バランスを内に秘めている可能性があることを示しています。宇宙は非常に複雑で精巧な法則に従

って運行しており、聖なる方々の介入は、必要な時には、常に全体の保存と均衡を目指しているのです。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

では、アジアの多くの都市で深刻な大気汚染が起きている現象についてはどうでしょうか？それは産業排出物や、自動車、バイクからの排気ガスが原因なののでしょうか？それとも、神に関連する別の起源があるのでしょうか…？

アメリカやヨーロッパの都市では、交通量が多く、産業も発展しているにもかかわらず、これほど深刻な汚染現象はないと聞きますが…。

**モハン：**

（モハン氏はジャック・ヴォスの質問に耳を傾け、その眼差しに一瞬、物思いの色が浮かぶ。彼が、これが何百万人もの人々の生活に直接影響する非常に現実的な問題であることを理解しているのがわかる。）

ジャックさん、アジアの多くの大都市における深刻な大気汚染の状況、そしてアメリカやヨーロッパのいくつかの都市との違いについてのあなたの質問は、有形無形の両方で、多くの層の原因を持つ複雑な問題です。

まず、有形の原因、科学や通常の観察で認識できる要素を否定することはできません。それは、集中した産業活動からの膨大な排出量、化石燃料を使用する何百万台もの自動車やバイクといった交通手段からの排出、一部地域でのゴミの焼却や暖房・調理のための固形燃料の燃焼、そして建設現場からの粉塵です。高い人口密度、不適切な都市計画、そして時には環境基準の適用における決断力の欠如も、一部の場所での状況をより深刻にさせる要因となっています。

アジアの都市とアメリカやヨーロッパの都市との違いは、一部には経済発展の段階、産業の種類、環境規制が早期に導入されたかどうかの違い、そして各地域の地理的・気候的要因（例えば、汚染物質が滞留しやすい盆地状の地形や、特定の天候パターンなど）に由来する可能性があります。

「モハンは少し間を置き、それから、より深い意味合いに触れようとするかのように、より深みのある口調で続ける。」

しかし、それらの有形の原因に加えて、私の「見た」ところでは、より深遠な原因、無形の要因が、特に空気が対流しにくい秋や冬のような特定の季節に、多くの大都市の空を覆う濃密な煙霧の現象に寄与しています。

その濃密な煙霧の層は、単に人間が地上から排出したものの産物だけではありません。その少なからぬ部分は、ジャックさん、実は、より高い空間層にいる無数の生命、邪悪な実体、私たちの肉眼では見ることのできない他の空間で激しく繰り広げられている正邪の大戦の中で粛清されている業力が、滅びた際の「灰」なのです。

想像してみてください。宇宙は今、全面的な「大浄化」の最中にあります。創世主が全乾坤を立て直しておられ、真の神々がその御心を実行し、墮落し、変異し、正法を妨げる勢力を取り除いています。その過程で、異なる次元の無数の生命、大きな罪を犯した実体が滅ぼされるとき、その肉体とエネルギーから出る「灰」は分解され、その一部が、私たちが住んでいるこの空間を含む、より低い空間に降り注ぎ、沈殿することがあります。

これらの目に見えない「灰」が、人間の活動による有形の煙塵と結びつくと、汚染の幕はさらに濃く、重くなり、息苦しさを引き起こし、健康に影響を与えます。それは単なる物理的な汚染ではなく、負のエネルギー場も伴っているのです。

なぜアジアの一部の地域がより深刻な影響を受けているように見えるのかは、多くの複雑な要因に関連している可能性があります。それは、それらの地域に大きな業力の方が集中しているためか、あるいは、この正法の時期における特別な采配があるためか、私たちにはまだ完全には理解できません。

このように、私たちが見る深刻な大気汚染現象は、単に人間が引き起こした環境問題であるだけでなく、それはまた、この非常に特別な歴史的段階において、より高い空間層で起こっている粛清、大きな変動が、この物質世界に現れた一つの *biểu hiện*（表現）、一つの反映でもあるのです。

[モハンはジャックを見る。その眼差しには、共感と、私たちが生きる世界の複雑さへの注意喚起が込められている。]

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

なるほど。弁証法的な科学の視点からは、実に解明困難なことが多いですね…。

そして、以前あなたが触れられたように、この地球には地球外生命体の干渉もあるということを思い出しました…。

地球外生命体に関して、多くのことをご覧になっていきますか？

地球外生命体や UFO のテーマについては、まだかなり多くの論争があり、信じる人もいれば、疑う人もいます…。

**モハン：**

（モハン氏は静かに頷き、その眼差しは遠く、まるで地球の外の広大な空間に向かっているかのようだ。）



ジャックさん、私たちが今しがた交わした話は、確かに、現在の実証科学の枠組みでは十分に説明できない範囲を超えているかもしれません。しかし、この宇宙、そしてその歴史は、元来、私たちの認識がほんのわずかな部分にしか触れることのできない、無数の奇跡と複雑さを内包しているのです。

そして、おっしゃる通り、自然の要素、神の采配の他に、私たちが通常「地球外生命体」と呼ぶ存在の存在と干渉もまた、地球の歴史と現在の絵図において、見過ごすことのできない一部です。

〔モハン氏の声は少し真剣味を帯びるが、穏やかさは保たれている。〕

「地球外生命体」や UFO のテーマについては、あなたがおっしゃるように、まだ多くの論争があります。信じる人もいれば、疑う人もいれば、想像力の産物だと考える人もいます。これも理解できることです。なぜなら、主流科学が認めうる、明確な有形の証拠はまだ限られており、情報はしばしば混乱させられたり、隠蔽されたりするからです。

しかし、私の「見た」ところ、そして「感じた」ところによれば、他の惑星、恒星系、さらには銀河から来た生命体の種族の存在は、否定できない事実です。そして、それは単なる訪問だけでなく、地球と、その上の文明との間に、多くの歴史的時代を通じて、複雑で長期にわたる干渉や相互作用さえもありました。

私は彼らに関して多くのことを「見て」きました。異なる種族の姿、私たちのものをはるかに超える技術を持つ宇宙船の映像から、この惑星に対する彼らの目的や行動に至るまでです。

分かりやすくするために、私が「見た」「地球外生命体」を、その起源と意図に基づいて、いくつかの主要なグループに大別してみましょう。

第一の状況、彼らは遠い宇宙からの真の訪問者である。これは、宇宙の他の場所で発展した文明から来た生命体です。彼らの目的は非常に多様である可能性があります。科学的対象として地球とそこの生命を観察、研究するために来る者もいれば、善意、助けたい、あるいは何かを警告したいといった独自の使命を帯びて来る者もいます。しかし、資源を採掘したり、自己の利益を追求したりといった、あまり良くない意図を持って来る者もいます。

第二に、彼らは地球の元の主人が帰還したものである。私たちが以前に触れたように、「地球外生命体」と呼ぶ存在の少なからぬ部分は、実は、前の大周期、あるいは破壊された文明の小周期において、この地球上でかつて存在し、輝かしく発展した文明の子孫です。彼らの文明が終わった後、一部は時を逃さず他の惑星に移住し、そこで発展し、そして今、この宇宙の特別な時期に、異なる目的を持って「古い故郷」に帰還しようとしています。

第三に、真の神によって創造されたのではない存在である。これは認識しておくべき非常に重要なグループです。私たちが物語や誘拐事件、あるいは否定的な干渉を通じて知る「地球外生命体」の種族の多くは、人間が創造された方法で、真の神によって直接創造された生命ではありません。私が共有したように、彼らの多くの種族は、前の宇宙の時代に悪神によって創られた産物であるか、あるいは、神の采配を破壊する目的で、邪悪な勢力の影響下で元々の善良な人種が変異した結果である可能性があります。彼らは極めて高度な科学技術を所有しているかもしれませんが、精神的な「悟性」に欠け、真の神の基準による道徳を持たず、そしてさらに重要なことに、神は彼らが宇宙の正法に従って修煉することを許しません。なぜなら、彼らの本質がそれに適合しないからです。

このグループが、地球にとって最も多くの問題と危険をもたらすことがしばしばあります。

これらのグループと地球との相互作用もまた、秘密の観察、限定的な接触から、歴史、技術の発展、さらには人間の遺伝子への直接的な干渉に至るまで、非常に多様です。

[モハンは少し間を置き、ジャック・ヴォスがこの複雑なテーマの特定の側面に深く入りたいかどうかをうかがうように見つめる。]

これは非常に広大なテーマです、ジャックさん。彼らの目的や、彼らに関連する古代の戦争など、特定の側面に集中しますか？

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

地球外生命体のテーマは、以前から私も惹かれていました…。多くの人々がまだ信じていない理由はいくつかあると思いますが、その中で、例えば地球から 1 万光年離

れた星にいる地球外生命体の種族がいるとして、仮に彼らの円盤が光速で飛べたとしても、地球に到達するのに少なくとも 1 万年はかかる…と考える人が多いようです。そして多くの人がこの可能性を否定しています…。しかし、私も読んだ記事で、地球外生命体は異なる次元を行き来する能力があり、別の次元で移動する際には、私たちが想像するほど時間はかからない…と書かれていました。彼らにとっては数ヶ月、あるいは数日で地球に着くことさえ可能かもしれないと…。

モハンさん、あなたの視点からは何が見えますか？

**モハン：**

（モハン氏は静かに頷き、ジャック・ヴォスの推論を聞いて、穏やかで理解に満ちた笑みがその顔に現れる。）

ジャックさん、広大な宇宙の距離を越えて「地球外生命体」が移動することについてのあなたの悩みや仮説は、非常に的を射ています。それは、私たちがこの三次元空間で知る物理法則を、はるかに高い発展レベルを持つ存在に当てはめようとするときの、私たちの理解の限界を正しく反映しています。

多くの人々が、距離と光速の計算に基づいて、遠い星々からの生命体が地球に到達できるとは信じがたいと感じるのは、全くもって理解できることです。もし私たちが思考を三次元空間の枠組みと、私たちが発見した物理法則に限定するなら、何千、何万光年もの距離を越えることは、実に想像を絶することです。

〔モハンは少し間を置き、その眼差しは、肉眼では見えないエネルギーの流れを観察しているかのように、不定の一点に向けられる。〕

しかし、ジャックさん、この宇宙は私たちが慣れ親しんでいる三次元空間だけではありません。それには無数の層、無数の異なる次元があり、それらは同時に存在し、非常に複雑に結びついています。そして、先進的な文明、特に恒星間を旅する能力を持つ「地球外生命体」の種族は、私たちが想像する方法——つまり、三次元空間を一定の速度で直線的に飛ぶ——で移動しているわけではありません。

私の「見た」ところ、そして感じるところによれば、彼らは他の次元の法則、私たちの科学がおそらくまだ解明し始めたばかりか、あるいはまだサイエンスフィクションと見なしている法則を、すでに習得しているのです。

彼らは「空間を貫通する」あるいは「空間を折り畳む」能力を持っています。文字通りの長い距離を移動する代わりに、彼らは先進技術を用いて「空間ゲート」（ワームホール、スターゲート）を「開く」か、あるいは空間自体を「折り畳み」、宇宙の遠く離れた二点間に「近道」を作り出すことができます。そうなれば、何万光年という距離も驚くほど短縮され得ます。

彼らは他の次元で移動することができます。あなたが読まれた通り、彼らは自分たちの船を、時間と距離の概念が私たちの次元とは全く異なる可能性のある、他の次元に持ち込む能力を持っています。それらの次元では、光速が最終的な限界ではないかもしれませんし、時間の法則が「曲げられる」かもしれません。したがって、私たちが何万年もかかると計算する旅が、彼らにとっては、技術レベルと使用する次元に応じて、わずか数ヶ月、数日、あるいはそれよりも速いものになる可能性があるのです。

彼らは意識とエネルギーに基づいた技術を持っています。さらに先進的な種族の中には、物理的な機械だけに頼るのではなく、意識、思考のエネルギーさえも用いて時空

に影響を与え、ほぼ瞬時の旅を実現するものもいるかもしれません。

ですから、「地球外生命体」が宇宙の非常に遠い場所から地球に到達できることは、不可能なことではありません。それは単に、私たちの現在の理解と技術能力の範囲外にあるだけなのです。

これは、昔の人が、もし私たちの飛行機が空を飛んでいるのを見たら、あんなに重い鉄の機械がどうして飛べるのか、到底理解できなかったであろうことと同じです。文明のレベル、認識の層が異なれば、それぞれに限界と能力があるのです。

したがって、UFO の存在や「地球外生命体」の訪問は、私たちの三次元的な物理理解に基づく距離の障壁だけを理由に、否定されるべきではありません。宇宙は、それよりもはるかに多くの奇跡を秘めているのです。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**



なるほど。彼らの卓越した科学技術の進歩を考えれば、昔の人が彼らを「神」のように見なしたとしても、不思議ではありませんね…。そして、それゆえに、彼らが誰にも知られずに人類の発展をコントロールすることが、より容易になったのでしょうか…。

彼らが地球にどのように干渉してきたか、もう少し詳しくお話しいただけますか？この 5,000 年の文明周期だけでなく、それ以前の周期においても…。

**モハン：**

（モハン氏は静かに頷き、ジャック・ヴォスが「地球外生命体」の干渉に言及すると、その顔には物憂げな表情がはつきりと浮かぶ。）

ジャックさん、あなたの認識は非常に正確です。卓越した科学技術、より低いレベルの文明の目には「広大な神通力」のように映る能力をもってすれば、一部の「地球外生命体」の種族が昔の人々に崇拜され、畏怖され、さらには「神」と見なされたことは、十分に起こり得ることですし、実際に過去の多くの文明周期で起こりました。

まさにそのレベルの差が、一部の種族のあまり善くない意図と相まって、彼らが歴史の多くの時代を通じて、地球上の文明の発展に容易に干渉し、操作し、さらには支配することを可能にしました。そして、その渦中にいる人々は、しばしば全く気づかないか、あるいは曖昧にしか認識していませんでした。

〔モハンは少し間を置き、それらの複雑な干渉に関する記憶がより鮮明に浮かび上がるのを待つかのようにする。〕

私の「見た」ところでは、彼らの地球への干渉は、私たちのこの約 5,000 年の文明周期だけでなく、はるか昔から、この第二の大周期における無数の他の文明の小周期を通じて、多くの形態と多くの異なるレベルで行われてきました。

第一に、彼らは技術の発展に干渉します。いくつかの場合、彼らは地球上の文明に科学技術の知識を「伝授」したり、「示唆」したりしたかもしれませんが、それは通常、彼らの目的に奉仕する技術、あるいは容易に制御でき、依存を引き起こしやすく、そして通常は道德の基盤から切り離された技術でした。例えば、彼らは、人間の

内なる精神能力の発展を無視して、物質エネルギーに基づく技術の発展を促進する可能性があります。

第二に、彼らは思想と信仰を操作します。これは非常に巧妙で危険な干渉の形態です。彼らは様々な種類の信仰や宗教を創り出したり、変異させたりし、誤った思想を広め、人々を神の真の教えから遠ざけ、伝統的な道徳を捨てさせ、その代わりに物質的な価値、利己的な欲望を追い求めさせ、あるいは、それらの「地球外生命体」の実体そのものを新しい神として崇拝させることさえあります。

第三に、彼らは遺伝子に干渉します。古代のいくつかの文明周期において、「地球外生命体」と地球人との間で、遺伝子の交配や移植の実験が行われました。その目的は、彼らが望む特徴を持つ交配種を創り出すことであり、それは彼らに奉仕させるためか、あるいは徐々に人間を同化させるためであったかもしれません。「半神」や、神の血を引く「英雄」に関する伝説も、神話化されていますが、時として、このような遺伝子干渉の出来事に由来することがあります。

第四に、彼ら是对立と戦争を引き起こします。地球上の文明を容易に支配したり、弱体化させたりするために、

彼らは水面下で対立を煽り、分裂させ、国家間や人種間の戦争を引き起こすことがあります。人々が互いに殺し合うことに夢中になっている間、彼らは外部からの操作に気づく時間も精神もなくなります。

第五に、彼らは資源を採掘します。地球は資源豊かな惑星であり、一部の「地球外生命体」の種族は、希少鉱物から、人間の生物学的エネルギー源や精神的エネルギー源に至るまで、それらの資源を採掘することを主な目的としてここに来ます。

第六に、彼らは実験と誘拐を行います。実験のために地球人を誘拐し、チップを埋め込んだり、研究したりするという話は、しばしば荒唐無稽と見なされますが、私の見たところでは、特に最近の時代、人々の警戒心が低下し、彼らの技術がますます巧妙になるにつれて、実際に起こっているケースもあります。

私たちのこの 5,000 年の文明周期においても、その干渉は続いており、おそらくさらに巧妙で、認識しにくくなっています。彼らはもはや古代の「神々」のように公然と姿を現すことはなく、主に影で活動し、権力を持つ組織や個人を操作し、科学技術の発展をますます道徳からかけ離れた方向へと導き、人々が外部の技術にますま

す依存し、内なる精神的価値を忘れるような、高度に物質化された社会を創り出しています。

今日の人工知能（AI）の発展も、もし確固たる道徳的基盤によって制御されなければ、彼らが将来、人間を支配し、取って代わるという目標を達成するために使用する道具の一つになる可能性があります。

これは静かなる闘争であり、硝煙のない、しかし非常に熾烈な戦いです。それは、人間の自由と修煉の道を守ろうとする勢力と、私たちを奴隷にし、破壊しようとする勢力との間の戦いです。そして、それは、非常に、非常に昔から行われてきたのです。

〔モハンは一息つき、その眼差しはジャック・ヴォスをまっすぐに見つめ、この問題の重要性と深刻さを強調したいかのようだ。〕

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

では、文明の周期の歴史の中で、この干渉に対抗するための多くの戦いがきっとあったのでしょうか。例えば、あなたが冒頭で触れられた、地中の人々が、すでに損傷していた月を使って、地球外生命体の艦隊と戦ったという状況のように…。

**モハン：**

（モハン氏は頷いて認め、その眼差しには過去に勇敢に立ち上がって戦った人々への敬意がかすかに浮かぶ。）

その通りです、ジャックさん。地球上の文明周期の歴史は、単に内的な要因による発展と衰退の段階だけでなく、正念を持つ人々、真の修煉者たち、そして道徳を保ち続けた文明による、邪悪な「地球外生命体」の勢力の干渉と操作に抗う、無数の粘り強い戦い、力強い抵抗によっても刻まれています。

私たちが話した、約 5,000 年前に地中の人々が（それ以前に損傷していたにもかかわらず）月を使って「地球外生命体」の侵略艦隊に対抗した戦いは、地球の長い歴史の中で繰り広げられたそのような多くの戦いの一つに過ぎません。

「モハンは、悲壮な歴史的一幕を再現するかのよう、  
荘厳な口調で語る。」

遠い昔の多くの文明周期において、邪悪な「地球外生命体」の種族が支配を確立しようとしたり、暗い陰謀を実行しようとしたりしたとき、大規模な大戦が勃発しました。一方には地球の人々、多くは特異機能を持つ修煉者、あるいは神の助けを得た戦士たちで、彼らは宇宙の法則と精神性への理解に基づいた武器やエネルギーを使用しました。もう一方には、近代的な機械技術、宇宙船、そして破壊的な兵器を持つ「地球外生命体」の勢力がいました。これらの戦いの結果は、常に一方に傾いたわけではありません。地球の人々が侵略を撃退した時もありました。しかし、彼らが大敗を喫し、文明全体の崩壊に至った時もありました。

私がかんがはつきりと「見た」代表的な古代の戦争は、約数十万年前に起こりました。その頃の地球の人々は、科学技術と精神能力の発展の両面で顕著な成果を上げていたある文明の小周期にありました。この文明は、純粋な青い光のエネルギーを使いこなす能力を持っていたため、仮に「青い光」の文明と呼ぶことにしましょう。そのエネルギーは強大な力を持ち、特別な結晶体と彼ら自

身の内なる修養から抽出されたものでした。彼らは自然と調和して生き、精巧な白い石で都市を築き、大気中を飛翔できる小さな飛行船を持っていました。

その時、遠い恒星系から来た、灰青色の鱗を持つ爬虫類のような姿をした「地球外生命体」の一種が、地球とその豊かさを発見しました。この種族は、仮に「蛇人（じゃじん）」と呼びましょう。彼らは非常に高度な機械技術を持ち、円盤形や三角形の巨大な宇宙戦艦の艦隊を所有し、大きな破壊力を持つエネルギー兵器を装備していました。彼らの目的は、地球の資源を奪い、「青い光」の人々を奴隷にすることでした。

戦いは、「蛇人」が「青い光」の人々の都市やエネルギーセンターに奇襲攻撃を仕掛けることから始まりました。当初、平和を愛する「青い光」の人々は不意を突かれ、多くの損害を被りました。しかし、彼らの修煉者と戦士たちはすぐに結集しました。彼らは大型の戦争機械で戦うのではなく、主に個人の能力と集団の力の統合に頼っていました。

私は「見た」のです、「青い光」の修煉者たちが、爛々と輝く目で、手や結晶体の法器から青い光のエネルギー流を放ち、強固なエネルギーシールドや強力な破壊力を



持つ光線を作り出し、「蛇人」の戦艦と直接対峙する姿を。彼らはまた、極めて速い速度で移動し、ほとんど姿を隠し、敵の弱点を攻撃する能力も持っていました。

戦闘は空中、地上、さらには地下でも繰り広げられました。「蛇人」は技術と数で優位に立っていましたが、「青い光」の人々の粘り強い抵抗と、柔軟で予測不可能な戦術に直面しました。時には、「青い光」の修煉者一人が、思念を集中させ、エネルギーを操ることで、敵の小さな戦艦の飛行隊全体を破壊することさえありました。

しかし、戦争は何十年にもわたり、恐ろしい破壊をもたらしました。多くの土地が荒れ果て、多くの都市が破壊されました。「青い光」の人々は、勇敢に戦いましたが、多くの犠牲を払いました。最終的に、神々が彼らに指示を与え、さらに力を授けるという間接的な助けを借りて、「青い光」の人々は「蛇人」艦隊の主要なエネルギー源、おそらくは巨大な母船か中央制御ステーションを無力化する方法を見つけ出しました。

エネルギー源が断たれると、「蛇人」艦隊は混乱に陥りました。大部分が破壊され、一部は地球から逃走しなければなりませんでした。「青い光」の人々は勝利しましたが、非常に大きな代償を払ってのことでした。彼らの

文明は深刻な打撃を受け、二度と以前の輝きを取り戻すことはできませんでした。その後しばらくして、環境の変動と人口の減少により、彼らの文明周期も徐々に終わりを迎えました。

この戦争は、歴史上無数にあった同様の対立の典型的な一例に過ぎません。地球の人々が、神や真の修煉者の助けを得て、侵略を撃退し、自らの故郷を守った時もありました。しかし、彼らが大敗を喫し、文明全体の崩壊に至ったり、長期間奴隷にされたりした時もありました。神々の戦い、英雄と怪物の戦い、あるいは星々の間の戦争といった伝説は、時として、そのような実在の出来事が歪められ、神話化された記憶なのです。

すべての戦いが公然と、大々的に行われたわけではありません。無数の静かなる対立、エネルギーや意識を巡る戦いが、他の空間で、あるいは人間の心の中でさえ繰り広げられてきました。真の修煉者、正念を固く守る人々は、道徳を守り、邪悪な勢力の誘惑と操作から人間を守るために、絶えず戦っています。彼らの犠牲は歴史に記録されることは少ないですが、非常に重要なのです。

最も危機的な瞬間、悪が勝利しそうに見えるときでさえ、真の神々は完全に傍観していたわけではありません。彼

らは間接的に介入し、正義を持つ人々を助けたり、あるいは直接手を下して邪悪な勢力を罰し、均衡を回復したりすることがあります。私たちが話してきた大洪水や大浄化も、時として、悪魔や邪悪な「地球外生命体」の勢力の横行による暗黒時代を終わらせるための、神の介入の結果なのです。

正と邪、生命と真の修煉の道を守ろうとする者たちと、それを破壊し奴隷にしようとする勢力との間の戦いは、文明の歴史を貫く一つのテーマです。それは過去に行われただけでなく、私たちの時代にも、おそらくさらに巧妙で複雑な形で、現在進行形で続いているのです。

そして、地中の人々は、彼らが黄金時代から保持してきたものと、月の助けを借りて、この長期にわたる戦いにおいて常に重要な力となってきました。たとえ彼らが静かに行動し、無数の困難に直面しなければならなかったとしてもです。彼らの存在、そして彼らの努力こそが、希望の光であり、正義の不屈さの証なのです。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

モハンさん、古代の戦争や水面下での操作についてのお話は、実に考えさせられます。現代の状況において、私が以前読んだいくつかの資料では、一部の「地球外生命体」の種族が、私たちの人類社会にさえ紛れ込み、秘密裏に活動しているという仮説が提唱されていました。同時に、バミューダ・トライアングル地帯での船舶や航空機の失踪事件のような謎も、しばしば彼ら、あるいは私たちの理解をはるかに超える技術に関連している可能性があると言われています。あなたの「見た」ところでは、これらのことは、ある程度真実なののでしょうか？

**モハン：**

（ジャック・ヴォスが現代における「地球外生命体」の干渉とその深遠な目的について質問すると、モハン氏の眼差しはより厳しくなる。彼は一瞬黙り込み、衝撃的かもしれない真実のために、最も慎重な言葉を選んでいるかのようだ。）

ジャックさん、これは非常に重要な質問です。なぜなら、それは私たちの周りで今起きていること、この文明の未来、そして各個人の選択に直接関わっているからです。

彼らの干渉の形態と目的の詳細に入る前に、私が修煉の過程で直接「見た」こと、多くの人が信じがたいかもしれないが、私たちが直面している複雑な現実の一部である一つのことを、あなたと分かち合いたいと思います。

申し上げますと、私は、悪意を持つ種族に属する「地球外生命体」の個体が、かなりの数、私たちの人類社会に紛れ込んでいるのを「見ました」。彼らは容易に発見される巨大な宇宙船で来たのではなく、極めて精巧な偽装技術を用いたり、あるいは元神（魂）を失った人間の肉体を乗っ取ったり、特別なバイオテクノロジーで作られた肉体を使ったりしています。彼らは外見上、普通の人々と何ら変わりなく、私たちの言語を話し、社会で特定の地位や役割を担うことさえできます。

私は彼らが多くの分野に存在しているのを「見ました」が、特に、人類の発展の方向性に大きな影響を与えうる場所に集中しています。彼らは、画期的でありながら潜在的な危険を秘めたハイテクプロジェクトを率いる科学者、国際機関の政策立案者、金融界やメディアに影響力を持つ人物、さらには多くの先進国の諜報機関や軍事機関の一部にさえいる可能性があります。普通の人々が、その限られた感覚で彼らの真の性質を見抜くことは非常

に困難です。なぜなら、彼らの偽装はあまりにも完璧で、彼らの行動は非常に巧妙で、隙を見せないからです。

この潜入の目的は、彼らが直接操作し、政策決定を方向付け、彼らの長期的な陰謀に有利なアジェンダを推進し、同時に、彼らの計画を妨げる可能性のある個人や組織を監視し、情報を収集できるようにするためです。彼らが私たちの中に存在することで、この静かなる戦いはさらに複雑で、予測困難なものになっています。

（モハンは少し間を置き、続けた。）

バミューダ・トライアングルと謎の失踪事件についてですが、ジャックさん、それもまた、完全に作り話であったり、単に人的ミスや自然条件のせいであったりするわけではありません。その地域、そして地球上の他のいくつかの同様の地域（例えば、日本の「魔の海」など）は、私の「見た」ところでは、非常に特別な特徴を持っています。

第一に、地球外勢力の基地が置かれている場所であること。バミューダ・トライアングルの海底、そしておそらくは隠された並行空間にも、実際に一部の「地球外生命体」の種族の基地や前哨基地が存在します。これらの基

地は、その存在を隠蔽するための先進技術を用いて、非常に昔に建設された可能性があります。

第二に、そこには移動する時空の扉（ワームホール／ポータル）があること。さらに重要なことに、この地域は、地球上で次元間の「障壁」が薄くなる、あるいは自然な「弱点」がある場所の一つです。高度な技術を持つ「地球外生命体」の勢力は、これらの点を利用して、「時空の扉」——地球と他の惑星、あるいは他の次元との間の近道——を創り出したり、維持したりしてきました。これらの扉は常に安定しているわけではなく、それらが「開く」か「閉じる」かは、多くの複雑なエネルギー要素に依存する可能性があります。

失踪の原因について：船や飛行機が、これらの「時空の扉」の一つが活動している、あるいは異常に開いている地域に偶然入ってしまった場合、それらは吸い込まれ、別の空間、別の時間へと転移させられたり、あるいは強力なエネルギーの擾乱によって破壊されたりする可能性があります。時には、それは、それらの基地を運営している「地球外生命体」の勢力による意図的な行動である可能性もあります。それは、捕獲、実験、あるいは人間の好奇心を妨げるためかもしれません。

地球上の政府や秘密組織は、これらの基地や扉の存在を知っているかもしれませんが、彼らはしばしば、パニックを避けるため、あるいは他の戦略的な理由から、情報を隠蔽しています。

[モハンは、各点を強調するかのように、一息つく。]

要するに、地球外生命体の干渉は巧妙かつ神秘的で、大多数の人間は気づいていないのです…。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

では、地球外生命体がそのようなことをすべて行う、その本当の目的は何なのでしょう？

**モハン：**（彼は頷き、ベランダ越しに遠くを見つめ、それからゆっくりと話し始める…）

彼らの本当の目的は何なのか…？なぜ彼らはこれほど多くの労力を費やして、これほど巧妙かつ長期にわたって地球に干渉するのか…？



私の「見た」ところでは、これらの邪悪な「地球外生命体」の勢力、特に真の神によって創造されたのではない種族の最も深遠な目的は、単に資源を奪ったり、人類を奴隷にしたりすることではありません。彼らの野望はそれよりもはるかに大きく、無知で幻想に満ちた野望です。それこそが、「神になる」ことへの渴望です。

彼らは、自らの種族の生命の限界を超え、さらに長く存在することを渴望しています。彼らは、神々のような広大な神通力を手に入れ、不公平だと感じる法則に縛られることなく、宇宙で自由自在に振る舞うことを熱望しています。

その道を探求する過程で、彼らは非常に重要なことを発見しました。地球上の人間は、科学技術の面での知恵は彼らに及ばないかもしれないが、神の境地に達することができる修煉の能力という、非凡な潜在能力を所有しているということです。これは、彼ら自身が、その生命構造と本質をもってしては、行うことができないことでした。彼らには真の修煉の道はなく、その本質は、宇宙の、特に創世主によって創造されつつある新しい宇宙の、崇高な法理には適合しません。

そして、狂気じみた考えが彼らの心に生まれました。人間のような修煉能力を手に入れるために、あらゆる手段を尽くすという考えです。

そのため、彼らは地球に干渉するためにあらゆる手段を尽くします。地球は、彼らが非常に特別な意味を感じる場所、神聖さの種を内に秘めた人間がいる場所、たとえ幻想であっても、「レベルアップ」し、渴望するものを手に入れることができるという大きな希望を与えてくれる場所なのです。

人間の肉体を乗っ取ろうとしたり、遺伝子を交配したり、あるいは人間が真の修煉の道から外れて彼らが創り出した邪道に進むように思想を操作したりといった彼らの行動は、すべてその目標を中心に展開されています。彼らは人間の「神になる」道を「盗み見」し、「強奪」したいのです。

それは非常に傲慢で無知な野望です。なぜなら、彼らは神の偉大さと全能性、そして宇宙の不変の法理を理解していないからです。彼らは、真の修煉の道が、心性を修養し、宇宙の「真・善・忍」の特性に同化することを要求するものであり、強奪や欺瞞の策略ではないことを理解していません。彼らは、まさにその陰謀と邪悪な行動

によって、自らの墓穴を掘っているのです。なぜなら、彼らが何をしようとも神の目を逃れることはできず、神は永遠に、彼らが正法に従って修煉する機会を与えることはないからです。

現在の戦いは、ジャックさん、単なる技術や資源を巡る戦いではありません。それは、信仰、道徳、そして正しい道と邪な道、神の采配に従うことと天意に逆らうこととの間の選択を巡る戦いです。そして、私たちの一挙手一投足、一つ一つの思いが、この戦いの最終結果に貢献しているのです。

\* \* \*

### **ジャック・ヴォス：**

あなたの言わんとするところを、私が正しく理解しているか、このように要約してみてもよろしいでしょうか。

地球外生命体は、おそらく地球の遠い昔の多くの文明期から来たもので、人間が修煉によってレベルを高め、神あるいはより高次の生命になれることを発見し、そこで彼らも人間を真似したいと思った。しかし、彼らは神か

ら修煉を許されていないため、人間を利用して修煉する方法を探し、遺伝子交配、クローン、弁証法的唯物論の科学による人類の魅了、そして最近では人工知能（AI）や脳へのチップ埋め込みといった高度な技術など、様々な方法を試みている…。そして、これら一連の行動の後、適切な時期に、何らかの方法で人間の肉体を乗っ取り、高次元への修煉を図ろうとしている…。しかし、それらすべての行動は神の目を逃れることはできず、彼らにとっては無駄骨に終わるだけだと…？！

そして、残念なことに、人間自身がそのことに気づいていない…？！

それで、現在の状況下で、神は地球外生命体が意のままに横行し続けるのを放置されるのでしょうか？

**モハン：**

（モハン氏はジャック・ヴォスの要約に注意深く耳を傾け、それから静かに頷き、その眼差しは彼の深い理解への同意を示している。）

ジャックさん、あなたは私が分かち合いたかった要点を、非常に正確かつ完全に要約されました。まさしくその通りです。

私たちが話している「地球外生命体」、特に悪意を持つ種族の多くは、非常に遠い昔の文明、あるいは前の周期の「古い主」に由来する可能性があります。彼らは非常に重要な真実を認識しました。人間は、物質技術の面では彼らより劣るかもしれないが、生命の次元を高め、より高次の生命、さらには神になることができる修煉の能力という、非凡な潜在能力を所有しているということです。これは、彼ら自身が、その本質と生命構造をもってしては、正しい道によってはできないことなのです。

その「神になる」という渴望のために、そして神が永遠に彼らに正法に従って修煉する機会を与えないがために、彼らは人間を利用し、「近道をする」ためにあらゆる手段を講じてきました。遺伝子交配、クローン、唯物論と道徳から切り離された科学技術による人類の魅了、あるいは最近では、支配と代替を目的とした人工知能（AI）や、イーロン・マスクが行っているような脳へのチップ埋め込み（実際には、彼は悪魔に思想をコントロールされています）といった高度な技術…そのすべてが、最終

的には、ある時点で人間の肉体を乗っ取るか、あるいは人間に似た「殻」を作り出し、それを通じて修煉の道を「盗み」、高次元へ昇る機縁を「盗む」ことを目的としています。

しかし、あなたがおっしゃったように、彼らのそれらすべての陰謀と行動は、どれほど巧妙で、長く続こうとも、神々の目を逃れることはできません。それは単なる無駄な努力です。なぜなら、彼らは宇宙の不変の法理に逆らい、天意に逆らっているからです。彼らは自ら、淘汰と破壊を招いているのです。

そして、最も残念なことは、実に、この世の非常に多くの人々自身が、その真実に気づいていないことです。彼らは物質、技術、「地球外生命体」の邪悪な勢力が仕掛けた誘惑の渦に巻き込まれ、徐々に善良な本性を失い、貴重な修煉の機縁を失っているのです。

〔ジャック・ヴォスの最後の質問に答えるとき、モハン氏の声はより真剣になる。〕

では、現在の状況下で、果たして神は「地球外生命体」が意のままに横行し続けるのを放置されるのでしょうか？

答えは「いいえ」です、ジャックさん。

この宇宙は今、非常に特別な段階、「正法」の段階にあります——つまり、創世主が全乾坤を立て直し、宇宙を清め、墮落し、変異し、新しい宇宙の基準に合わなくなったものを取り除いておられるのです。

この大改革の中で、無数の罪を犯し、神の采配を破壊し、衆生の救済を妨げた邪悪な「地球外生命体」の勢力は、断じて容赦されません。真の神々は創世主の御心を実行し、宇宙のあらゆる次元でこれらの勢力に対する全面的な粛清を行っています。

私たちは、それらの「粛清」を肉眼で直接見ることはできないかもしれませんが、その現れは、社会の変動、天災、疫病、あるいは科学がまだ説明できない宇宙の奇妙な現象など、様々な形で私たちの世界に反映されている可能性があります。

しかし、粛清は必ずしもすべての場所で即座に、一斉に行われるわけではありません。私たちが完全には理解しがたい、複雑な理由、精巧な采配があるのです。

一部の邪悪な勢力は、まだ一定期間存在することを許されているかもしれません。なぜなら、彼らを完全に滅ぼす時期がまだ来ていないからです。これは、彼らの邪悪な本性をすべて暴露するため、人々に気づき、選択する機会を与えるため、あるいは、この正法における他のいくつかの采配を完了させるためかもしれません。

悪の存在、誘惑の存在もまた、人々の信仰心、心性を試すための環境なのです。善と悪の対立の中でのみ、人間は真に自らの選択を示し、修煉し、向上することができるのです。

神仏は慈悲深く、常に衆生に機会を与えておられます。騙され、惑わされた人々でさえ、もし時を逃さず目覚め、真実を認識し、心を改めて善に向かうことができれば、まだ希望はあります。

ですから、粛清が進行中であるにもかかわらず、私たちはまだ邪悪な勢力が横行する様を目にします。それはプロセスの一部であり、すべてが完全に清められる前の最終段階なのです。そして、この段階において、各個人、各生命の選択が、非常に重要になるのです。

\* \* \*



**ジャック・ヴォス：**

モハンさん、正直に申しますと、今、私は混乱しています。今日（そして昨日も）あなたが分かち合ってくださった驚くべき情報で、頭が「食べ過ぎ」てしまったようです…。おそらく、心を静めて、さらに感じ取る時間が必要なんでしょう…。

**モハン：**

（モハン氏は穏やかに微笑み、その眼差しにはジャック・ヴォスの状態への深い理解と共感が宿っている。彼は静かに頷き、その声は穏やかで落ち着いているが、敬意に満ちている。）

ジャックさん、あなたの今のお気持ちは、痛いほどよく分かります。この二日間、私たちが共に分かち合い、探求してきた事柄は、実に膨大な情報であり、地球の歴史、宇宙の、そして私たちの通常の認識を越えた、深遠で複雑な側面に触れるものでした。

情報に「食べ過ぎた」と感じたり、少し混乱したりするのは、私たちの心が、これまで知っていたこととはあま

りにも異なる概念や絵画を受け入れ、消化しようとするときに起こる、非常に自然な反応です。それは、小さな湖を眺めることに慣れていた私たちが、突然、広大な大洋を目の当たりにするようなものです。

〔モハンは少し間を置き、励ますような眼差しでジャックを見る。〕

重要なのは、すべてを即座に「消化」しようとする 것도、理性を使って一つ一つの詳細を機械的に分析しようとする 것도ありません。私が最初にお話ししたように、これらの分かち合いの目的は、ある「真理」を押し付けることではなく、ただ一つの種を蒔き、一つの熟考を促し、世界を異なる角度から見る可能性を呼び覚ますことなのです。

あなたがおっしゃったことは全くその通りです。心を静め、さらに感じ取る時間が必要だというのは、非常に重要なことです。これらの情報が、あなたの心の中で自然に落ち着くのを待ってください。時間が経つにつれて、いくつかのことはより明確になるかもしれませんし、いくつかのことは、私でさえ予期しなかった新しい考えや繋がりを、あなたに引き起こすかもしれません。一人ひ

とりが、それぞれの根基と縁によって、異なる感じ方や「悟り」を得るのです。

すぐに理解できない、あるいは受け入れがたいことがあっても、あまり心配しないでください。これを、誠実な心で分かち合われた一つの物語、一つの異なる視点として捉えてください。そして、もしそれがあなたの世界観を少しでも広げる助けになるのであれば、それだけでも非常に価値のあることです。

今日はここで一旦終わりにしましょう。あなたが自分自身の空間と時間を持てるように。そして後日、ある程度「消化」され、新しい質問が浮かんだり、他の側面を探求したくなったりしたときには、私はいつでも喜んで、自分の知っていることを分かち合い続けます。

〔モハンは微笑む。安らぎと信頼をもたらす微笑みだ。〕

最も重要なことは、ジャックさん、心を清らかに保ち、心を開いておくことです。真の智慧は、時として知識の蓄積からではなく、静寂と、内なる真実を感じ取る能力から生まれるのです。

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

はい、モハンさん、誠実な分かち合いをありがとうございました！

おそらく今は、考え込もうとしたり、またまとまりのない質問であなたを困らせたりするより、お茶をいただきながら静かにしている方が良いでしょうね…。

**モハン：**

（穏やかに微笑み、モハン氏は静かに頷き、ジャック・ヴォスの決断に完全に同意する様子を見せる。彼はジャックの茶碗に熱いお茶を少し注ぎ足し、それから自分にも注ぐ。）

ジャックさん、それはとても良い考えです。時として、一杯のお茶を前にした静寂が、緊張した思考の努力よりも多くの開示をもたらすことがあります。その静寂の中で、私たちが聞き、見たことが、自ずと整理され、私たちの認識の中で自らの位置を見出すことができるのです。

無理に考えようとする必要も、「まとまりのない」質問について心配する必要もありません。心を休ませ、自由に流れさせてください。もしかしたら、その安らぎの中で、答えや新しい理解が自らあなたのもとへやって来るかもしれません。

〔モハンは茶を一口すすり、窓の外の静寂な空間に目をやり、それから敬意のこもった眼差しで再びジャックを見る。〕

私は、私たちの対話を非常に大切に思っていますよ、ジャックさん。あなたの開放的な姿勢と真理を求める精神が、これらの分かち合いが実現するための、非常に良い空間を作り出してくれました。

私たちは急ぐ必要はありません。宇宙と自分自身の謎を探究する道は、忍耐と、そして少しの縁を必要とする長い旅なのです。

どうぞ、このお茶を味わってください。そして、いつでも準備ができたとき、あるいは何か新しいことを話したくなったとき、私の家の扉は常に開いています。

（モハンは黙り込み、ジャック・ヴォスと共に茶の香りと夜の静寂を味わう。部屋の空気は温かく、平穏になり、まるで過ぎ去った物語が一時的に静まり、各人がより深く熟考するための場を譲ったかのようだ。）

\* \* \*

**ジャック・ヴォス：**

はい、モハンさん、今日の分かち合いはここで一旦閉じましょう…。

もし可能でしたら、三回目の面会をお願いしたいのですが、この二日間であなたが分かち合ってくださった内容について、さらに詳しく質問するためではなく、世俗の中の一人の修行者としての生活について、心を落ち着けてお話を伺うためです…。

**モハン：**

（モハン氏は茶碗を置き、その眼差しにはジャック・ヴォスの申し出に対する特別な温かさと敬意が宿る。）

ジャックさん、あなたの信頼と善意に、心から感謝します。過去や宇宙の壮大な物語にだけ焦点を当てるのではなく、世俗の中の一人の修行者の生活について耳を傾けたいと思ってくださることは、実に、深く繊細な関心を示しています。

〔彼は、誠実な笑みを浮かべる。〕

私にとって、あなたと分かち合った「見識」は、いかに遠大で壮大に見えようとも、日々の修煉の道から切り離されたものではなく、この質素な生活の中での経験、熟考から切り離されたものではありません。なぜなら、修煉とは、何か高尚で、遠いものではなく、まさしく、日々の些細な出来事の中で、人間関係や衝突の中で、絶えず自分を正し、心性を高め続けることだからです。

もしあなたが本当にそのお気持ちでしたら、もう一日、それらのことについて共に分かち合う時間を設けることを、私は非常に喜ばしく思います。それは「驚天動地」の物語ではないかもしれませんが、おそらくもっと身近なこと、現代社会の多くの誘惑と挑戦の中で、いかにして心を平穏に保つかについての思索、修養の意味についての話になるでしょう。

[モハンは軽く頷く。]

では、今日の分かち合いはここで一旦閉じましょう。そして、私たちの次回の出会いを、人生と精神の道の異なる側面について共に熟考することを楽しみにしています。

本当に静かで、安らかな夜をお過ごしください。

（モハン氏は立ち上がり、まるで最も深い秘密を共に分かち合った親友を見送るかのように、敬意と心からの親愛の情を込めてジャック・ヴォスを見送る。）

**ジャック・ヴォス：**

はい、ありがとうございます。また明日の夜、お会いしましょう！

\* \* \*



# 結びの言葉

カトマンズでのモハン氏との対話は幕を閉じましたが、その余韻は今なお私の心に響き続けています。彼の語りは、私がこれまで知っていた、読んだ、あるいは想像し得たすべてをはるかに超える旅へと私を誘いました。驚きのあまり言葉を失うこともあれば、長い間静かに考え込まなければならないこともあり、そして、まるで意識の非常に深いどこかに触れたかのようなこともありました。

私は、モハン氏が分かち合ってくださった情報の正誤や信憑性の度合いについて、いかなる判断も下すことを控えさせていただきます。主流科学には異なる解釈があるかもしれませんし、様々な信仰や哲学の学派もそれぞれ独自の見解を持つでしょう。しかし、私は信じます。これらの出会い、これらの語りの最大の価値は、それらが――驚きに満ち、通常の理解を越えた視点をもって――認識に新たな扉を開き、この惑星の歴史、この宇宙について、そしておそらく最も重要なこととして、私

たち自身について、より遠く、より深く見るようにと私  
たちをいざなう点にあるのだと。

モハン氏の話聞きながら、彼が描き出した広大な宇宙  
の絵図における各個人の役割と責任について、私は考え  
ずにはいられませんでした。もし私たちが本当に、彼が  
言うように歴史の特別な瞬間、一つの転換期に生きている  
のであれば、おそらく最も意味のあることは、外部の  
偉大な発見にあるのではなく、各個人の内なる核心的な  
価値観を自問し、守り抜く努力にあるのかもしれません。  
それは、自分自身と他者に対する誠実さ、憐れみと寛容  
の心、そして人生の絶え間ない変動に対する不動の心と  
冷静さです。もしかしたら、まさしくそれらの質素な品  
性こそが、この複雑で不確かな世界で私たちが進むべき  
方向を指し示してくれる、貴重な羅針盤なのではないで  
しょうか。

では、跡形もなく消え去った文明、非凡な能力を持って  
私たちの前に存在した実体は、本当に存在するものでし  
ょうか。私たちが普段「神話」や「伝説」と呼ぶものは、  
単に昔の人の豊かな想像力の産物なののでしょうか、それ  
とも、時間によって覆い隠されてしまった、より偉大な  
真実の、曖昧な記憶、残された断片なののでしょうか。そ

しておそらく、私たち一人ひとりにとって最も重要な問いはこれです。この広大で未知数に満ちた絵図の中で、自分自身が選ぶ道はどこにあり、私たちはどのような足跡を残していくのか。

モハン氏の静かな小さな家を離れ、カトマンズの日常の営みに戻ったとき、私はふと、紺碧の空を見上げました。月はまだそこにあり、皓々と、沈黙し、神秘に満ちていました。それは、幾多の盛衰の歴史の証人として、私たちの前にあったもの、それを創造した手について、そしておそらくは、今なお高いところから見守っている眼差しについて、静かに思い起こさせるものでした。そして一瞬、私は自問しました。地球上の小さな生命——自らの未来だけでなく、来たるべき時代全体をも形作る可能性のある、重大な選択の岐路に立っている人々——に向けられた、慈愛に満ちた微笑みがあるのだろうか、と。

記者 **ジャック・ヴォス** (Jack Voss)

\* \* \*



# 付録

---

## 科学から見た地球と宇宙の謎－未解決の問い

本付録は、モハン氏が共有した事柄を証明または反証することを目的とするものではなく、読者が我々の世界の

謎について新たな視点を持ち、自ら思索するための、科学的なデータ、物語、そして様々な分野からの考察を追加で提供するものである。

\* \* \*

# パート A： 月に関するいくつか の科学的データ

---

地球の身近な伴侶である月は、現代科学が絶えず探求してもなお、無数の謎を秘めている。以下は、多くの問いと思索を呼び起こす、注目すべきいくつかの科学的データである。

## ● 純粋な自然衛星としては「大きすぎる」サイズ：

- 月の直径 (3,467 km) は、地球の直径 (12,756 km) の約 27%に相当する。
- 太陽系の他の惑星との比較：火星最大の衛星フォボスの直径はわずか 23 km (火星の 0.34%) である。木星最大の衛星ガニメデの直径は 5,000 km (木星の 3.5%)。土星最大の衛星タイタンの直径は 4,500 km (土星の 3.75%) である。
- 太陽系には、母惑星に対するサイズ比率が 5%を超える自然衛星は存在しない（冥王星に対するカロンを除くが、両者は二重準惑星系と見なされている）。月と地球の 27%という比率は、極めて異常である。
- **提起される問い：** なぜ月は、太陽系の他のどの自然衛星とも異なる特徴である、母惑星に対してこれほどまでに巨大なサイズを持つのか？

## ● 異常なまでに「浅い」クレーター：



- 科学的計算によれば、高速で衝突する大きな隕石は、その直径の 4~5 倍の深さのクレーターを形成するはずである。このことは、地球上のクレーターで検証されている。
- しかし、月のクレーターは奇妙なほど浅い。例えば、直径 186 マイル（約 299 km）のガガーリン・クレーターは、本来なら少なくとも深さ 700 マイル（約 1126 km）になるはずだが、実際には深さ約 4 マイル（約 6.4 km）しかない。これは直径の約 2%の深さに過ぎない（計算上 4 マイルの深さと直径を比較した場合は 12%、直径の 4~5 倍の比率に従えばさらにずっと深くなるはずである）。
- 多くの科学者は、月の表面下に極めて硬く厚い地殻が存在し、隕石のより深い貫通を妨げているのでない限り、これを現在の理論で説明することは不可能だと考えている。
- **提起される問い：** なぜ月のクレーターはこれほど浅いのか？ 表面の塵の層のすぐ下に、人工的な「鎧」あるいは超耐久性の構造物が存在するのだろうか？

## ● 「鐘のような振動」と内部空洞の可能性：

- アポロ計画のミッションにおいて、宇宙船のモジュールや隕石が表面に衝突した際、月は異常に長く（時には 1 時間から 4 時間）振動し、「大きな鐘のように鳴り響いた」と描写された。
- NASA の科学者らは、このことは月が内部が空洞であるか、少なくとも均質な固い岩石の塊ではなく、非常に特異な核構造を持つことを示唆すると認めている。もし中身が詰まっていれば、振動はずっと速く収まるはずだからである。
- **提起される問い：** この空洞または特殊な構造は何を意味するのか？ それは自然な形成プロセスの結果なのか、それとも何か別のものを秘めているのか？

## ● 皆既日食を生み出す「完璧な」サイズと距離の比率：

- 月の直径は太陽より約 395 倍小さく、同時に地球からは太陽より約 395 倍近くにある。

- この驚くべき「偶然の一致」により、地球から見た両者の見かけの大きさはほぼ同じになり、皆既日食が正確に起こる条件が整っている。
- **提起される問い：** このような完璧な比率の「偶然」が宇宙で起こる確率はどれくらいか？ この奇妙な現象の背後に、何らかの采配があるのだろうか？

## ● 「異常な」軌道と安定性：

- 太陽系のすべての自然衛星（地球や他の惑星を含む）は、母惑星の赤道面を周回している。しかし、月は地球の黄道面（地球が太陽の周りを公転する軌道面）を周回しており、これは非常に特異である。
- 月の地球周回軌道もまた、最も円に近い軌道の一つであり、地球上の多くの要素に安定性をもたらしている。
- **提起される問い：** なぜ月の軌道は、これほど「異常」でありながら、地球上の生命にとって極めて重要な特徴を持つのか？

## ● 永遠の「裏側」と未発見の謎：

- 潮汐ロック現象により、月は常に同じ面を地球に向けている。その「裏側（far side）」は、宇宙船が探査するまで常に謎であった。
- 裏側の表面は、表側と比較して地形がはるかに陰しく、「海」（maria）も少ない。
- **提起される問い：** 月の両面のこの明らかな違いは何を意味するのか？「裏側」には、私たちがまだ知らない何かがあるのだろうか？

## ● 「奇妙な」岩石成分と純金属の存在：

- 月から持ち帰られた岩石サンプルには、チタン、クロム、イットリウムといった、地球上では見つけにくい希少元素が異常に高い含有量で含まれている。これらの金属は非常に硬く、耐熱性、耐食性に優れ、しばしば航空宇宙産業で利用される。

- さらに驚くべきことに、科学者らはサンプルの中から、酸化していない（錆びていない）純粋な鉄と銅の粒子を発見した。これは自然条件下ではほぼ起こり得ず、複雑な精錬プロセスを必要とするものである。
- 月の一部の岩石の年齢は、地球よりも古いと特定されている（例えば、地球の推定年齢が 45～46 億年であるのに対し、53 億年前の岩石が存在する）。
- **提起される問い：** これらの純金属や高含有量の希少元素の起源は何か？ それらは、どこかの文明による人工的な精錬プロセスの産物なのだろうか？ なぜ月の岩石には、その母惑星よりも古いものが存在するのか？

## ● 弱い磁場と古代磁場の「幻影」：

- 現在の月は非常に弱い磁場しか持たない。しかし、月の岩石サンプルは、それらが過去にはるかに強力な磁場の中で磁化されたことを示している。

- このことは、月がかつては磁場を生成する活発な熔融鉄の核を持っていたか、あるいは強力な磁場環境の中で創造された可能性を示唆している。
- **提起される問い：** 月の古代磁場に何が起こったのか？ その弱体化は、過去の何らかの出来事と関連しているのだろうか？

## ● 「マスコン」 – 謎の高密度領域：

- 月の広大な「海」（暗く、より平坦な領域）の下には、「マスコン」（質量集中）と呼ばれる、物質密度が非常に高い領域が存在する。
- その存在は重力場に異常を引き起こし、その正確な起源は未だ謎である。埋もれた巨大な隕石であるという仮説もあるが、他の意見も存在する。
- **提起される問い：** これらの「マスコン」は、実際には何なのか？ それらは、埋もれた古代の人工構造物である可能性はないだろうか？

上記の科学的データは、ほんの一部に過ぎないが、月が単なる無機質な岩塊ではないことを示している。それは奇妙な特徴、説明困難な「異常」を含んでおり、私たちに問いを投げかけさせる。「私たちの現在の月に関する理解は、本当に十分なのだろうか？」と。そして、科学が測定できる範囲を超えた、発見されるのを待っている他の真実が存在するのだろうか？

\* \* \*

# パート B：地球と人類史のその他の謎

---

## 1) 生命の起源と「カンブリア爆発」

地球上の生命の起源に関する問いは、最大級の謎の一つであり、現代科学に対する最も深遠な挑戦でもある。多くの研究努力と無数の仮説が提唱されてきたにもかかわらず



らず、最終的で、統一され、広く受け入れられる説明は、未だ手の届かないところにある。

➤ **生命の起源に関する主要な仮説：**

- ☆ **自然発生説（Abiogenesis）：** この仮説は、生命が初期の地球の条件下で起こった一連の自然な化学プロセスを通じて、無機物から発生したと主張する。1952 年の有名なミラー・ユリーの実験は、アミノ酸（タンパク質の基本成分）が、初期地球を模倣した条件下で単純な無機化合物から生成されうることを証明した。しかし、単一のアミノ酸から、自己複製と代謝能力を持つ生きた細胞に至るまでは、科学がまだ再現も完全な説明もできていない、無数の複雑な中間段階を伴う巨大な飛躍である。「RNA ワールド」仮説（生命の初期段階では DNA ではなく RNA が主要な遺伝物質および触媒であったとする）や、深海の熱水噴出孔付近での生命形成といった仮説も提唱されているが、各仮説には長所と未解決の問題がある。

☆ **パンスペルミア説（宇宙からの生命）**：この仮説は、生命の種子（微生物や複雑な有機分子）が、隕石、彗星、あるいは宇宙塵を通じて、宇宙空間から地球に到達した可能性を提唱する。いくつかの隕石からアミノ酸や他の有機化合物が発見された証拠もある。パンスペルミア説は、惑星が冷えた後の地球上での生命の比較的早期の出現を説明できるが、それは実質的に生命の起源の問題を宇宙のどこか別の場所へと「移動」させるだけであり、その場所で最初の生命がどのように形成されたかを説明するものではない。

➤ **「カンブリア爆発」－謎に満ちた生物多様性の爆発的増加：**

単純な生命が最初に現れた後、地球の生命史は、カンブリア紀の始まりを告げる約 5 億 4100 万年前に起こった、「カンブリア爆発」として知られるもう一つの驚くべき出来事を目撃する。

☆ **特徴**：これは、今日私たちが知るほとんどの主要な動物門（例えば、節足動物、軟体動物、初

期の脊索動物など）が、化石記録に突如として一斉に出現したように見える時期である。身体構造（ボディプラン）の多様性が、地質学的には比較的短い「瞬間」、おそらく数千万年しか続かなかった期間に、突如として爆発的に増加した。

☆ **伝統的な進化論への挑戦：** 驚くべきことに、それ以前の先カンブリア時代の化石記録には、カンブリア紀の多様性へと繋がる中間的な移行形態、つまり「失われた環」の明確な証拠が欠けている。多くの全く新しく複雑な身体構造図が、まるで「無から」出現したかのように見えることは、時間とともに小さな突然変異が蓄積することに基づいた、ゆっくりとした漸進的な進化観（漸進主義）に大きな挑戦を突きつけている。

☆ **説明の仮説：** カンブリア爆発を説明しようとする多くの要因が提唱されてきた。これには、大気中および海洋中の酸素濃度の増加、発生を制御する遺伝子（身体構造の形成を担うホメオティック遺伝子など）の進化、全球凍結（「スノーボールアース」）の終焉、海洋化学の変化、

あるいは新たな生態学的関係（捕食者の出現など）の出現が含まれる。しかし、単一の仮説、あるいはそれらの組み合わせでさえ、カンブリア爆発で出現した身体構造図の突発性、爆発的な多様性、そして前例のない新規性を完全に説明することはできない。

要するに、生命の起源とカンブリア爆発の出来事は、現代科学の地球生命史という書物において、依然として未解決で挑戦に満ちた章である。それらは生命の本質と、その発展を支配する法則について、深い問いを投げかけている。

- **提起される問い：** 生命は本当に、単なる物理的・化学的条件から、地球上で完全に偶然に「芽生えた」のだろうか、それとも意図的な「種まき」や外部からの介入があったのだろうか？ 複雑な生命体が突如として多数出現した「カンブリア爆発」は、特別な「創造の出来事」の証拠なのか、それとも、モハン氏が明かしたように、この惑星の「生命のプログラ

ム」における、方向性を持った大きな変化の証拠なのか？ 現代科学がまだ触れることのできない、生命の出現と発展を制御している何らかの法則や力が存在するのだろうか？

## 2) 「異常な」古代文明と「場違いな」工芸品（オーパーツ）

私たちが教科書を通じて通常知る、初期の社会から現代文明へと直線的に発展してきたかのように見える人類史の絵図の傍らには、私たちの常識に挑戦する無数の痕跡、建造物、そして古代の遺物が存在する。それらは、正史が認めるよりもはるかに複雑で輝かしい過去であった可能性を示唆している。

### ➤ 偉大な古代建築物 – 技術と知識の奇跡：

世界中、乾燥した砂漠からそびえ立つ山の頂まで、古代の建築物は過ぎ去った時代の静かな証人として

そびえ立ち、科学者や歴史家に難問を突きつけている。

☆ **ギザのピラミッド（エジプト）**：数百万個の数トンの石ブロックが驚くべき精度で組み合わされたその巨大な規模だけでなく、大ピラミッドは数学（例：底辺の周長と高さの比がほぼ  $2\pi$  に等しい）、天文学（地理的な方角や特定の星座とのほぼ完璧な整列）、そして今日に至るまでその実施方法について多くの議論がある建設技術に関する深い理解を示している。

☆ **プマプンク（ボリビア）**：ティワナクの近くに位置するプマプンクは、現代の機械加工に匹敵する精度で切り出された巨大な安山岩と砂岩のブロックで有名であり、直線的な溝、完璧な直角、そして複雑なドリル穴が形成されている。数十トン、時には数百トンにもなるこれらの石ブロックがどのように運ばれ、加工されたのかは、依然として大きな謎である。

☆ **ストーンヘンジ（イギリス）**：これらの巨石の環状列石は、印象的な建築物であるだけでなく、

古代の天文台でもあり、太陽、月、そして天文周期の動きに関する精巧な理解を示している。

- ☆ **ギョベクリ・テペ（トルコ）**：推定年代が 1 万 1000～1 万 2000 年（伝統的な見解では農耕や土器の出現よりも前に建設されたことを意味する）に遡るギョベクリ・テペは、動物の姿が精巧に彫刻された巨大な T 字型の石柱群である。狩猟採集民の遊牧時代とされた時期に、このような複雑で組織化された建造物が存在したことは、文明の始まりに関する多くの概念を覆した。

これらの建造物、そして他の多くのもの（イースター島のモアイ像、ペルーのナスカの地上絵、古代都市サクサイワマンなど）は、しばしば、正史の年代に従ってそれらを建設した文明のものとされるレベルをはるかに超えた技術レベル、労働組織能力、そして自然科学への理解を示している。

- **「場違いな」遺物（オーパーツ） – 時間に挑戦するパズルのピース：**

オーパーツとは、その存在が、その時代の既知の技術レベルとは不釣り合いに見える考古学的地層や歴史的文脈の中で発見された遺物を指す用語である。

☆ **バグダッド電池（イラク）**：銅の筒と鉄の棒を含む粘土の壺で、約 2000 年前のものとされ、古代人が電気を使用したという明確な証拠はないものの、初期の電池の一種として機能した可能性があると考えられている。

☆ **アンティキティラ島の機械（ギリシャ）**：古代の難破船から引き揚げられたこの複雑な機械は、数十個の青銅製の歯車で構成され、紀元前 2 世紀頃のものとする。これは古代の「天文計算機」の一種と考えられており、太陽、月、そして惑星の動きを予測する能力を持っていた。これはその時代にとって驚くべき技術的成果である。

☆ **ピリ・レイスの地図（トルコ）**：オスマン帝国の提督ピリ・レイスによって 1513 年に描かれた世界地図の一部であるこの地図は、南アメリカの海岸線、さらには氷に覆われていない南極大陸の一部をかなり正確に描写していることで



驚きを呼んでいる。これは、その時代の探検や地理的知識を凌駕していなければ不可能なことのようと思われる。

☆ **クレルクスドルプの球体（南アフリカ）**：いくつかには周囲に平行な溝がある小さな金属球で、数十億年前の堆積岩層から発見され、その人工的な起源についての疑問を投げかけている。

これらのオーパーツは、一部は自然または通常の解釈が可能かもしれないが、多くの場合、依然として難解な謎であり、失われた技術能力や知識の可能性を示唆している。

これらの偉大な建築物と「場違いな」遺物は、全体として見たとき、人類の過去についての別の物語、つまり、頂点に達しては衰退し、今日の私たちが発見するための曖昧な痕跡を残した文明周期の物語を語っているように思われる。

- **提起される問い：** 地球上の文明の歴史は、私たちが普段考えているような単純な直線的な進化の道筋を本当にたどったのだろうか？ それとも、正史の書物が記録しているよりもはるかに先進的な文明が、私たちが今日まだ完全には理解も再現もできない知識と技術をもって、かつて存在したのだろうか？ これらの建造物や遺物は、単なる特殊なケースなのか、それとも、モハン氏がその物語の中で明かしたように、時間と文明の「リセット」によって消し去られた「輝かしくも悲壮な章」の残された断片なのだろうか？

### 3) 古代の予言と奇妙な一致

世界中の古代文化における最も魅力的で謎に満ちた側面の一つは、無数の予言の存在である。これらのメッセージは、しばしば神聖な文書、石の彫刻、あるいは世代から世代へと口伝えで伝えられ、世界の周期、大変動の時代に関する深い理解を含んでいるように見える。そして注目すべきは、しばしば、一つの時代の終わりと新しい時代の始まりに関連する、未来の重大な出来事に関する

予報があることである。それは通常、神々、救世主、あるいは覚者たちの再臨を伴う。

➤ **世界の周期と新時代に関する予言の全世界的な普及：**

驚くべきことに、これらの予言のモチーフは、いくつかの単一の文化に限定されるものではなく、地理的に何千キロ、時間的に何千年と離れていても、ほぼすべての大陸と異なる精神的伝統において出現する。

☆ **マヤ人（中央アメリカ）：** マヤ人の有名な長期計暦（ロングカウント・カレンダー）は、約 5,125 年の大周期を持ち、2012 年 12 月 21 日に終了した。これは多くの人々によって、文字通りの世界の終わりではなく、大きな転換、一つの世界の終わりと新しい世界の始まりのしるしと解釈された。彼らの文書もまた、それ以前の世界の創造と破壊の周期について語っている。

☆ **ホピ族（北アメリカ）：** ホピ族の伝説は、人間の道徳的退廃によって存在し、破壊された多く

の「世界」について語っている。彼らは、私たちが「第四の世界」に生きており、より平和な「第五の世界」に入る前に、「浄化の日」に近づいていると信じている。彼らはまた、「パハナ」（失われた白人の兄弟）あるいは救世主の再臨に関する予言も持っている。

☆ **古代エジプト**：エジプトの文書は、マヤのような明確な予言体系はないものの、宇宙の周期（例：「ゼプ・テピ」－原初の時）と再生の概念を含んでいる。一部の研究者は、ソティス周期（シリウス星に関連）が、大きな歴史的段階に関する理解を秘めている可能性があるとして主張している。

☆ **聖書（ユダヤ教とキリスト教）**：新約聖書のヨハネの黙示録は、終末の時代、善と悪の戦い、最後の審判、そして「新しい天と新しい地」を設立するためのキリストの再臨を象徴的に描写している。旧約聖書もまた、メシアに関する多くの予言を含んでいる。

☆ **ヒンドゥー教**：ヒンドゥー教における「ユガ」（時代）の概念は、サティヤ・ユガ（黄金時

代)、トレーター・ユガ、ドヴァーパラ・ユガ、そしてカリ・ユガ(鉄の時代、現在の道徳的退廃と対立の時代)という四つの時代を含む、一つの大きな宇宙周期(マハー・ユガ)を描写している。カリ・ユガが終わった後、サティヤ・ユガの再確立とともに新しい周期が始まり、それは通常、ヴィシュヌの最後のアヴァターラであるカルキの出現によって予告される。

☆ **仏教：**いくつかの仏教経典もまた、「末法」の時代(仏法の衰退期)について語っており、その後、未来の仏(弥勒仏)が出現し、正法を再び興し、衆生を解脱へと導くとされている。

☆ **その他の東洋の予言：**中国(例：「推背図」の予言)、ベトナム(例：「グエン・ビン・キエム」の予言)のような他の多くのアジア諸国もまた、歴史的な出来事、王朝の交代、そして未来の特別な時期を予報する有名な予言を持っている。

☆ **北欧神話(スカンジナビア)：**ラグナロクは、神々の最後の戦いを描写し、現在の世界の破壊と、より良い新しい世界の再生へと繋がる。

➤ **驚くべき共通点：**

異なる言語、象徴、文化的背景で表現されてはいるが、これらの予言はしばしば注目すべき共通点を共有している。

☆ **周期の観念：** 歴史は直線ではなく、盛衰、浮き沈みの周期の連続である。

☆ **終焉に繋がる道徳的退廃：** 一つの周期の終わりは、しばしば人間の道徳的墮落、神聖な原則からの逸脱と結びついている。

☆ **大変動、浄化の時期：** 新しい時代が始まる前には、通常、混乱、天災、戦争、あるいは大きな試練の段階がある。

☆ **神／救世主／覚者の再臨：** 神聖な人物または神聖な力が現れ、善人を救い、悪人を罰し、人類をより良い新時代へと導く。

☆ **人間の選択：**多くの予言は、この転換期における個人の選択（善と悪、信仰と懐疑の間）の重要性を強調している。

これらの予言が、世界中で驚くべき類似点をもって存在することは、古代人の認識能力と、時間および歴史の本質について、深い問いを投げかけている。

- **提起される問い：**これらの予言は、単に人間の想像力の偶然の一致なのだろうか、それとも、古代文明が何らかの方法で把握した、宇宙の運行法則と歴史周期に関する深い理解を反映しているのだろうか？
- それらは、未来を見通す能力を持つ個人や集団、「予言者」や特別な能力を開いた修煉者から伝えられたメッセージなのだろうか？あるいは、それらは前の文明周期から残された記憶、後の世代のために残された警告と希望であり、多くの人々が歴史的な転換点に立っていると信じる現代において、私たちが徐々に認識しつつある、より大きな計画の一部なのだろうか？

## 4) 「前世記憶」の現象と死後の意識に関する研究

人類の広大な謎の絵図の中で、肉体の死後における意識の存在と、再生あるいは輪廻の可能性に関する問いは、常に最も深い関心と議論を引きつけてきたテーマの一つである。現代の主流科学は、意識を脳活動の産物と見なし、脳が活動を停止すると意識も終わるとする傾向があるが、別の可能性を示唆する注目すべき現象や研究も存在する。

### ➤ 子供の前世記憶現象 – 時を超えた記憶：

世界中、輪廻への信仰が深く根付いている東洋文化から、現代の西洋社会に至るまで、通常 2 歳から 7 歳の子供が、自らの「前世」について自然かつ詳細に語るという事例が何千件も記録されている。

#### ■ 事例の共通点：

- ◇ **具体的な詳細：** これらの子供は、しばしば「前世」での名前、場所、家族構成、職業、



重要な出来事、さらには死因に至るまで、非常に具体的な情報を提供する。

- ◇ **強い感情：** 子供たちは、前世の記憶の中の人々や場所に対して、しばしば強い感情（懐かしさ、恐怖、愛情など）を示す。
- ◇ **異常な行動：** 一部の子供は、現在の年齢や教育環境とは不釣り合いな行動、好み、あるいは技術を示すことがあるが、それは彼らが語る人生と一致している（例：車の運転を習ったことのない子供が、古い車種の操作方法を詳細に説明できる、あるいは、今世で溺れた経験がないにもかかわらず、前世で溺死したことを覚えていて水を怖がる）。
- ◇ **対応する母斑や先天性異常：** 注目すべきいくつかの事例では、子供が持つ母斑や先天性異常が、彼らが自分だと主張する故人の傷や身体的特徴と驚くほど一致することがある。

- **科学的研究：** 故人となった精神科医イアン・スティーンソン博士と、後のヴァージニア大学（米国）の彼の同僚たちは、何十年にもわたって、世界中の子供の前世記憶に関する何千もの事例を体系的に研究した。彼らの業績は、多くの書籍や科学論文に記録されており、想像、詐欺、あるいは子供が偶然情報を得たといった通常の解釈の可能性を排除しようと試みた。それらの事例の多くは、調査の結果、子供の現在の家族が以前には全く知らなかった、特定の故人の人生と詳細が一致することが確認されている。

➤ **臨死体験（Near-Death Experiences - NDEs）** –  
**「向こう側」を垣間見る：**

NDE は、死の瀬戸際にあった人々、あるいは臨床的に死亡が宣告された後に蘇生した人々によって報告される体験である。個人的な違いはあるが、多くの NDE は、体験者の文化的背景、宗教、年齢に関わらず、驚くべき共通の要素を共有している。

- ☆ **体外離脱体験（Out-of-Body Experience - OBE）**：多くの人が、自分の意識が肉体から離れ、上方に浮遊しながら周囲で起きていること（例：医師が自分を救おうとしているのを見る、会話を聞く）を観察した感覚を報告する。注目すべきは、一部の人々が、意識が体内に限定されていては到底知り得ないはずの正確な詳細を後から描写できることである。
- ☆ **光に向かって暗いトンネルを通過する**：一般的な体験として、暗い空間、しばしばトンネルとして描写される場所を高速で移動し、その先にある輝かしく、暖かく、愛に満ちた光源に向かう感覚がある。
- ☆ **「光の存在」あるいは亡くなった親族との出会い**：多くの人が、光り輝く生命体、しばしば導き手、天使、あるいは亡くなった愛する人々として感じられる存在に出会ったと報告し、これらの出会いから平安と無条件の愛を感じる。
- ☆ **ライフレビュー（人生回顧）**：一部の人々は、自分の人生全体あるいは重要な瞬間を、しばしば早送りのフィルムのように振り返る体験をし、

自分の行動が他者に与えた影響を感じ取ることができる。

☆ **平安、幸福感、そして戻りたくないという感覚：**

肯定的な NDE を体験した人々の大多数は、深く、穏やかで、至福の感覚を描写し、そのあまりに、しばしば自分の肉体に戻りたくないと感じる。

☆ **体験後の深い変化：** NDE を体験した人々は、死への恐怖の軽減、思いやりの増加、そして人生の意味についてのより深い感覚といった、生活態度、価値観、そして精神的な信念における長期的な変化をしばしば報告する。

レイモンド・ムーディ博士、ケネス・リング博士、あるいはピム・ヴァン・ロンメル博士らによる NDE に関する科学研究は、これらの現象を理解しようと試みてきた。脳の生理学に基づいたいくつかの説明（酸素欠乏、エンドルフィンの放出など）が提唱されているが、それらは通常、NDE のすべての側面、特に、脳が機能していないか、非常に弱くしか機能していないとされる間

に、明晰な認識能力と正確な情報収集が可能であるという点を説明することはできない。

前世記憶の現象と臨死体験の両方は、意識が必ずしも肉体に依存するものではなく、死後も存在し続ける可能性、そして、前世からの記憶や経験を「持ち越す」可能性があることを示唆している。

- **提起される問い：** 意識は本当に肉体の死と共に終わるのか、それとも、世界中の多くの古代の精神的伝統で言及されてきた輪廻や再生といった概念のように、この物質的な生活を超えた何らかの存在があるのだろうか？ もし記憶が多くの生涯を通じて存在しうるなら、それは「自己」の真の本質と存在の目的について何を物語っているのか？ これらの体験は、人間が単なる生物学的実体であるだけでなく、モハン氏がその分かち合いの中でほのめかしたように、

多くの生涯を通じて学び、進化する旅の途中にある魂であることの証拠なのだろうか？

## 5) 地質学的記録と神話における地球規模の大災害の痕跡

モハン氏が言及した「大浄化」あるいは文明の「リセット」という観念は、単に精神的なアイデアに留まらない。地球の地質学的記録と人類の豊かな神話の宝庫に目を向けると、遠い過去に起こり、惑星の表面を再形成し、かつて存在した文明を一掃した可能性のある、悲劇的で地球規模の出来事を示唆する兆候があるように思われる。

### ➤ 地質学的記録からの証拠：

地質学者たちは、地球が激しい変動の時代を経験し、大量絶滅や大規模で急激な環境変化を引き起こす可能性のある出来事があったことを示す多くの証拠を発見してきた。

- **大量絶滅イベント：** 地球上の生命史は、少なくとも 5 つの大きな大量絶滅イベント（「ビッグファイブ」）によって特徴付けられる。これらは、比較的短い地質学的期間内に、生物種の相当な割合が姿を消した出来事である。最も有名なのは、約 6600 万年前に起こった K-Pg 境界（白亜紀-古第三紀境界）の絶滅イベントで、（鳥類の祖先を除く）恐竜や他の多くの生命体を一掃したとされ、巨大な隕石の衝突（チクシュルーブ衝突体）としばしば関連付けられる。ペルム紀-三畳紀境界の絶滅イベント（約 2 億 5200 万年前、通称「大絶滅」 - The Great Dying）のような他の絶滅イベントは、さらに悲劇的で、海洋生物種の最大 96%、陸生の脊椎動物種の 70%を一掃した。これらのイベントの原因は未だ議論の対象であり、隕石衝突、大規模な火山噴火（巨大火成岩岩石区）、極端な気候変動、あるいは海水準の変動などが考えられる。
- **メガフラッド（超巨大洪水）の痕跡：** 世界の多くの場所で、地質学者たちは、現代史で記録されたいかなる洪水をもはるかに超える、想像を

絶する規模と威力を持つ洪水の証拠を発見している。例：

☆ **チャネルド・スキャブランド（米国北西部）：**

この地域には、巨大な峡谷、干上がった滝、そして巨大な砂礫のリップル（giant current ripples）があり、これらは最終氷期の終わりに巨大な氷河湖（ミズーラ湖など）が突如決壊し、短時間で膨大な量の水を放出したことによって形成されたと考えられている。

☆ **イギリス海峡：** この海峡は、約 45 万年前と 16 万年前に、北海の自然の氷のダムが決壊した際に発生した二度の超巨大洪水によって形成されたという仮説がある。

☆ **黒海：** 研究によれば、黒海の海水準は、地中海の水がボスポラス海峡を越えて流れ込んだ際に非常に急速に上昇し（約 7,500 年前）、これが大洪水に関するいくつかの伝説のインスピレーション源となった可能性がある。



- **急激な気候変動：** アイスコア、深海堆積物、その他の古気候データは、地球が過去に非常に急速かつ極端な気候変動の時代を経験したことを示しており、気温はわずか数十年または数世紀の間に数度 C 上昇または下降した可能性がある。ヤンガー・ドライアス期（約 12,900～11,700 年前）は、急激な寒冷化とその後の急速な温暖化の giai đoạn（段階）の一例であり、巨大な氷床の融解や彗星・隕石の衝突に関連している可能性がある。

➤ **世界共通の大洪水伝説における類似点：**

ジャック・ヴォスとモハン氏の会話で言及されたように、世界中の文化の神話における最も驚くべき類似点の一つは、ほぼすべての生命を滅ぼした地球規模の大洪水についての物語である。そこでは、神あるいは聖なる存在の導きの下、ほんの少数の人々（と動物）が舟か何らかの救助手段によって生き残ったとされる。

- ✧ **地球規模の範囲：** これらの物語は、中東地域（聖書のノアの物語やシュメールのギルガメッシュ叙事詩のウトナピシュティムなど）に限定されず、ギリシャ（デウカリオンとピュラー）、インド（マヌと魚マツヤ）、中国（禹の治水、ただし完全な破壊というよりは洪水制御の性格が強い）、アメリカ大陸の先住民族（例：ホピ族、アステカ、インカ）、オーストラリア、その他多くの場所で見られる。
- ✧ **原因：** 洪水の原因は、通常、人間の道徳的退廃に対する神々の罰とされる。
- ✧ **生存と再建：** 常に一人（または数人）が、その正義ゆえに選ばれ、災害を予告され、生き残る方法を教えられ、その後、新しい人類の祖先となる。

文化的な背景によって細部の違いはあるものの、大洪水伝説の普及とその核心的な類似点は、多くの研究者に、それらがかつて実際に起こった出来事に関する人類の集合的記憶ではないかという問いを抱かせている。

地質学からの痕跡と神話からのこだまは、共に、大災害が定期的に地球の表面を「浄化」し、新たな始まりのための条件を整えた、変動に満ちた過去を指し示しているように思われる。

- **提起される問い：** モハン氏が語った文明の「リセット」は、科学が絶滅イベント、急激な気候変動、あるいは超巨大洪水を通じて徐々に発見している物理的な痕跡を残したのだろうか？ 大洪水に関する伝説は、単なる想像の産物ではなく、地球の大きな「浄化」を記録した、時間と共に変形した歴史的記憶なのではないだろうか？ もしそのような災害がかつて起こったのであれば、それらは何らかの周期に従うのか、そして私たちは未来に立ち向かうために、過去の教訓から何を学ぶことができるのだろうか？

\* \* \*

# パート C： 宇宙の謎

---

## 1) 暗黒物質と暗黒エネルギー

現代の天体物理学および宇宙論における最も驚くべき、そして挑戦的な発見の一つは、私たちが観測できる宇宙、すなわちすべての恒星、銀河、惑星、そして人間を含めたものが、宇宙の総質量・エネルギーのごく一部しか占めていないという認識である。残りの大部分は、科学者によって「暗黒物質」および「暗黒エネルギー」と名付

けられた、完全に見えず謎に満ちた何かで構成されているようである。

➤ **暗黒物質（ダークマター）：**

- **存在の証拠：** 暗黒物質の存在が最初に示唆されたのは 1930 年代、天文学者フリッツ・ツビッキーがかみのけ座銀河団を観測した時である。彼は、銀河団の縁にある銀河が、観測可能な物質（恒星、ガス）の重力によって引き留められるには速すぎる速度で動いていることに気づいた。これは、光やいかなる電磁波も発しない、重力を加えるために必要な大量の「隠れた」物質が存在することを含意していた。

その後、他の多くの証拠も暗黒物質の存在を裏付けている。

- ☆ **渦巻銀河の回転曲線：** 渦巻銀河（我々の天の川銀河など）の縁にある恒星は、観測可能な物質だけを考慮した場合のニュートンの重力法則の予測とは異なり、中心からの距離に

応じて速度が低下することなく、ほぼ一定の速度で銀河の中心を周回している。これは、銀河を取り巻く巨大な暗黒物質のハローの存在を示している。

☆ **重力レンズ効果**： 遠方の銀河からの光は、大きな銀河団を通過する際に曲げられ、歪んだり、二重になったりする像を作り出す。この曲がり具合は、通常、銀河団内の観測可能な物質の量から予測されるよりも大きく、大量の暗黒物質の存在を示している。

☆ **宇宙マイクロ波背景放射（CMB）**： CMBの温度のわずかな揺らぎは、初期宇宙の物質組成に関する情報を提供し、観測データと最もよく一致するモデルはすべて、暗黒物質の存在を必要とする。

■ **謎に満ちた本質**： その存在に関する多くの間接的な証拠があるにもかかわらず、暗黒物質の真の本質は、現代物理学における最大の謎の一つである。それは光や他の形態の電磁放射と相互作用しない（あるいは非常に弱くしか相互作用しない）ため、「暗く」なり、直接観測するこ

とができない。また、通常物質のようなバリオン（陽子、中性子）で構成されてもいない。

科学者たちは、WIMP（弱く相互作用する重い粒子）、アクシオン、あるいは重いニュートリノなど、暗黒物質粒子の多くの候補を提唱してきたが、直接的な実験的証拠はまだ見つかっていない。

- **宇宙における割合：**現在の推定によると、暗黒物質は宇宙の総質量・エネルギーの約\*\*27%\*\*を占めており、これは通常物質（約 5%）の 5 倍以上である。

➤ **暗黒エネルギー（ダークエネルギー）：**

- **存在の証拠：**1990 年代後半、二つの独立した天文学者グループが、遠方の Ia 型超新星を観測した際に、驚くべき発見をした。宇宙の膨張は、重力によって減速するどころか、**加速**しているというのである。

この加速膨張を説明するために、科学者たちは「暗黒エネルギー」という概念を提唱した。これは、空間全体に均一に分布し、負の圧力を持ち、反重力のように作用して宇宙をますます速く膨張させる、謎のエネルギー形態である。

- **さらに謎に満ちた本質：** 暗黒物質がすでに謎であるとするば、暗黒エネルギーはさらに輪をかけて謎である。その本質が何であるかは、全く理解の範囲外にある。いくつかの仮説には以下が含まれる。

- ◇ **宇宙定数：** アインシュタインが一般相対性理論の方程式に導入し、その後取り除いた宇宙定数は、真空の固有エネルギーを表している可能性がある。

- ◇ **スカラー場または「クインテッセンス」：** 時間と空間に応じて変化する、動的なエネルギー場の一形態。

- ◇ **この現象を説明するために、新しい重力理論が必要とされるかもしれない。**



- **宇宙における割合：** 暗黒エネルギーは宇宙における支配的な成分であるとされ、総質量・エネルギーの約\*\*68%\*\*を占めている。

暗黒物質と暗黒エネルギーの存在は、私たちが宇宙について知っていることが、巨大な氷山の水面上に出ている部分に過ぎないことを示している。私たちは、その成分の 95%が、見ることができず、触れることもできず、その本質についてほとんど何も理解していない宇宙に生きている。このことは、宇宙の構造、進化、そして最終的な運命について、非常に深い問いを投げかけている。

- **提起される問い：** 暗黒物質と暗黒エネルギーは、実際には何なのか？ それらは、私たちの現在の感覚や科学機器では感知も測定もできない、他の空間層や次元に存在する物質やエネルギーの形態なのだろうか？ それらの存在こそが、この宇宙が私たちが慣れ

親しんでいる三次元物理モデルよりもはるかに複雑で多層的であり、モハン氏が異なる空間層や生命形態について共有したように、私たちがまだ解明し始めたばかりの宇宙の法則や力が存在することのしるしなのではないだろうか？

## 2) 地球外生命の存在可能性とフェルミのパラドックス

私たちが宇宙で孤独な存在なのかどうかという問いは、何千年もの間、人間の想像力を掻き立ててきた。宇宙の広大な規模に関する理解が深まるにつれて、地球外の生命や文明が存在する可能性は、ますます合理的であるように思われる。しかし、宇宙からの驚くべき沈黙は、解決困難なパラドックスを提起している。

### ➤ 広大な宇宙と生命の確率：

- **宇宙の規模：** 観測可能な宇宙には、数千億、さらには数兆の銀河が含まれている。我々の天の

川銀河のような各銀河には、さらに数千億の恒星が含まれている。近年、何千もの太陽系外惑星が発見され、その多くが、液体の水が表面に存在する可能性のある温度の「ハビタブルゾーン」に位置していることは、生命が他の多くの場所で芽生えた可能性をさらに高めている。

- **ドレイクの方程式：** 1961 年、天文学者フランク・ドレイクは、我々の銀河系内に存在する、交信可能な文明の数を推定するための有名な方程式を構築した。この方程式には、恒星の形成率、惑星を持つ恒星の割合、各恒星系におけるハビタブルゾーンの惑星の数、生命が発展する惑星の割合、生命が知的文明に発展する割合、交信可能な技術を開発する文明の割合、そしてそれらの文明の平均寿命といった要素が含まれる。ドレイクの方程式の多くの要素は未だ推測の域を出ないが、慎重な見積もりでさえ、天の川銀河だけでも数千、あるいは数百万の文明が存在する可能性がしばしば示される。

➤ **フェルミのパラドックス – 「彼らは一体どこにいるのか？」：**

多くの地球外文明が存在する高い確率に直面し、物理学者エンリコ・フェルミは 1950 年、非公式な会話の中で、今日フェルミのパラドックスとして知られる、単純だが深遠な問いを投げかけた。「もしそれほど多くの地球外文明が存在し、その一部が私たちより何百万年、あるいは何十億年も長く存在し、卓越した技術レベルを持っているのなら、なぜ私たちは彼らの存在の明確な証拠——宇宙船も、無線信号も、大規模な技術的建造物の痕跡も——を全く見ないのか？」

この宇宙の沈黙、地球外文明に関する反論の余地のない証拠の欠如は、確率計算との間に大きな矛盾を生み出している。

➤ **フェルミのパラドックスに対する考えられる説明：**

フェルミのパラドックスを説明しようとする非常に多くの仮説が提唱されており、いくつかの主要なタイプに分類できる。

■ **彼らは存在しない（あるいは非常に稀である）：**

☆ **レアアース仮説：** 複雑な生命と知的文明の形成には、非常に稀な多くの天文的および地質学的要素の組み合わせが必要であり、地球は宇宙において唯一無二、あるいは極めて稀なケースである可能性があると主張する。

☆ **グレートフィルター：** この仮説は、生命が単純な形態から恒星間を旅する能力を持つ文明へと発展する過程で、乗り越えるのが非常に困難な何らかの障壁（「フィルター」）が存在すると主張する。このフィルターは、私たちの過去にある可能性も（例：生命の形成自体が極めて困難）、あるいは、より憂慮すべきことに、私たちの未来にある可能性もある（例：文明はある技術レベルに達すると自己破壊する傾向がある）。

- **彼らは存在するが、私たちはまだ彼らを発見していない**（あるいは、彼らは私たちに発見されたくない）：

- ◇ **距離が遠すぎる**：宇宙は広大すぎて、先進的な文明にとってさえ、恒星間の移動や交信は困難すぎるか、費用がかかりすぎるのかもしれない。

- ◇ **存在時期の違い**：文明は異なる時期に出現し、消滅する可能性があり、二つの文明が共存し、交信可能な「窓」の期間は非常に短いのかもしれない。

- ◇ **技術の違い**：彼らの交信技術は、私たちが探しているものとはあまりにも先進的か、全く異なるのかもしれない（例：彼らは電波を使わない）。

- ◇ **動物園仮説またはプライム・ディレクティブ**：先進的な文明は私たちのことを知っているが、私たちが自然に発展できるように、意図的に干渉しないようにしているのかもしれない。

それは、私たちが保護区の動物を観察するのと同じである。

- ◇ **彼らはすでにここにいる、あるいは存在を隠している：** 彼らはすでに地球に来ているか、秘密裏に私たちを観察しており、その存在は彼ら自身、あるいは地球上の勢力によって隠蔽されているのかもしれない。

## ■ **彼らの本質があまりにも異質である：**

- ◇ 彼らの知性は私たちとはあまりにも異質で、私たちが彼らのしるしを認識できなかったり、彼らの意図を理解できなかったりするのかもしれない。

フェルミのパラドックスは、未だ解決策のない大きな問いの一つであり、私たちに、宇宙における自らの位置と、生命および知性の本質について深く思索することを強いている。

- **提起される問い：** 地球外生命は、確率計算が示唆するように、本当に普遍的なのだろうか？ もしそうなら、なぜ彼らは私たちと公に連絡を取ったり、姿を現したりしないのか？ 接触が制限されたり、隠蔽されたりする、私たちがまだ知らない深遠な理由、宇宙の規則、あるいは何らかの干渉があるのだろうか？あるいは、モハン氏が共有したように、「地球外生命体」と地球人を含む文明間の相互作用は、正史と現代科学がまだ完全には把握できていない目的と静かなる闘争を伴い、複雑な形で過去から現在にかけて行われているのだろうか？

### 3) 宇宙の起源と運命

成分や生命存在の可能性に関する謎の他に、宇宙そのものに関する最も根源的な問い——それはどこから始まり、どこへ向かうのか——は、依然として人類の理解に対する最大の挑戦である。科学は宇宙論モデルの構築において顕著な進歩を遂げたが、多くの核心的な問いは未解決のままである。



➤ **宇宙の起源 – ビッグバン理論と未知の事柄：**

- **ビッグバンモデル：** 現在、ビッグバンモデルは、宇宙の始まりと初期の進化を記述するために最も広く受け入れられている理論である。このモデルによれば、宇宙は約 138 億年前に、非常に高温高密度の状態、しばしば「特異点」と呼ばれる状態から始まった。この初期状態から、宇宙は極めて急速な膨張（インフレーション）の段階を経て、その後も膨張と冷却を続け、素粒子、原子（主に水素とヘリウム）、そして最終的には今日私たちが観測する恒星、銀河、そしてより大きな構造の形成へと繋がった。

- **ビッグバンの証拠：** ビッグバンモデルを支持する主要な証拠は三つの柱からなる。

◇ **宇宙の膨張（ハッブル-ルメートルの法則）：**  
観測によれば、遠方の銀河は私たちから遠ざかっており、その移動速度は距離に比例している。これは、宇宙が過去のある一点から膨張していることを示唆している。

☆ **宇宙マイクロ波背景放射（CMB）**：これは、宇宙がまだ非常に若く、熱かった時代（ビッグバンから約 38 万年後）、陽子と電子が結合して中性の水素原子を形成し、光が初めて自由に移動できるようになった時の放射の残光である。CMB は 1964 年に発見され、ビッグバンモデルの最も成功した予測の一つである。

☆ **軽元素の存在比**：ビッグバンモデルは、ビッグバン後の最初の数分間に形成された軽元素（水素、ヘリウム、リチウムなど）の比率を正確に予測し、それは今日宇宙で観測されるものと一致している。

■ **未解決の問い**：成功しているにもかかわらず、ビッグバンモデルにはまだ限界と未解決の問いがある。

☆ **ビッグバンの「前」に何が起こったか？** ビッグバンモデルは、宇宙の**初期時点以降**の進化を記述するが、それ以前に何が存在したのか、あるいは何がビッグバンを引き起こしたのかを説明することはできない。「ビッグバ

ンの前」という概念は、時間と空間が特異点そのものから始まったとされる一般相対性理論の枠組みの中では、意味をなさないかもしれない。

☆ **初期特異点の本質：** 特異点は、私たちの現在の物理法則（一般相対性理論など）がもはや適用できなくなる点である。それを理解するためには、おそらく量子重力理論のような統一理論が必要であろう。

☆ **地平線問題と平坦性問題：** なぜ宇宙は、遠く離れた領域（地平線）において驚くほど均一なのか、そしてなぜその幾何学的形状はほぼ完璧に平坦なのか？ インフレーションの段階はこれらの問題を解決するために提唱されたが、インフレーション場（インフラトン場）の本質はまだ仮説の段階である。

➤ **宇宙の最終的な運命 – 考えられるシナリオ：**

宇宙の運命は、物質とエネルギーの平均密度、宇宙の幾何学的形状、そして特に暗黒エネルギーの本質を含む、多くの要因に依存する。主要なシナリオには以下が含まれる。

- **ビッグクラッシュ：** もし物質とエネルギーの密度が十分に大きければ、重力が最終的に優勢になり、膨張が減速し、停止し、その後宇宙は収縮を始め、最終的に始まりの点と同様の特異点に崩壊する。「閉じた」シナリオである。
- **永遠の膨張（ビッグフリーズまたは熱的死）：** もし密度が十分に大きくないか、あるいは暗黒エネルギーが支配し続けるなら、宇宙は永遠に膨張し続ける。恒星は燃料を使い果たして燃え尽き、銀河はますます遠ざかり、最終的に宇宙は冷たく、暗く、空っぽになり、エントロピーが最大の状態に達する。「開いた」または「平坦な」シナリオである。
- **ビッグリップ：** もし暗黒エネルギーが、時間とともに密度が増加する「ファントムエネルギー」の一形態である場合、その反重力はますます強力になり、銀河団、銀河、恒星系、惑星から、

原子や素粒子に至るまで、宇宙のすべての結合構造を引き裂く可能性がある。悲劇的な結末のシナリオである。

- **サイクル宇宙論：**いくつかのモデル（エキピロティック宇宙モデルやループ量子宇宙論など）は、宇宙が膨張と収縮の周期を繰り返すか、あるいは各収縮段階の後に新しい「ビッグバン」が引き起こされる可能性を提唱する。これらのモデルでは、ビッグバンは絶対的な始まりではなく、無限に続く宇宙の連鎖における移行段階に過ぎない。

現在、宇宙の加速膨張の観測は、永遠の膨張、あるいはビッグリップのシナリオを支持しているように見えるが、暗黒エネルギーの真の本質は、未だ知られていない決定要因である。

宇宙の起源と運命に関する問いは、単なる純粋な科学的問題ではなく、広大な宇宙の絵図における人間の位置と意味に関する、最も深い哲学的小よび精神的な側面にまで触れるものである。

- **提起される問い：** 宇宙は本当に、単一の「爆発」から始まり、単一の結末に向かっているのだろうか、それとも、古代の哲学やモハン氏が「大周期」と「成・住・壊・滅」の法則について示唆したように、形成、発展、衰退、再生を繰り返す、より大きな周期の一部なのだろうか？ 私たちが知る宇宙の「外側」または「並行」して存在する、何らかの空間層や実在があるのだろうか、そして、現在の科学が探求できる範囲をはるかに超えた、この全運行を支配する何らかの超越的な法則が存在するのだろうか？

\* \* \*

## パート D：創造主と超越的知性 に関する思索

---

- 1) ニュートン、ハレー、そして太陽系儀  
－創造主に関する一つの教訓

## ➤ ニュートンとハレーの物語：

自身の名を冠した彗星の軌道を正確に計算したことで知られる天文学者エドモンド・ハレーは、史上最も偉大な科学者の一人であるアイザック・ニュートンの親友であった。しかし、神への深い信仰を持つニュートンとは異なり、ハレーは当初、この複雑な宇宙が創造主によって定められたものだとは信じていなかった。

ある日、ニュートンの家を訪れたハレーは、ニュートンが製作した太陽系の機械模型を目にした。この模型は非常に精巧であった。中心には太陽を象徴する金メッキの球があり、その周りには正しい位置と比率で惑星が配置されていた。クランクを引くだけで、惑星は即座に調和の取れた正確な軌道で動き始め、非常に美しい光景を創り出した。

ハレーは深く感嘆し、この素晴らしい模型を設計し、製作したのは誰かとニュートンに尋ねた。ニュートンは、平然とした表情で答えた。「ああ、この模型は誰も設計も製作もしていないよ。それはただ、様



々な材料が偶然に衝突し、組み合わせあった結果に過ぎないのだ。」

ハレーは信じられないという表情で言った。「そんなはずはない！ どう考えても、誰かがこれを創り出したに違いない。そして、その人物は間違いなく天才だ。」

その時、ニュートンは初めて微笑み、ハレーの肩を叩いて言った。「友よ、この模型は非常に精巧だが、我々の本当の太陽系と比べれば、実に取りに足りないものだ。君でさえ、この単純な模型に製作者がいると信じているのに、それならば、この模型より何億倍も複雑で精巧な太陽系が、全能の神が、その無限の智慧をもって創造されたものではないとでも言うのかね？」

その言葉を聞いて、ハレーははっと目覚めたかのようであった。彼の長年の疑念は消え去った。最終的に、彼もまた、創造主の存在は否定できないものであると信じるようになった。

- **提起される問い：** 宇宙の複雑さ、秩序、そして美しさは、超越的知性の存在を証明する最も雄弁な証拠ではないだろうか？

## 2) 宇宙の「微調整」（ファイン・チューニング） – 采配の痕跡か？

科学者たちが宇宙を支配する基本法則を深く掘り下げるにつれて、驚くべきことを発見した。我々の宇宙は、複雑な構造、そして最も重要なこととして、生命の存在を許容するように、極めて正確に「微調整」されているように見えるのである。多くの基本的な物理定数は、その値が現実のものからほんのわずかでも異なっていれば、宇宙は全く異なり、混沌とし、私たちが知るような生命を宿すことは到底不可能になってしまう。

- **「微調整」の概念：**

「微調整」とは、いくつかの基本的な物理定数の値と宇宙の初期条件が、生命が存在可能な極めて狭い

範囲内に収まっていることを指す。もしこれらの値が、ほんのわずかでもその範囲を外れれば、結果は非常に深刻なものとなる。

- **重力定数（G）**：もし少しでも強ければ、宇宙はビッグバン後にあまりにも速く収縮し、恒星や銀河が形成される十分な時間がなかったかもしれない。もし少しでも弱ければ、物質は恒星や銀河を形成するのに十分なほど集まらなかったかもしれない。
- **微細構造定数（ $\alpha$ ）**：この定数は電磁力の強さを支配する。もしこれが異なっていれば、原子は不安定になるか、あるいは恒星内での核融合プロセス（炭素や酸素のような生命に必要な重元素を生成する）が起こらなかったかもしれない。
- **陽子と中性子の質量比**：これら二つの粒子のわずかな質量差（中性子の方が陽子よりわずかに重い）は極めて重要である。もしこの比率が異なっていれば、宇宙はすべて水素だけになるか、あるいは水や有機化合物を形成するための水素が全く存在しなかったかもしれない。

- **強い核力と弱い核力の強さ：** これらの力は原子核の安定性と放射性崩壊のプロセスを支配する。その強さがわずかに変わるだけで、重元素のない宇宙や、恒星が何十億年にもわたって安定して燃料を「燃やす」ことができない宇宙になった可能性がある。
- **暗黒エネルギーの密度または宇宙定数：** 先に述べたように、暗黒エネルギーの値は理論的な予測に比べて極めて小さいが、もしそれがはるかに大きければ、宇宙はあまりにも速く膨張し、構造が形成されることはなかったであろう。
- **空間の次元数：** 我々は 3 つの空間次元（と 1 つの時間次元）を持つ宇宙に生きている。物理学者たちは、もし空間の次元数が異なっていれば（例えば 2 次元や 4 次元）、恒星を周回する惑星の安定した軌道や、原子の安定した構造は存在し得なかったであろうことを指摘している。

これらの定数が許容される範囲は、しばしば、何十億光年も離れた場所にある極小の的に矢を当てるこ

とや、何十桁もの小数点以下の精度でつまみを調整することに例えられる。

➤ **科学者たちの見解：**

この「微調整」は、多くの科学者や哲学者に深い思索を促してきた。

- 理論物理学者**ポール・デイヴィス**は、この問題について多くを執筆しており、宇宙の微調整は、その存在の背後に「設計」あるいは「目的」があることを示す最も強力な証拠の一つであると主張している。彼はかつてこう述べた。「私にとっては、これらすべての背後で何かが起こっていることを示す強力な証拠がある…この宇宙は意図的に設計されたかのようだ。」
- 物理学者であり神学者でもある**ジョン・ポーキングホーン**もまた、微調整を「創造主のしるし」と見なし、生命が存在できるように宇宙がこれほど精巧に調整されていることが、単なる純粋な偶然であるはずがないと主張している。

- 宗教的な傾向を持たない科学者でさえ、この現象の驚くべきことを認めている。一部は、「多元宇宙（マルチバース）」のような仮説でそれを説明しようと試みる。これは、異なる物理定数を持つ無数の他の宇宙が存在し、私たちは偶然、生命に適した定数を持つ宇宙に生きている（人間原理）という考えである。しかし、多元宇宙仮説は現在、直接的な実験的証拠がなく、多くの哲学的な問題も提起している。

宇宙定数の「微調整」は、現代科学の最も驚くべき発見の一つであり、探求すればするほど、我々が生きる宇宙の奇跡と謎を感じさせるものである。

- **提起される問い：** 生命の存在を許容するための宇宙定数の極めて正確な微調整は、単に無数の可能性の中での幸運な偶然に過ぎないのだろうか、それとも、何らかの目的をもって宇宙を設計した、超越的知性による意図的な創造の、否定できないしるしなのだろうか？ もし宇宙が生命のために「設計」されたのであれば、その生命、特に人間のような意識を持つ

生命は、この壮大な宇宙の絵図の中でどのような役割と意味を持つのだろうか？

### 3) 偉大な科学者たちと創造主への信仰

ニュートンとハレーの物語は、特殊なケースではない。科学の歴史を通じて、自然界に関する我々の理解の基礎を築いた多くの傑出した頭脳もまた、超越的な秩序、創造主、あるいは宇宙の調和のとれた運行と精巧な法則の背後にある宇宙的知性に対して、深い信仰や畏敬の念を表明してきた。

この信仰は、必ずしも特定の組織化された宗教の形をとる必要はなく、しばしば、彼らが自然の複雑さと美しさを深く探求する科学的発見の過程そのものから生まれる。彼らは、純粋な偶然性を超えた、何かより大きなものを感じるのである。

以下は、いくつかの代表的な例である（簡潔に言及する）。

➤ **アルベルト・アインシュタイン（1879-1955）**：相対性理論の父であり、史上最も影響力のある物理学者の一人。人間の生活に干渉する人格神を信じてはいなかったが、アインシュタインは「自然に現れる知性」と「スピノザの神」——宇宙の秩序と法則と同一視される神——に対して、しばしば深い敬意を表明した。彼はかつてこう述べている。「私は神の考えを知りたい。残りは些細なことだ。」あるいは「宗教なき科学は不完全であり、科学なき宗教は盲目である。」彼にとって、物理法則を発見することは、宇宙を創造した「心」の調和と美しさに触れる一つの方法であった。

➤ **マックス・プランク（1858-1947）**：物理学に革命をもたらした量子力学の創始者。プランクは信仰心厚い人物であった。彼は、科学と宗教は矛盾するのではなく、互いに補完し合い、共に真理の探求を目指すものだと信じていた。彼はかつてこう述べた。「宗教も自然科学も、神への信仰を必要とする。信者にとって神は始まりに立ち、物理学者にとっては、神はすべての思索の終わりに立つ。」



- **ヨハネス・ケプラー（1571-1630）**：惑星の運動法則を発見した、ドイツの傑出した天文学者。ケプラーは深く敬虔な信者であり、自身の科学研究を、神によって創造された「世界の調和」を探求する方法と見なしていた。彼は、宇宙が、創造主の知性を反映した、完璧な数学的・幾何学的原理に従って設計されていると信じていた。
- **マイケル・ファラデー（1791-1867）**：電磁気学と電気化学の分野に多大な貢献をした、イギリスの物理学者兼化学者。ファラデーはサンデマン教会の熱心な信者であった。彼の宗教的信仰は、彼の人生と科学研究において重要な役割を果たし、彼に自然界における秩序と統一性の感覚をもたらした。
- **サー・アイザック・ニュートン（1643-1727）**：先に述べたように、ニュートンは偉大な科学者であるだけでなく、神学者でもあった。彼は、太陽系の秩序と美しさは偶然に現れるはずがなく、賢明で全能な創造主の産物でなければならないと信じていた。

このリストは、科学史上の他の多くの名前ですらに長く続けることができる。注目すべきは、これらの多くの科学者にとって、自然の複雑で精巧な法則を発見することが、超越的な起源への信仰を減退させるのではなく、逆に、宇宙に秘められた偉大さと知性に対する彼らの畏敬と感嘆をさらに強固にしたことである。

- **提起される問い：** なぜ、理性と実験を用いて宇宙を理解するために生涯を捧げた多くの偉大な科学的頭脳が、超越的な起源、創造主、あるいは宇宙的知性に関する同様の信仰に至ったのだろうか？ 科学が進歩すればするほど、それは創造主の役割を排除するどころか、逆に、宇宙と我々自身の存在における、知的設計とより深遠な目的の痕跡をさらに明らかにするのではないだろうか？

\* \* \*

## パート E： 地球外生命体 – 仮説、 証拠、そして未解決の問い

---

## 1) 公式報告と最近の開示（例：ペンタゴンによる UAP 報告）

近年、未確認航空現象（Unidentified Aerial Phenomena - UAP）——「未確認飛行物体」（Unidentified Flying Objects - UFO）よりも好まれるようになった新しい用語——を取り巻く秘密のベールが、少なくとも一部の国々では徐々に開かれつつあるようである。政府や軍の機関が、否定や沈黙から、公に認め、研究するという態度へと変化したことは、一般大衆と科学界の大きな注目を集めている。

### ➤ 米国政府および軍の態度の変化：

- **ビデオと文書の機密解除：** 2017 年頃から、特に 2020 年から 2023 年にかけて、ペンタゴン（米国防総省）は、米海軍のパイロットによって記録されたいくつかのビデオを公式に機密解除し、公表した。これらは、既知のいかなる人類の技術をも凌駕すると思われる空力特性と移動能力を持つ飛行物体を示していた。これらの

物体は通常、翼がなく、明確な推進機関もなく、突然加速したり、即座に方向転換したり、あるいはソニックブームを発生させることなく超音速で移動したりすることができた。

- **国家情報長官室（ODNI）の報告書：**2021 年 6 月、ODNI は多くの人々が待ち望んでいた UAP に関する予備報告書を公表した。この報告書は、分析されたほとんどの UAP 事案（2004 年から 2021 年までの 144 件）の起源について最終的な結論を出さなかったものの、以下の点を認めた。

- ◇ ほとんどの UAP は、おそらく物理的な物体である。

- ◇ 一部の UAP は、風の中で静止する能力、風に逆らって移動する能力、突然の機動、あるいは明確な推進手段なしにかなりの速度で移動するといった、異常な飛行特性を伴う先進技術を示しているように見える。

- ◇ 報告書は、これらの UAP が（大多数の事案について）米国または他国の秘密技術である

可能性を排除したが、それらが「その他」の起源を持つ可能性は排除しなかった。

- **専門機関の設立：** 米国は、未確認航空現象タスクフォース（UAPTF）、その後、全領域異常解決室（AARO）のような機関を設立し、UAP に関する報告をより体系的に収集、分析、調査するようになった。
- **議会での公聴会：** 米国議会では、公聴会が公開および非公開で行われ、諜報機関や軍の高官、そして証人（元パイロットを含む）が UAP との遭遇に関する情報を提供した。

➤ 「現在の技術を超えた」特性：

UAP を特に注目すべき、そして説明困難なものにしているのは、その出現だけでなく、報告されている運用特性でもある。

- ☆ 瞬時の加速能力と極めて高い機動性：航空機の構造と人間のパイロットの耐久能力をはるかに超える。

- ✧ ソニックブームや大きな熱量の兆候なしでの超音速飛行。
- ✧ 「ステルス」能力、あるいは突然の出現と消滅。
- ✧ 複数の環境（空中、水中、宇宙空間）での活動。
- ✧ 明確な推進システムや空力制御面がない。

➤ **意義と未解決の問い：**

これらの公式な開示や報告は、まだ多くの制約があり、UAP の起源について決定的な答えを出していないものの、重要な転換点を示した。それらは、これらの現象が実在し、経験豊富な軍のパイロットと先進的なセンサーシステムによって記録され、そして、現在の人類が説明も再現もできない技術的特性を示していることを示している。

これは、すべての UAP が地球外生命体の宇宙船であると自動的に意味するものではない。稀な自然現象、他国の先進的な監視技術（ただし ODN I 報告書は大多数の事案についてこれを排除しようとした）、

あるいは米国自身の未公表の画期的な技術など、異なる事案に対しては多くの異なる説明があり得る。

しかし、一部の UAP が地球外起源である可能性は、特に通常の説明が不十分である場合、多くの人々によって真剣に検討されている仮説である。

- **提起される問い：** これらの公式な開示は、我々の世界と、その中での我々の位置についての理解にどのような意味を持つのだろうか？ 我々は、地球外生命に関するより大きな発見、あるいは少なくとも、我々がかつて知っていたものをはるかに超える技術の存在の発見の入り口に立っているのだろうか？ 政府によるこの慎重な情報公開は、将来のより大きな開示への準備なのか、それとも単に情報の流れを制御し、潜在的な脅威を評価するための努力なのか？ そして、モハン氏のような人々の「見識」は、主流科学がようやく認め、探求し始めたばかりの現象に対して、補足的な視点、別の深みを提供することができるのだろうか？



## 2) 古代遺跡と「古代宇宙飛行士」説

現代の未確認航空現象（UAP）の傍らで、別の思考の流れは、考古学的な遺跡、古代の建築物、そして昔の文明の文書や神話を再解釈することを通じて、遠い過去における地球外生命体と地球との相互作用の証拠を探し求めている。これこそが、「古代宇宙飛行士」説の核心である。

### ➤ 「古代宇宙飛行士」説の主な内容：

エーリッヒ・フォン・デニケン（著書『未来の記憶』）、ロバート・テンブル、ゼカリア・シッチン、その他多くの著者によって広められたこの仮説は、地球外の知的実体が古代および先史時代に地球を訪れ、人類の文化、技術、宗教、さらには生物学の発展に重要な影響を与えたと主張する。

この仮説の支持者たちは、しばしば以下の「証拠」または「示唆」を提示する。

- **「不可能な」巨石建築物と建設技術：** 前の項で述べた異常な古代文明（ギザのピラミッド、プマプンク、サクサイワマンなど）について、この仮説の支持者たちは、これほどの高精度で巨大な石ブロックを建設・輸送する技術は、昔の人々のものとされる道具や知識の能力を超えており、より先進的な技術を持つ生命体からの助けや指導があった可能性がある」と主張する。

- **古代の文書や芸術における「飛行物体」や「天からの生命」の描写：**

- ☆ インドの古代叙事詩（『マハーバーラタ』、『ラーマーヤナ』など）には、「ヴィマナ」——空中、都市間、さらには他の惑星へも移動可能な飛行車——や、破壊的な兵器を用いた空中戦の詳細な描写がある。
- ☆ 聖書には、多くの目を持つ「車輪の中の車輪」が飛翔する描写（エゼキエル書）や、預言者を天に連れて行く火の戦車の描写がある。
- ☆ 世界中の多くの場所の岩や洞窟にある古代の彫刻や壁画（例：イタリアのヴァル・カモニ

カ、アルジェリアのタッシリ・ナジェール）  
には、宇宙飛行士のような奇妙な防護服を着  
た人型や、円盤形の飛行物体が描かれている  
ように見える。

- **一部の古代文明が持つ卓越した天文・数学知識：**  
シュメール人、エジプト人、マヤ人などの建造  
物や文書に見られる、天文周期、太陽系の構造、  
あるいは数学定数（円周率、黄金比など）に関  
する正確な理解は、外部の知識源に由来する可  
能性があるとされる。
- **「天から降りてきた神々」に関する神話：** ほ  
とんどの古代文化には、「天国」や「星々」から  
やって来て、人類に知識、技術、そして法をも  
たらした神々、文明の創始者、あるいは文化英  
雄に関する物語がある。この仮説は、これらの  
「神々」が、昔の人々によって崇拝された、卓  
越した技術を持つ古代の宇宙飛行士、つまり地  
球外生命体であった可能性があると主張する。
- **人類の進化プロセスへの干渉（仮説の一部の分  
派による）：** より過激な研究者の中には、地球  
外生命体が初期の人類の遺伝子に干渉してホモ

・サピエンスを創り出したり、人間と交配して「半神」の家系を生み出したりした可能性がある」とさえ主張する者もいる。

➤ **客観性と反論：**

「古代宇宙飛行士」説は、通常、主流の科学界では広く受け入れられていないことを強調する必要がある。支持者が提示する「証拠」の多くは、考古学者、歴史家、その他の科学者によって、自然の要因、古代の人々の創意工夫と創造能力、あるいは文書や画像の誤った解釈によって説明されることが多い。

例えば、巨石建築物の建設技術は、人力、単純な道具、そして力学の理解を用いた巧妙な方法で実現できた可能性がある。古代文書の描写は、機械の実際の描写というよりは、象徴的、宗教的な比喻である可能性がある。

しかし、それはすべての謎が十分に説明されたという意味ではない。我々を立ち止まらせ、思索させるような問い、遺跡、そして遺物がまだ残っている。

「古代宇宙飛行士」説は、多くの論争があるものの、過去に対する一般大衆の好奇心を刺激し、人類史に関する伝統的な見解に挑戦する新しい思考の方向性を開くことに貢献してきた。

- **提起される問い：** 古代神話における、人類に知識と文明をもたらした「神々」が、実は、昔の人々には理解できず、神格化してしまった、卓越した技術を持つ星々からの訪問者であったという可能性はあるだろうか？ 古代の文書における「空飛ぶ乗り物」や「天からの生命」の描写は、完全に想像力の産物ではなく、過去に実際にあった接触に関する、何世代にもわたって伝えられた曖昧な記憶なのではないだろうか？ そして、もしそれが真実であるならば、これらの「古代の宇宙飛行士」が人類に残した遺産とは何であり、モハン氏が地球外勢力の文明周期への干渉について示唆したように、それは今日、我々にまだ影響を与えているのだろうか？

\* \* \* \* \*



# 著者および THE LIVES MEDIA プロジェクトについて

## 著者について

ジャック・ヴォス(Jack Voss)は、文化、社会、科学、そして精神性について執筆する独立系の作家です。彼の目的は、真実を追求し、良心を目覚めさせ、人類の運命について考察することにあります。

彼の作品の多くは、現実のインタビューをもとにしており、誠実さ、感情の深さ、そして啓発の精神をもって記録されています。

## プロジェクトについて

本書は、THE LIVES MEDIA によって出版されたシリーズの一部です。THE LIVES MEDIA は、時代を超えた響きを保存し広めることを使命とする、グローバルなビジョンを持った独立した出版イニシアチブです。日々のニュースを追いかけるのではなく、私たちは人間の意識の深くに触れることができる本を目指しています。

## 連絡先

- ✧ Website: [www.thelivesmedia.com](http://www.thelivesmedia.com)
- ✧ Email: [editor@thelivesmedia.com](mailto:editor@thelivesmedia.com)
- ✧ QR Code:



## 同プロジェクトの他の作品



THE LIVES MEDIA による他の出版物もご覧いただけます：

- 紅塵、金光 (Red Dust, Golden Light)
  - 政界引退後：その遺産 (After Power: The Legacy)
  - 科学の黄昏と黎明 (Sunset and Sunrise of Science)
  - 紅の帳 (The Red Veil)
  - 時の以前の響き (Echoes Before Time)
  - 俗世間へ (Entering The World)
  - 最後の鐘 (The Last Bells)
  - 我々以前 (Before Us) → 本書
  - 千の人生 (Thousand Lives)
-

この度はお手に取っていただき、誠にありがとうございます。  
真実を探求するあなたの旅路に、神と仏の祝福が  
あらんことを。